

『祠部職掌類聚 諸寺社御條目類』(留書六)

藩法研究会 篠山班

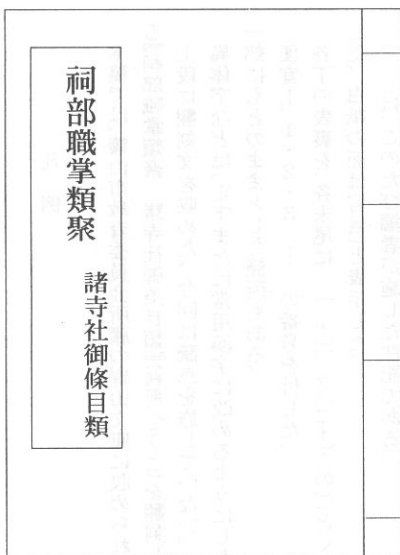
橋本 久
牧田 勲
山田 勉

凡例

- 一 本稿では、篠山市教育委員会所蔵の青山文庫に収められている『祠部職掌類聚 諸寺社御條目類』(祠部ノ五ノ二)を翻刻した。
- 一 上段に翻刻文を収めた。今回は説点を施していない。
- 一 異体字などは、正字または常用漢字に改めるようにした。
- 一 一部にもとのままとした箇所もある。
- 一 便宜上、1・2・3 … の番号を付した。
- 一 各丁の表裏を、各末尾に 「オ」「ウ」「オ」…の「」とく表示した。白紙の面は「白紙」と表示した。
- 一 「」は、このたび編者が施した注記である。

- 一 下段に関連資料・参考資料を掲載した。
- 一 『御当宗令条』『武家厳制録』は、石井良助編『近世法制史料叢書』2・3(創文社 昭和三四年)による。ただし、『武家厳制録』の本文重複分は省略した。また原則として常用漢字を用いた。
- 一 『台徳院殿実紀』『大猷院殿実紀』は、『新訂増補国史大系 徳川実紀』第一巻・第二巻(吉川弘文館 昭和三九年)を用いた。やはり原則として常用漢字を用いた。
- 一 本書の複写・翻刻にあたり篠山市教育委員会および畑治男名誉館長のご配慮をいただいた。記して謝意を表する。
- 一 本稿も、ひきつづき橋本が担当した。

[表紙]



(縦 27.4cm × 横 20.4cm)

[以下、行書体]

[朱印]

筱山文庫

御條目類留書六之卷目錄

1

慶長十五

禁中并公家言上金地院

2

同十八年公家御法度書

3

同廿年 禁中并公家御法度書

4

同十三年飛鳥井家江御判物

5

同廿年武家御條目

1

台徳院殿実紀卷十四 慶長十五年九月 [該記事なし]

2

御当家令条 一一 公家諸法度 慶長十八年六月十六日

諸公家法度

一 公家衆家々之学問、昼夜無油断様可被 仰付事、

一 不寄老若、背行儀法度輩者、急度可処流罪、但依罪之輕重、可

定年序事、

一 昼夜之御番、老若共無懈怠相勤、其外正威儀相調、伺候之時刻如

式目參勤仕様、可被 仰付事、

一夜昼共無指用所、町小路徘徊、堅停止事、

一 公宴之外私而不似合勝負并於不行儀之青侍以下拘置輩者、流罪

同先条事、

右之条々相定所也、從五撰家并伝奏其届有之時、可行武家之

沙汰者也、

慶長十八年六月十六日 家康公御判

板倉伊賀守とのへ

○ 武家嚴制録 一 公家衆御条目 慶長十八年六月十六日

○ 台徳院殿実紀卷十四 慶長十八年六月十六日条

京職板倉伊賀守勝重に。公家条目をつかはさる。公家衆家々の学業。昼夜怠慢なくつとめしむべし。老少をいはず礼法にそむく徒は。遠流に処すべし。尤其罪科の輕重によりて。年月の程限を定むべし。夙夜の朝勤老少ともおこたるべからず。其他

25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
慶長十五右同断	慶長八高野山寺中御法度條々	元和元真言宗御法度書	慶長十四關東真言古義御法度書	同年武州大田庄慈恩寺御法度書	同年常州椎尾山御法度書	同年武州中道院御法度書	同年關東天台宗御法度書	同年關東黑子千妙寺御法度書	慶長十八喜多院江御法度書	慶長十三比叡山御法度書	知恩院上人出世官物之事 御黒印	寛永四諸宗出世之儀板倉周防守江 御黒印	慶長十八 勅許紫衣并法度之儀 廣橋大納言江 御朱印	慶長十四諸僧家修驗之事 聖護院 御朱印三通 三寶院 御朱印四通	評定所御定書	御成御供中馳走次第	元和十乘輿 御免之事	元和五御位之次第	元和二御遺言御遺書
																			〔二オ〕

威儀をつつしめ。朝参の刻限定例を守るべし。昼夜ともにゆへなく市街小路を徘徊あるべからず。公宴の外私に似つかはしからざる勝敗をいどみ。其上無頼の青侍等を家に召置輩は流罪たるべし。かく定められし上は。五摂家并伝奏衆より其事の告あらば。武家より沙汰せらるべしとなり。〔12に続く〕

○『史料綜覧』卷十四 慶長十八年六月十六日
家康、公家衆法度及ヒ勅許紫衣竝ニ山城大徳寺・妙心寺等諸寺入院ノ法度ヲ定メ、武家伝奏権大納言広橋兼勝・所司代板倉勝重ニ付ス、(駿府記、本光国師日記、憲法編年録、時慶卿記、言緒卿記、義演准后日記当代記、「参考」時慶卿記、本光国師日記、妙心寺紫衣成記録)

3
○ 御当家令条 一三 禁中并公家諸法度 慶長二十年七月
禁中并公家諸法度
一天子諸芸能之事、第一御学問也、不学則不明古道、而能政致太平〔者未有之也〕貞觀政要明文也、寛平遺誠雖不窮經史、可誦習群書治要云々、和歌自光孝天皇未絶、雖為綺語、我國習俗也、不可棄置云々、所載禁秘抄、御習学專要候之事、
一三公之下親王、其故者右大臣不比等着舍人親王之上、殊舍人親王、仲野親王、贈太政大臣穂積親王准右大臣、是皆一品親王以後、被贈大臣時者、三公之下、可為勿論歟、親王之次、前官之大臣、三公、在官之内者、為親王之上、辞表之後者、可為次座、其次諸親王、但儲君各別、前官大臣、関白職再任之時者、摂家之内、可為位次事、

26	慶長十八高野山衆徒中御法度御下知書	一
27	慶長十七長谷寺御法度書	一
28	慶長十八智積院御法度書	一
29	慶長十八關東新義真言御法度書	一
30	元和二知恩院増上寺御法度書	一
31	慶長十九金戒光明寺江御書付	一
32	天正八三州鳳來寺 御判物	一
33	元和元西山派御法度書	一
34	同年大徳寺御法度書	一
35	同年妙心寺御法度書	一
36	寛永五大徳妙心両寺出世猥御吟味覚	一
37	慶長十八曹洞宗御法度書	一
38	元和元永平寺御法度書	一
39	同年惣持寺御法度書	一
40	慶長十七興福寺御法度書	一
41	慶長十三成菩提院御法度書	一
42	慶長十七戸隠山御法度書	一
43	慶長十八男山八幡宮御定書	一
44	元和三春日諸領御定書	一
45	同年春日社領并興福寺領目錄	一
46	慶長十六異国江被遣候 御朱印	一
47	伴天連追放之文〕	一

以上

〔三才〕

〔三ウ〕

〔四才〕

〔四ウ〕

一 清花之大臣辞表之後、座位可為諸親王之次座事、
 一 雖為摂家、無其器用者、不可被任三公摂関、況其外乎、
 一 器用之御仁躰雖被及老年、三公摂関不可有辞表、但雖有辞表、可有再任事、
 一 養子者連綿、但可被用同姓、女縁者家督相統、古今一切無之事、

一 武家之官位者、可為公家当官之外事、

一 改元、漢朝之年号之中、以吉例可相定、但重而於習礼相熟者、可為本朝先規之作法事、

一 天子礼服、大袖、小袖、裳、御紋十二象諸臣礼服各別、御袍、趨塵青色、帛、生氣御袍、或御引直衣。御小直衣等之事、仙洞御袍、赤色、椽、或甘御衣、大臣袍、椽異文、小直衣、親王袍、椽小直衣、公卿着禁色雜袍、雖殿上人、大臣息、或孫聽着禁色雜袍、貫首、五位藏人、六位藏人、着禁色、至極臈着趨塵袍、是申下御服之儀也、晴之時雖下臈着之、袍色、四位以上椽、五位緋、地下赤衣、六位深緑、七位淺緑、八位深縹、初位淺縹、袍之紋、轡唐草輪無、家々以旧例着用之、任槐以後異文也、直衣、公卿禁色直衣、始或拜領〔家〕任先規着用之、殿上人直衣、羽林家之外不着之、雖殿上人、大臣息亦孫聽着禁色、直衣、布衣、直垂、随所着用也、小袖、公卿衣冠之時着着綾、殿上人不着綾、練貫、羽林家三十六歳迄着之、紅梅、十六歳三月迄諸家着之、此外者平絹也、冠十六歳未滿透額帷子、公卿從端午、殿上人從四月西賀茂祭、着用普通之事、

一 諸家昇進之次第、其家々守旧例、可申上、但學問、有職、歌道令勤學、其外於積奉公勞者、雖為超越、可被成御推任御推叙、下道真

1

〔以下、楷書体〕

〔白紙〕

金地院

〔五ウ〕

禁中并公家

言上

條々

一 御元服之儀先度如被仰下候急可被成御沙汰候御殿取置申候者御延引如何存候間早々奉尤存候事
一 應而可被成御讓位候間其以前御政無懈怠諸事親王被為習御覽候様可被遊候方御心持乍恐肝要奉存候事

〔六オ〕

一 最前以一書如致奏 聞候此地遠境之

條万事撰家衆被存寄儀以

女院御所被申上候様可被仰事

右宜令奏申給候

慶長十五年九月

廣橋 大納言殿

勅修寺中納言殿

先度以一書奏 聞申候处被成御合

〔六ウ〕

備雖為從八位下、依有才智者、右大臣拜任、尤規模也、螢雪之功不可棄捐事、

一 関白、伝 奏并奉行職事等申渡儀、堂上地下輩於相背者、可為流罪事、

一 罪輕重、可被守名例律事、

一 撰家門跡者、可為親王門跡之次座、撰家三公之時者、雖為親王之上、前官大臣者、次座相定上者、可准之、但皇子連枝之外之門跡者、親王宣下有間敷也、門跡之室之位者、可依其仁体、考先規、法中之親王、希有之儀也、近年及繁多、無其謂、撰家門跡、親王門跡之外門跡者、可為准門跡事。

一 僧正 大正 門跡、院家、可守先例、至平民者、器用卓拔之仁、希有雖任之、可為准僧正也、但国王大臣之師範者各別事、

一 門跡者僧都 大正 法印叙任之事、院家者僧都 大正 律師、法印、法眼、任先例任叙勿論、但平人者本寺推挙之上、猶以相撰器用、可申沙汰事、

一 紫衣之寺住持職、先規希有之事也、近年猥 勅許之事、且乱臈次、且汚官寺、甚不可然、於向後者、撰其器用、戒臘相積有智者聞者、入院之儀可有申沙汰事、

一 上人号之事、碩学之輩者、為本寺撰正權之差別、於申上者、可被成勅許、但其仁体、仏法修行及廿箇年者、可為正、年序未滿、可為權、猥競望之儀於有之者、可被行流罪事、

右、可被相守此旨者也、

昭実 二条関白也

慶長廿年乙卯七月日

秀忠

点旨被仰下候間猶以各被存寄儀
以女院御所御異見專用存候若於
不被仰上者以來申通間敷候也
慶長十五年九月日

一條殿
二條殿
近衛殿
鷹司殿
九條殿

公家法度

公家衆家々之學問昼夜無油断
可被仰付事
不寄老若於行儀法度相背輩者急
度可処流罪但依罪輕重可定年序
事
昼夜之御番老若共無懈怠相勤其外
正威儀相調伺候之時刻如式日參
勤仕樣可被 仰付事
昼夜共無指用所而市町小路徘徊堅停
止之事
公宴之外為私而不似合勝負並於不
行儀青侍以下抱置輩者流罪可為同
前事

〔七〇〕

〔七〇〕

家康

此拾七箇条、家康、秀忠、昭実先判之趣也、万治四年正月十五日
内裏炎上之節、就令焼失、今度以副本如旧文写調之、為後鑑加
判形者也、

寛文四年 甲辰六月三日 家康御判

○ 武家嚴制録 三 禁中并公家衆御条目 慶長二十年七月日
○ 台徳院殿実紀卷三十九 元和元年七月十七日条

兩御所二条城に撰家華族をはじめ。公卿殿上人を会せられ。
御饗應あり。兩伝奏をめてして公家法令十七条を授給ふ。広橋大
納言兼勝卿これをよみ。関白昭実はじめ月卿雲客にみなこれ
を聞しむ。其文にいふ。

天子御芸能之事。第一御學問也。不學則不明古道。而能致太
平者未有之也。貞觀政要明文也。寛平遺誠。雖不窮經史。可誦
習群書治要云々。和歌自光孝天皇未絶。雖為綺語。我國習俗也。
不可棄置云々。所載禁秘抄御習學專要候事。

三公之下親王。其故者右大臣不比等着舍人親王之上。殊舍人
親王。仲野親王贈太政大臣。穗積親王准右大臣。是皆一品親王。
以後被贈大臣時者。三公之下可為勿論歟。親王之次前官之大臣。
三公在官之中者。雖為親王之上。辞表之後可為次座。其次諸親
王。但儲君各別。前官大臣。関白職再任之時者。撰家之中可為
位次事。

清華之大臣辞表之後座位。可為諸親王之次座事。
雖為撰家。無其器用者。不可被任三公撰閑。況其外乎。

右條々相定所也。從五撰家并傳奏相
加其届有之時。可行武家之沙汰者也。
慶長十八年癸丑六月十六日御判

〔八才〕

禁中并公家諸法度

天子諸藝能之事。第一御學問也不學
則不明古道而能政致太平者未之者
也。貞觀政要明文也。寬平遺誠雖不窮
經史可誦習群書治要云云和歌自
光孝天皇絕雖為綺語我國習俗也
不可棄置云云所載禁秘抄御習學專要
候事

〔八才〕

三公之下親王其故者右大臣不比等着
舍人親王之上殊舍人親王神野親王贈
太政大臣穗積親王准右大臣是皆一品
親王以後被贈太臣時者三公之下可為
勿論欽親王之次前官之大臣三公在官
之內者為親王之上辭表之後者可為
次座其次請親王但儲君各別前官太
臣関白職再住之時者撰家之内可為位
次事

清花之大臣辭表之後座位可為諸親王
之次座事

雖為接家無其器用者不可被任王公接

〔九才〕

器用之仁躰雖被及老年。三公撰関不可有辭表。但雖有辭表。可
有再任事。
養子者連綿。但可被用同姓。女縁其家督相統。古今一切無之
事。

武家之官位者。可為公家當官之外事。

改元者。漢朝年号之中。以吉例可相定。但重而於習札相熟者。
可為本朝先規之作法事。

天子礼服。大袖。小袖。裳。御紋十二章。諸臣礼服各別。御
袍。趨塵。青色。帛。生氣御袍。或御引直衣。御小直衣等之事。
仙洞御袍。赤色。橡。或甘御衣。大臣袍。橡異文。小直衣。親
王袍。橡。小直衣。公卿着禁色雜袍。雖殿上人。大臣息或孫。聽
着禁色雜袍。貫首。五位藏人。六位藏人着禁色。至極臈着趨塵
袍。是申下御服之儀也。晴時者雖下臈着之。袍色。四位以上橡。
五位緋。地下赤色。六位深緑。七位淺緑。八位深縹。初位淺縹。
袍之紋。轡唐草輪無。家々以旧例着用之。任槐以後異文也。直
衣。公卿禁色直衣始。或拝領家。任先規着用之。殿上人直衣。
羽林家之外不着之。雖殿上人。大臣息又孫聽着禁色。直衣。布
衣。直垂。隨所用也。小袖。公卿衣冠之時者着綾。殿上人着
綾。練貫。羽林家卅六歲迄着之。此外不着之。紅梅。十六歲
三月迄諸家着之。此外平絹也。冠。十六歲未滿透額。帷子。公
卿從端午。殿上人從四月西賀茂祭着用普通之事。

諸家昇進之次第。其家々守旧例可申上。但學問。有職。歌道
令勸學。其外於積奉公之勞者。雖為超越可被成御推任御推叙。下
道真備雖為從八位下。依有才智譽。右大臣拜任。尤規模也。蚩

開況其外乎

器用之御仁體雖被及老年三公接門不可

有辞表但雖有辞表可有再任事

養子者連綿但可被用同姓女縁其家督相續

古今一切無之事

武家之官位者可為公家當官之外事

改元漢朝年号之内以吉例可相定但重

而於習札相熟者可為本朝先規之作

法事、

天子礼服大袖小袖裳御紋十二象諸臣礼服

各別御袍趨塵青色帛生氣御袍或御

引直衣御小直衣等之事仙洞御袍赤色

橡或甘御衣大臣袍橡異文小直衣親王^{〔行間〕}△

△^{〔行間〕}橡小直衣公卿着禁色雜袍○^{〔行間〕}

雖殿上人大臣息或孫聽着禁色雜袍

貫五位藏人六位藏人着禁色至極臈

着趨塵袍是申下御服之儀也晴時雖

下臈着之袍色四位已上橡五位緋地

下赤衣六位深緑七位浅緑八位深緑初位

浅縹袍之紋轡唐草輪無家々以舊例

着用之任槐以後異文也直衣公卿禁

色直衣始或拝領家々任先規着用之

殿上人直衣羽林家之外不着之雖殿

上人大臣息又孫聽着禁色直衣布衣

〔九之〕

〔一〇オ〕

雪之功不可棄捐事。

関白。伝奏并奉行職事等申渡義。堂上地下輩於相背者。可為

流罪事。

罪輕重可被相守名例律事。

撰家門跡者可為親王門跡之次座。撰家三公之時者。雖為親王

之上。前官大臣者次座相定上者可准之。但皇子連枝之外之門跡

者。親王宣下有間鋪也。門跡之室之位者。可依其仁牀。考先規

法中之親王希有之儀也。近年及繁多無其謂。撰家門跡。親王門

跡之外。門跡者可為准門跡事。

僧正(大。正。權)。門跡。院家可守先例。至平民者。器用卓

拔之仁。希有雖任之。可為准僧正也。但国王大臣之師範者各別

事。

門跡者僧都(大。正。少)法印叙任之事。院家者僧都(大。正。

權少)。律師。法印。法眼。任先例任叙勿論。但平人者本寺推舉

之上。猶以相撰器用可申沙汰事。

紫衣之寺住持職之事。先規希有之事也。近年猥勅許之事。且

乱臈次且汚官寺。甚不可然。於向後者撰其器用。戒臘相續。有

智者聞者。入院之儀可有申沙汰事。

上人号之事。碩学之輩者。為本寺撰正權之差別於申上者。可

被成勅許。但其仁牀仏法修行及廿ヶ年者可為正。年序未滿者可

為權。猥競望之儀於有之者。可被行流罪事。右可被相守此旨者

也。

両御所。関白昭実公御連署也。

各拝聴し畢て。関白并菊亭前右大臣晴季公。今日の条約最許

直垂隨所着用也小袖公郷衣冠之時
者着綾殿上人不着綾練貫羽林家三十

〔一〇七〕

六才迄着之此外不着之紅梅十六才三月
迄諸家着之此外平絹也冠十六未滿透額帷
子公郷從端午殿上人從四月酉賀茂祭
着用普通之事

諸家昇進之次第其家々守舊例可申
上但學問有職歌道令勤學其外於積
奉公勞者雖為超越可被成御推任御
推叙下道真備雖從八位下依有才智
譽右大臣拜任尤規模也蛭雪之功不
可棄指事

〔一一〇〕

關白傳奏并奉行職事等申渡儀堂
上地下輩於相背者可為流罪事
罪輕重可被守各別事

接家門跡者可為親王門跡之次座接

家三公之時雖為親王之上前官大臣
者次座相定上者可准之但皇子連枝之
外門跡者親王 宣下有間敷也門跡之
室之位者可依其仁體考先規法中之

〔一一一〕

親王希有之儀也近代及繁多無
其謂接家門跡親王門跡之外門跡者
可為准門跡事

僧正權大正 門跡院家可守先例至平民者器

悉明亮。敢て遺憾なしと感嘆あり。(駿府記 令条記)

○『史料綜覧』卷十五 元和元年七月十七日

秀忠、二条城ニ至ル、能樂アリ、禁中公家諸法度ヲ定メ、前左大
臣、二条昭実、秀忠、家康連署ス、(駿府記、香雲院右府実条公記、言緒卿記、
土御門泰重卿記、義演准后日記、舜旧記、孝亮宿祢日記、堀見清右衛門氏所藏
文書、諸法度、能之留帳、(參考)駿府記、速水見聞私記、義演准后日記、中院通村
日記、康道公記、乙夜隨筆、岩淵夜話、橋窓自語、智仁親王御記、孝亮宿祢日記、
義演准后日記裏文書、京都御所東山御文庫記録)

4

○御当家令条 一九 飛鳥井家鞠道御判物 慶長十三年八月

蹴鞠道之事、加茂松下弟子取儀無例之由、同於家人前蹴曲足事
無之、色葛袴以無紋有紋薰革無紋紫革閉袴事、同杏紅上香上紫
上金紗不可着之旨、勅書代々証判明鏡也、右之趣近年相背儀
曲事候、向後弟子取就曲足、於背法度者、急度可申付狀如件、
慶長十三年戊申八月六日 家康公御判

飛鳥井宰相殿

〔參考〕御当家令条 二〇 古案同將軍義滿公号鹿苑 院殿宛御判物

嘉慶二年二月六日

鞠道之事雖為勿論之儀、於田舎茂松下弟子取事、一円有間敷儀
候、若背此儀者、曲事可成候旨可被申候、仍狀如件、

嘉慶二年二月六日

飛鳥井中將殿

右ハ將軍義滿公雅縁之所賜之古案也、

用卓拔之仁希有雖任之可為准僧正也
但國王大臣師範者各別事

門跡者僧正大正法印任叙之事院家者

僧都大正權律師法印法服任先例位叙勿

論但平人者本寺推舉之上少櫓以相撰

器用可申沙汰事

紫衣之寺住持職先希有之事也近

年猥勅許之事且亂闕次且汚官

寺甚不可然於向後者撰其器用戒闕

相積有智者聞者入院之儀可有申沙

汰事

上人号之事碩学之輩者為本寺

撰正權之差別於申上者可被成

勅許但其仁體佛法修行及廿ヶ年

者可為正年序未滿者可為權猥

競望之儀於有之者可被行流罪

事

右可被相守此旨者也

二條殿

判

秀忠公

家康公

慶長廿乙卯年七月日

御判

〔二二〕

〔二二〕

○ 台徳院殿実紀卷八 慶長十三年七月・八月

七月廿二日条 〔該当記事なし〕

七月廿九日条 飛鳥井宰相雅庸卿加茂の社人松下某が事を訴ふ。

こは鞠道の免許を授くること。飛鳥井家に限るべきよし。織田

豊臣両家の証状現然たる処。松下近來みだりに門生をあつめ。

免許状を授くるが故なり。(当代記、慶長見聞録、創業記)

八月六日条 両御所。飛鳥井宰相雅庸卿へ鞠道の御判物をたま

ふ。その文にいふ。蹴鞠の事。加茂松下某私に弟子をあつむる

事。先例いまだなき所なり。家人の前にて曲足を蹴る事あるべ

からず。色葛袴。無紋有紋薰革。無紋紫革。閉袴。同沓。紅上

香上紫上。金紗一切着すべからざる旨。勅書并に代々証判明鏡

なり。しかるを近年これに背く者は曲事たり。今より後みだり

に弟子をあつめ。又曲足をけるたぐひ。違犯の徒は厳に命ぜら

るべしとなり。(令案記)

○ 『史料綜覧』卷十四 慶長十三年七月廿一日

家康、参議飛鳥井雅庸ノ訴ニ依リ、山城賀茂社社人松下某ノ、私

ニ蹴鞠ノ弟子ヲ取ルコト等ヲ禁ズ、御制法、当代記

5

○ 御当家令条 三 武家諸法度

元和元年七月

武家諸法度

一文武弓馬之道專可相嗜事、

左文右武、古之法也、不可不兼備矣、弓馬是武要枢也、号兵為

凶器、不得已而用之、治不忘乱、何不励修練乎、

4

御判

〔三才〕

與飛鳥井家

一 蹴鞠道之儀 勅書并代々證判

明鏡也然賀茂松下為恣之働云云
因茲遂糺明処無證文故致退望
之間令赦免了所詮如先規速可
有其沙汰之状如件

慶長十三戊申年

七月廿二日 御判

飛鳥井宰相殿

〔三才〕

武家

一 慶長廿年六月廿四日召国師武

家之御法度條々 御内談被

仰下同年七月二日以草案備

上覽

武家諸法度

一 文武弓馬之道專可相嗜事

左文右武古之法也不可兼備
矣弓馬是武家之要樞也号兵為
凶器不得已而用之治不忘乱何
勵修鍊乎

〔四才〕

一 可制群飲佚遊事、

令条所載嚴制殊重、耽好色、業博奕、是亡国之基也、

一 背法度之輩、不可隱置於国々事、

法是礼節之本也、以法破理、以理不破法、背法之類、其科不輕
矣、

一 国々大名、小名并諸給人各相拘之士卒、有為叛逆殺害人告者、
速可追出事、

一 夫挟野心之者、為覆国家利器、絶人民鋒刃也、豈是允容乎、
一 自今以後、国人之外、不可交置他国者事、

凡因国其風是異、或以自国之密事告他国、或以他国之密事告
自国、佞媚之萌也、

一 諸国居城雖為修補、必可言上、況新儀之構營堅令停止事、
城過百雉、国之害也、峻畧浚隄、大乱之本也、

一 於隣国、企新儀、結徒党者有之者、早速可致言上事、
人皆有党、亦少達者、是以或不順君父、或乍違于隣里、不守旧
例、何企新儀乎、

一 私不可締婚姻事、

夫婦合者陰陽和同之道也、不可容易、睽曰、匪寇婚媾、者將通、
寇則失時、桃夭曰、男女以正、婚姻以時、国無繇民也、以緣成
党、是姦謀本也、

一 諸大名參勤作法之事、

統日本紀制曰、不預公事、恣不得集己族、京裡二十騎以上不得
集行云々、然則不可引卒多勢、百万石以下式十万石以上不可過
廿騎、拾万石以下可為其相応、蓋公役之時者可隨其分限矣、

一 可制群飲佚遊事

令條所載嚴制殊重耽好色業博奕是亡國之基也

一 背法度輩不可隱置於國々事

法是札節之本也以法破理以理不破法背法之類其科不輕矣

一 國々大名小名并諸給人各相拘士卒有為叛逆殺害人由告者速可追出事

夫挾野心之者為覆國家之利器絕人民之鋒劍豈足允容乎

一 自今以後國人之外不可交置他國之事

凡因國其風是異或以自國之蜜事告他國或以他國之密事告自國倭媚之萌也

一 諸國居城雖為修補必可言上況新儀之構營堅令停止事

城過百雉國之害也峻巒後隄大亂之本也

一 於隣國企新儀結從黨者在之者早可致言上事

人皆有黨亦少達者是以或不順君父乍違于隣里不守舊例何企

〔二四ウ〕

〔二五オ〕

〔二五ウ〕

一 衣裝之科不可混雜事、

君臣上下可為各別、白綾、白小袖、紫衿、紫裏、練、無紋之小袖、無御免衆猥不可有着用、近代郎從諸卒、綾羅錦繡等之飾服、非古法、甚制焉、

一 雜人恣不可乘輿事、

古來依其人無御免乘家有之、御免以後乘家有之、然近來及家郎諸卒、乘輿、誠濫吹之至也、於向後者、國大名以下一門之歷々者、不及御免可乘、其外昵近之衆并医陰之兩道、或六十以上之人或病者等、御免以後可乘之、家郎從卒恣令乘者、其主人可為越度也、

但公家門跡并諸出世之衆者非制限。

一 諸國諸侍可被用儉約事、

富者弥誇、貧者恥不及、俗之凋弊無甚於此、所令嚴制也、

一 國主可撰政務之器用事、

凡治國道、在得人、明察功過、賞罰必當、國有善人、則其國弥盛、國無善人、則其國必亡、是先哲之明誠也、

右、可相守此旨者也、

元和元年乙卯七月日

○ 武家嚴制錄 一三 家康公御代武家諸法度 慶長廿年七月

○ 台德院殿實紀卷三十八 慶長廿年閏六月廿四日条

伏見城に金地院崇伝を召て。武家法令のことを議せらる。

(駿府記)

○ 台德院殿實紀卷三十九 慶長廿年七月七日条

伏見城に諸大名を召て。本多佐渡守正信武家の法令を仰出さ

新儀平

私不可締婚姻事

未婚合者陰陽和同之道也不可容易睽曰匪冠婚媾志將通冠則失時挑夭曰男女以正婚姻以時國無鰥民也以緣成黨是姦謀木也

〔一六オ〕

諸大名參勤作法之事

日本紀制曰不預公事恣不得集已族京裡廿騎以上不得集行云然則不可引率多勢百万石以下廿万石以上不可過廿騎拾万石以下可為其相應蓋公役之時者可隨其分限

一 衣裝之品不可混雜事

君臣上下可為各別白綾白小袖紫袷裏練無紋小袖無御免衆猥不可有着用近代郎從諸卒綾羅錦繡等之飾服非古法甚制焉

〔一六ウ〕

一 雜人恣不可乘輿事

古來依其人無御免乘家有之御免以後乘家有之然近來及家郎諸卒乘輿誠濫吹之至也於向後者国大名同息一門之歷々并一城被 仰付

るる旨を伝へ。金地院崇伝これをよむ。其文にいふ。

文武弓馬之道專可相嗜事。左文右武。古之法也。不可不兼備矣。弓馬是武家之要樞也。号兵為凶器。不得已而用之。治而不忘乱。何不勵修練乎。

可制群飲佚遊事。令条所載嚴制殊甚。耽好色業博奕。是亡国之基也。

背法度輩不可隱置於国々之事。法是礼節之本也。以法破理。以理不破法。背法之類其科不輕矣。

国々大名小名并諸給人各相抱之士卒有為反逆殺害人告者速可追出事。夫挾野心之者。為覆国家之利器。絶人民之鋒劒也。豈足允容乎。

自今以後国民之外不可交置他国者事。凡因国其風是異。或以自国之密事告他国。或以他国之密事告自国。佞媚之萌也。

諸国居城雖為修補必可言上。況新儀之構營堅令停止事。城過百雉国之害也。峻壘浚隄大乱之本也。

於隣国企新儀結徒党者有之者早速可致言上事。人皆有党。亦少違者。是以或不順君父。或忽違于隣里。不守旧例何企新儀乎。私不可締婚姻事。夫婦合者陰陽和同之道也。不可容易。睽曰匪冠婚媾。志將通。寇則失時。挑夭曰。男女以正。婚姻以時。国无鰥民也。以緣成党。是姦謀本也。

諸大名參觀作法之事。統日本紀制曰。不預公事恣不得集已族。京裡二十騎以上不得集行云々。然則不可引率多勢。百万石以下二十万石以上。不可過二十騎。十万石以上可為其相応。蓋公役之時者。可隨其分限事。

衆付五万石以上或五十以上之人醫陰

兩道或病人等者不及御免可乘其

外之輩者御免以後可乘至国々諸△

「△大名之家中於其國者其主人撰仁〇」

〇體遂吟味可免之叨令例乘者可越度也但公家門跡諸出世之衆者非制限

諸國侍可被用儉約事

富者弥誇貧者恥不及俗之凋弊無甚於此所令嚴制也

國庄可撰政務之器用事

凡治國道在得人明察功過賞罰必

當國有善人則其國弥殷國無

善人則其國必亡是先哲之明誠

也

右可相守此旨者也

一

元和二丙辰四月二日金地院南光坊

本多上野助² 御前江被為 召之被

仰置候趣者 御 終 被成候者御

體ヲハ久野山ニ収御葬礼於増上寺

申付御位牌ヲハ三州大樹寺立置之

御一周忌モ過候以後日光山ニ小堂ヲ

建立勸請可仕候八州之鎮守ニ可

被為成トノ

〔二七オ〕

衣裝之品不可混雜事。君臣上下可為各別。白綾。白小袖。紫袷。紫裏。練無紋之小袖。無御免衆。猥不可有着用。近來郎從諸卒。綾羅錦繡等之飾服。甚非古法。

雜人恣不可乘輿事。古來依其人。無御免乘家有之。御免以後乘家有之。然近來及家老諸卒乘輿。誠濫吹之至也。於向後者。大名同子息一門之歷々等。一城被仰付衆。付五万石以上。或五十以上之人。医陰兩道。或病人等。不及御免可乘。其外之輩御免以後可乘。至国々諸大名家中。於其國者。其主人撰仁琳遂吟味可免之。叨令乘者可為越度也。但公家門跡。并諸出家之衆者非制限。

〔二七ウ〕

諸國諸侍可被用儉約事。富者弥誇。貧者恥不及。俗之凋弊無甚於此。所令嚴制也。

國主可撰政務之器用事。凡治國道在得人。明察功過。賞罰必當。國有善人則其國弥殷。國無善人則其國必亡。是先哲之明誠也。右可相守此旨者なり。（駿府記、令条記）

○『史料綜覽』卷十五 慶長二十年七月七日

是ヨリ先、家康、金地院崇伝以心等二命ジ、諸法度ノ案ヲ制定セシム、是日、秀忠、諸大名ヲ山城伏見城ニ会シ、武家法度ヲ分ツ、能樂アリ、（駿府記、土御門泰重卿記、孝亮宿祢日記、言緒卿記、慶長見聞書、慶長日記、伊達政宗記録事蹟考記、後編薩藩旧記雜錄、能之留帳〔參考〕求麻外史、細川家記、折たく柴の記）

6

○ 台徳院殿実紀卷四十二 元和二年四月

御意被 仰渡之

一 南禪寺金地院中ニモ小堂建立

勸請仕於京都所司代ヲ始武家

之面々致参詣候様可申渡旨

被 仰出

一 四月三日金地院本多上野助

御前江被為 召之從 相國様

公方様江御内證之儀為御使兩人

ヲ以被 仰遣

遺書

一 死骸二年久野可置事

二 二年過者日光奥院堂建立仕死骸

一 深埋可置事

一 死跡以後將軍之意不可違事

一 吊之事江戸増上寺ニテ可致事

一 露命七十歳余故一毛一筋不可惜事

一 將軍兄弟并家人仕置等遺置事者

一 疎意也況軍法政道之事不及遺言者

也

右之旨將軍江可申者也

元和二年

卯月六日 相國家康

〔二八ウ〕

〔一九オ〕

〔一九ウ〕

四月二日条 金地院崇伝。南光坊大僧正天海并に本多上野介正純を。 大御所御病床に召て。御大漸の後は久能山に納め奉り。御法會は江戸増上寺にて行はれ。靈牌は三州大樹寺に置れ。御周忌終て後下野の国日光山へ小堂を營造して祭奠すべし。京都には南禪寺中金地院へ小堂をいとなみ。所司代はじめ武家の輩進拜せしむべしと命ぜらる。(国師日記)

四月六日条 「該当記事なし」

○ 『史料綜覧』卷十五 元和二年四月

一日、家康、病漸ク革ル、是日、老臣下野小山城主本多正純及比武藏仙波喜多院ノ南光坊天海・金地院崇伝(以心等ヲ召シテ、後事ヲ托ス、(本光国師日記、梅津政景日記、伊達貞山治家記録、寛政重修諸家譜、牒余録、寛永諸家系図伝、参考)杏陰稿、東叡開山慈眼大師伝記、浄土列祖伝、明良洪範、岩淵夜話、落穂集追加、三河物語、御遺訓付録、明良洪範統篇、統武家閑談、武徳編年集成、略譜「付録」譜牒余録後編、譜牒余録、御役者由緒書、明良洪範、落穂集追加)

六日、「該当記事なし」

○ 台徳院殿実紀卷五十 元和五年六月十九日条

金地院崇伝に。京にて諸家拜謁の次第をとせたまふ。崇伝古例を書し。林永喜信澄もて進覧す。その第一当官の三公。次に親王。つぎに前官の大臣。その次に諸法親王なり。前代の御ときも八条。伏見の阿親王。その次に前官大臣と定られたり。但伏見家は世々 今上の御猶子たるをもて。諸親王とは別格た

7

元和五年六月十九日為 公方様御使永喜
來諸家之御札之次第御尋也則先例
書付上候案在左

御位之事

先三大臣其次親王家其次前官大臣
其次諸親王先年御法度此通相定候
先年御出法之時茂弟一當官之左右
大臣其次八條殿伏見殿其次前官大
臣如此御座候ト覺申候伏見殿御
代々天子御猶子之分ニ候間諸親王可
為各別候哉其段者御公家衆可為
御存知候先年 相國様之御時
如右相定異儀無御座候以上
如此書付口上申渡永喜返ス處勞儀
茂能々養生可仕旨被 仰出也

[1104]

8

元和十甲子年三月朔日乗物 御免之
御印判書付 御城江持参



被許
乗興

[1107]

るべしと定られしなり。(国師日記)

〔参考〕史料綜覧』卷十五 元和五年六月十八日

公家衆・門跡等、山城伏見城ニ至リ、秀忠ノ入京ヲ賀ス、伏見宮
邦房親王、前関白鷹司信房ト座位ヲ争ハル、(言緒卿記、土御門泰重卿
記、孝亮宿祢日記、義演准后日記、華頂要略所収門主伝、本光国師日記、三寶院
文書、〔参考〕実相院文書、舜旧記)

8

○大猷院殿実紀卷二 寛永元年三月朔日条

乗興免許の輩に賜はる証印の文字を。金地院崇伝に撰進せし
めらる。(国師日記 二月晦日 改元)

○『史料綜覧』卷十六 寛政元年二月三十日

幕府、金地院崇伝(以心ヲシテ、乗興免許ノ印判ヲ制定セシム(本
光国師日記)

9

○大猷院殿実紀卷十四 寛永六年十月

十月十五日条 金地院にならせ給ふ。御相伴は水戸黄門頼房卿。
藤堂和泉守高虎。立花飛騨守宗茂なり。崇伝御茶奉り猿楽御覽
ぜらる。……(東武実録)

十月十六日条 〔記事なし〕

十月十七日条 大御所金地院へ臨駕あり。水戸黄門頼房卿。藤
堂和泉守高虎。立花飛騨守宗茂御相伴つかふまつる。崇伝むか
へて茶室にて饗し奉り。御花。御炭御みづから遊ばし。御茶畢

- 寛永六年己巳十月廿三日 西丸御目付
衆ヨリ御供衆御馳走之覺書來案
記左
- 常 御成之時供奉之衆馳走之覺
物頭衆 〔行番係〕御小姓衆 一 御使番衆
御書院番衆 〔一〕御番外衆 一 御納戸衆
右二汁七菜但二三迄
馬乗御目付衆
右本二ぬり折敷三而も木具三而も二汁五菜 〔二ウ〕
御弓御鉄炮馬乗同心 一 御かちの衆
御臺所衆 一 坊主衆
右本ぬり折敷三而も木具三而も二ハへきに
二汁五菜
かちの御弓御鉄炮衆
右折ハちうはこにこわめしさかな一種并
一番の所ハ柳一荷但御番所人の多少
によりて可相計也
御膳奉行同心 一 御納戸同心 〔二オ〕
御中間御小人
右一汁三菜
御臺所衆内の者事人数の定神谷又五郎
方より書付を可相越但一汁一菜
樂屋之馳走

て書院にわたらせられ。猿樂御覽あり。……此日崇伝に時服
十。銀二百枚給ふ。崇伝両城にまうのぼり謝したてまつる。陪
従の輩も同じ。(東武実録)
十月二十日条 山里御茶亭にて。大御所より御茶進らせ給ふ
によりならせ給ふ。水戸黄門頼房卿。藤堂和泉守高虎御相伴た
り。……(東武実録)
十月廿二日条 山里にて 大御所御茶あそばさる。……(東武実
録)
十月廿三日条 山里にて終日三度の御茶あり。……(東武実録)
○『史料綜覧』卷十六 寛政六年十月
十五日、家光、江戸城内金地院ニ臨ム、(本光国師日記、東武実録、御当家
記年録、ム古語、慶延略記、公室年譜略)
十七日、秀忠、江戸城内金地院ニ臨ム、(本光国師日記、ム古語、東武実
録、江城年録、御当家記年録、慶延略記、公室年譜略)

10
○御当家令条 五一九 御評定所張紙
寛永十二年十二月二日
定
一 寄合之式日、毎月二日十二日廿二日、若 公儀之御用有之て、
式日及延引は、翌日可為寄合事、
一 評定衆寄合場え卯刻半時罷出、申刻可有退散事、
一 寄合場え役者之外一切不可参向、勿論音信停止事、
一 公事人老人若輩并病者之外、介添停止事、

太夫分者本ぬり折敷ニ而も木具ニ而茂
二汁五菜其外者本ぬり折敷にてても
木具ニ而も二へきに二汁五菜

猿樂の内者 こわ飯 酒

一 辻固之衆江者馳走無用之事

一 御供之衆内之者座敷へ参つけ候分は

さミ箱につき候もの老人刀持老人已上

式人内江可入役人者各別也付馳走無用
之事

以上

此書付者諸大名衆江 御成之時振廻之
書立ニ而候自是からく御座候へくるし
からす候為御心得申上候以上

国師様まいる

加々爪民部少

十月十六日

永井 将監

渡辺 圖書助

石川 三右衛門

朝倉 仁左衛門

大河内 平十郎

〔三三ウ〕

〔以下、
増補〕
定 評定所

一 寄合之式日毎月四日十二日廿二日若

公儀之御用有之而式日及延引者翌

一 公事罷出もの、縦御直参之輩たりといふとも、刀脇差帯すへか
らさる事、

一 公事人親類縁者知音の好たりといふとも、評定衆於寄合場取持
へからさる事、

一 遠国より参候公事は、在江戸久次第可承之、当地之公事は其日
之帳之先次第に可承事、

附、不承して不叶儀、急用は各別事、

一 公事不審かくる儀ハ、其筋之役人可勤之、惣座中よりも無遠慮
存寄之通可申事、

一 公事裁許以後、其筋之役人公事之しめ留書可致之、伊豆守、豊後
守、加賀守其日之公事之とめ書写させ可被申事、

一 公事其日に落着無之候ハ、其評定衆翌日寄合可被申付、不相
濟儀は、年寄中え談合仕、可致言上事、

一 公事役者之所ニて承候内、寄合場え可出公事におゐてハ、証文
証跡相揃出之、無滞様可有之事、

一 為過怠籠舎之者、評定衆相談之上日数を定、其日限相濟候ハ
、籠より可出事、

附、預ケ者長々數不指置、急度遂穿鑿、可濟事、

一 裏判并召状をうけ遅参之者ハ、其所之遠近を考、日数を積、軽重
により、或籠舎或可為過料事、

右条々、可被相守者也、

寛永十二年亥十二月二日

讃岐

大炊

○ 武家殿制録 二二三 評定所御条目

日可為寄合事

評定衆寄合場江卯刻半時罷出申

刻可有退散事

寄合場江役者之外一切不可參勿論

音信停止之事

公事人老人若輩并病者之外介添

停止之事

公事罷出者縱雖為御直參之輩

刀脇差不可帶事

公事人親類縁者知音之好雖有之

評定衆於寄合不可取持事

從遠國參來人之公事在江戸久敷

次弟可承當地之公事其日帳先次

弟可承事

但不承而不叶者急用者各別事

公事不審掛申儀者其筋之役人可

勤之惣座中亦無遠慮存寄之

旨可申事

公事裁許以後其筋之役人公事留

書可致之且又伊豆守豐後守加賀守

其日之公事留書為寫可申事

公事其日落着無之儀者其評定衆

翌日寄合可被申付不相濟儀者

年寄中致談合其上可言上事

〔二四オ〕

〔二四ウ〕

〔二五オ〕

寛永十二年十二月二日

○ 大猷院殿実紀卷廿九 寛永十二年十二月二日条

この日酒井讃岐守忠勝。土井大炊頭利勝して。評定の輩に令せらるるは。寄合の式日毎月二日。十二日。廿二日たるべし。もし官事ありて延滞せば。翌日會議すべし。評定の衆卯牌の半に出坐し。申牌にまかんずべし。其席へ有司のほか一切会すべからず。音物うくる事かたく停禁す。訴人は老幼病者のほか。介添のものどむべし。訴人たとへ御家人たりといふ共。刀。脇指。帶すべからず。訴人の親戚知音たりとも。偏頗の沙汰あるべからず。遠地よりの訴人は在府の長短をはかり。其次第に聞べし。府内訴人は当日簿面の順たるべし。されどすてをきがたき事あるか。または急遽の事はこの限にあらず。詰問はその筋の有司つとむべし。會議の輩もはばかりなく所思を申のべし。裁断の後あづかりの有司。その事を注記すべし。松平伊豆守信綱。阿部豊後守忠秋。堀田加賀守正盛その日の公事をするさしむべし。訴訟当日に決せざるは。翌日裁断すべし。猶決せざるは老臣にはかり合。其上聞えあぐべし。有司の宅にて裁断せしも。評定所へ出すべき訴訟は。証人。証拠をそろへ出し。滞らざるやうにすべし。過怠。繫獄の者。有司商議して日数を定め。定期はてなば出獄すべし。預けもの長くすてをかず。速に査検し事を決すべし。裏判并に召状を受ながら遅参せし者は。其地の遠近を考定し。其日数により罪の軽重にしたがひ。あるは繫獄。あるは過料たるべしとなり。(大成令)

○ 『史料綜覧』卷十七 寛政十二年十二月二日

一 公事於役者之所承之内寄合場江

於可出之公事者證人證跡相揃無

滞様可有之事

為過怠簞舍者評定衆相談之上

日數相定於其日數相濟者出簞可

有之事

付預ケ者永々敷不指置急度遂

穿鑿可相濟事

一 裏判并召状受之遲參者考其所

遠近而積日數依輕重或簞舍或

可為過料事

右條々可被相守此旨也

寛永十二年亥十二月二日

讃岐
大炊

〔白紙〕

諸僧家

一 修驗事可被任往古法度愛宕山之儀

為諸国山伏同前之上者結袈裟金

地等免許并諸役以下可被申付之

若於違背之族者可加此間摩滅仕候状如件

〔二五ウ〕

〔二六オ〕

〔二六ウ〕

幕府、評定所寄合ノ条規等ヲ定メ、伝奏屋敷ヲ權ニ評定所ト為ス、(御制法、令条、令条記、教令類纂初集、慶縁記、武家殿制録、酒井忠勝讃、寛永日記、万年記、宝地公遺事、〔参考〕参考落穂集)

11 〇 御当家令条 八六 本山聖護院御門首へ御判物

慶長十四年五月朔日

修驗道之事、可被任往古之法度、愛宕山之儀、為諸国山伏同前之上者、結袈裟金地等令免許之、并諸役以下可被申付之、若於違背族者、可被加制詞之状如件、

慶長十四年五月朔日

聖護院殿

〇 武家殿制録 八四 聖護院殿被遣之修驗道貫首之公帖

慶長十四年五月朔日

〇 台徳院殿実紀卷九 慶長十四年五月

五月朔日条 又修驗道の御朱印を。聖護院門跡興意法親王につ

かはさる。修驗道のこと古来の法度にまかすべし。愛宕山的事

各国山伏に同じければ。結袈裟金地等免許し。諸役以下を課す

べし。もし違犯のやからは。殿制を加ふべしとなり。

五月廿七日条「該当記事なし」

〇 『史料綜覧』卷十四 慶長十四年五月一日

幕府、照高院興意法親王三近江園城寺寺務ノ条規及ビ修驗道ノ法度ヲ出ス、(御当家令条、〔付録〕武州文書、石川文書、篠井文書、青山文書、新編武蔵風土記稿、新編会津風土記)

権現様

慶長十四年五月廿七日 御直判

台徳院様

御直判

聖護院殿

〔二七オ〕

一 本山之山伏對真言宗不謂役儀令停

止畢但真言宗立寄非佛法祈令執

行輩有之者役儀可相掛自今以後

堅守此旨可有下知者也仍如件

慶長十八年五月廿一日 御朱印

聖護院殿

一 修驗道之事從先規如有來諸國之

山伏任筋目可致入峯當山本山各別

之儀候条諸役等互不可有混乱自

今以後堅守此旨無靜論様可有下

知者也仍如件

慶長十八年五月廿一日 御朱印

聖護院殿

〔二七ウ〕

○ 御当家令条 八七 当山三宝院御門主へ御判物 兩通

慶長十八年五月廿一日

修驗道之事、從先規如有來、諸國之山伏任筋目可致入峯、当山本山各別之儀候之条、諸役等互不可混乱、自今以後、堅守此旨、無爭論様可有下知者也、

慶長十八年五月廿一日

三宝院殿

.....
本山之山伏對真言宗不謂役儀令停止畢、但真言宗立寄、非佛法祈令執行輩有之者、可拔其衆、自今以後、堅可有守此旨下知者也、

慶長十八年五月廿一日

三宝院殿

○ 武家殿制録 八五 三宝院殿被遺之 御判物

慶長十八年五月廿一日

八六 三宝院殿修驗道眞首之公帖

慶長十八年五月廿一日

○ 台徳院殿実紀卷廿二 慶長十八年五月廿一日条

この日本山当山修驗の法令を定められ。御黒判を給ふ。

三宝院には本山の山伏等真言宗に対して理りなき役儀の事停禁せらる。されど真言宗の徒立寄りて佛の法にあらざる祈念執行ものあらば其徒を擯斥すべし。今より後かたく此旨を守るべしとなり。

又修驗道之事。古制のままに山伏の由緒にしたがひ入峯すべ

定

〔二八〇〕

一 本山之山伏對真言宗不謂役儀令停止畢但真言宗立寄事非佛法祈令執行輩有之者可拔其衆自今以後堅守此旨可有下知者也仍如件
慶長十八年五月廿一日 御朱印

三寶院殿

一

〔二八一〕

修驗道之事從先規如有來諸國之山伏可為入峯當山本山差別有之上諸役等互不可有混乱自今以後堅守此旨無諍論樣可有下知者也仍如件

慶長十八年五月廿一日 御朱印

三寶院殿

一

〔二八二〕

本山之山伏對真言宗申掛不謂役儀事堅可為停止并於宗門之内立寄令祈念更非正法者也自今以後有令修行輩者連可被拔其衆者也仍如件

し。当山本山各別のことなれば。互に諸役混乱すべからず。今より後嚴に此令を守り。指揮せらるべしとなり。

聖護院には本山の山伏真言宗に對し。理りなく役儀行ふ事は停禁せらる。ただし真言宗の徒立寄て佛の法ならざる祈禱等執行するものあらば。其役義をとどむべし。今より後嚴に此旨を守り。指揮せらるべしとなり。(國師日記)

○ 台徳院殿実紀卷廿一 慶長十八年六月六日条

また醍醐寺領の御判物を。三寶院門跡義演に遣はさる。其文にいふ本山の修驗等いはれなき役事を真言宗に課する事。かたく禁ぜらる。宗門の中に寄合祈念するは正法にあらず。今よりのちもしさる事修行せば。その罪者を擯斥せらるべしとなり。又修驗道は先々の由緒のままに。諸國の山伏入峯すべし。当山本山の品を分ち。諸役互に混乱すべからず。この旨を得て指揮せらるべしとなり。

また醍醐寺山上下領。都合三千九百九十八石余の事。并門前境内山林竹木等守護不入たるべし。寺家法度坊舍再興以下。先規の如く当門指揮あるべし。

その他諸事慶長十五年四月廿日先判の旨。相違あるべからずとなり。(國師日記)

〔参考〕『史料綜覽』卷十四 慶長十八年五月五日

修驗ノ本山・当山両派、役錢ノコトニ依リ相論ス、家康、照高院興意法親王・三寶院義演ヲ召シテ、之ヲ裁決ス、尋デ、修驗道法度及ビ關東新義真言宗法度ヲ定ム、尋デ、兩門主、江戸ニ行ク、秀忠、又、修驗道法度ヲ出シ、三寶院ヲシテ、山城醍醐寺ノ寺領ヲ安堵セ

慶長十八年六月六日 御判

三寶院殿

一 修驗道事任先規筋目諸国之山伏

可為入峯當山本山差別有之上諸役

等互不可有混亂以此旨無異論樣

可有下知者也仍如件

慶長十八年六月六日 御判

三寶院殿

勅許紫衣之法度

落家

大德寺

妙心寺

淨土

知恩寺

栗生光明寺

淨花院

泉涌寺

右住持職之事不被成 勅許以前可被

告知為佛法相續撰其器量可相許

以其上入院之事可有申沙汰者也

慶長十八年六月十六日 御朱印

〔二九ウ〕

〔三〇オ〕

〔三〇ウ〕

シム、(駿府記、駿府政事録、本光国師日記、明星院所藏關東新義真言宗法度、三
宝院文書、義演准后日記、時慶卿記、舜旧記、能之留帳〔参考〕新編武藏風土記稿、
修驗教義書所収当山門源記、〔付録〕磐城志)

12

○ 御当家令条 一二 勅許紫衣法度 慶長十八年六月十六日

勅許紫衣法度

大德寺

妙心寺

知恩寺

淨花院

泉涌寺

光明寺

金戒寺

右、住持職之事、不被成、勅許已前、可被告知、撰其器量、可相計、
以其上入院之事可有申沙汰者也、

慶長十八年六月十六日 家康公御判

広橋大納言殿

○ 武家殿制録 二 紫衣之御条目 慶長十八年六月十六日

○ 台徳院殿実紀卷廿二 慶長十八年六月十六日条

又諸寺紫衣の制を仰下さる。大德寺。妙心寺。知恩院。知恩

寺。淨花院。泉涌寺。栗生光明寺。黒谷金戒寺等住持職は。勅

許あらざる前に聞え上べし。其器量を撰で計らふべし。其上入

院の事申沙汰すべしとなり。(駿府記、舜旧記)

○ 『史料綜覧』卷十四 慶長十八年六月十六日(前掲2)

13

○ 大猷院殿実紀卷十 寛永四年七月

七月十六日条 この日土井大炊頭利勝の宅に。板倉周防守重宗。

廣橋大納言殿

覺

諸宗出世之儀 故相國様御法度書相
背漫有之由被 聞召候間三条中院ヲ以
窺 叡慮御法度書以後出世之者

〔三二〇〕

相押其上重而器量ヲ被成 御吟味
可被 仰付事付諸宗出世之前後御
法度書之日付ヲ可相考事

寺々之傳 奏エモ 故相國様御法度書

ニ相違候者出世之儀望申候共向後

猥執 奏無之様三条中院ト相談仕可
申渡事

一

五山紫衣黄衣西堂之 公帖頂戴不

申衆モ御法度書以前者御赦免事

知恩院執 奏之上人号事背御法度

書猥上人成候者押置右如被 仰出候

御吟味之重而可被 仰付事

一 百万遍淨花院黒谷ヨリ 執奏之者モ

増上寺其談儀所之能化兩判添状ヲ

知恩院江持参申右之小本寺江モ自知

恩院申遣可致出世事

寛永四年七月廿七日 板倉周防守

〔三二一〕

金地院崇伝会して。 神祖の御時定められし法中の制令を議す。(国師日記)

七月十九日条 西城にて。大御所……。此序に京都法中の制令を議せられて。板倉周防守重宗に下さる。其文にいふ。

諸宗の僧侶出世の事。 神祖の制をそむき。みだりに成行よし聞し召れたるにより。三条大納言実条。中院中納言通村もて叡慮を伺ひ。条約定められしのち。出世のものまづ抑留し。そのうへ重て法器を査検し命ぜらるべし。諸宗出世の前後。こたび仰出されし法制の月日を考定すべし。諸寺院の伝奏へも神祖の制をそむき。出世の事こふものありとも。此後みだりに執奏すべからざる旨。兩伝奏にはかり合て命ずべし。五山紫衣。黄衣。西堂の公帖賜はらざるものも。定制以前ならんには其ままたるべし。知恩院執奏の上人号も。定制をそむき。みだりに上人と号する者抑留し。査検のうへかさねて命ぜらるべし。百万遍。淨華院。黒谷より執奏のものも。増上寺檀所の能化兩判の添状を知恩院にもてゆき。小本寺へも知恩院より達し。出世せしむべしとなり。(国師日記。東武実録)

〔参考〕『史料綜覧』卷十六 寛永四年七月十六日

幕府、年寄下総佐倉城主土井利勝ヲシテ、其江戸ノ亭ニ所司代板倉重宗及ビ金地院崇伝(以心ヲ会シ、徳川家康ノ定メシ諸宗法度ヲ議セシム、〔本光国師日記、江城年録、東武実録〕〔参考〕本光国師日記御制法、教令類纂初集、浄土宗年譜)

御黒印續目ノ裏ニモ御印有之
右板倉周防守歸洛之時被 仰付
覺書也

〔三三〇〕

八月六日爲土大炊殿御内證松平右衛
門大夫殿永喜同道ニテ御出知恩院
ニテ出世之官物御談合也書付左ニ
有之

放知恩院上人成出世官物之事

〔三三一〕

八木拾二石 此内六石四斗 禁中エ納
五石六斗 知恩院エ納

是ハ御朱印ニ銀子二百目ト有之

御朱印出候年之八木之相場百

目ニ付六石充仕候其積ニ候ヘハ

十二石乎

拾五石 此内六石四斗 禁中エ納
八石六斗 知恩院エ納

是ハ宗把内々存寄通

拾三石 此内六石四斗 禁中エ納
六石六斗 知恩院エ納

是ハ十二石ト拾五石ト之中ヲ取候ヘハ

如此可有之乎

〔三三二〕

○『史料綜覧』卷十六 寛永四年八月六日
幕府、年寄下総佐倉城主土井利勝ニ命ジテ、書院番頭松平正
綱・儒官林信澄及ビ金地院崇伝(以心ヲシテ、知恩院出世ノ官物
ノコトヲ議定セシム、(本光国師日記)

15

○御当家令条 五九 比叡山諸法度 慶長十三年八月八日

定

一 山門衆徒不勤学道者、住坊不可叶事、但從再興住山僧并坊舍
建立之人一代、雖為非学、可有用捨事、

一 雖勤学道、其身之行儀於不律者、速可及離山事、

一 顯密之名室、為学匠可相統事、

一 為一人二坊三坊拘留、并無住之坊可禁止事、

一 坊領其住持之外、不可有競望事、

一 坊舍并領知之売買質券等、一切可為無用事、

一 衆徒妄結連署、以党類於企非義者、可追放事、

右条々、堅可被相守者也、

慶長十三年戊申八月八日

○ 武家殿制録 九二 比叡山御条目 慶長十三年八月八日

○ 台徳院殿実紀卷八 慶長十三年八月八日条

比叡山延暦寺の条目を下さる。山門の衆徒勤学せざる者。住
坊かなふべからず。ただし山門再興の時より住山の僧。ならび
に坊舍建立の者。非学といへども住山をゆるすべし。学業をつ
とむといへども。行状不良のやからは速に離山せしむべし。顯

八月十一日知恩院宗把来ル上人成
拾
三石ニ今朝大炊殿ニテ被仰渡也

比叡山法度之事

山門衆徒不勤學道者住坊不可叶事

但再興住山僧并坊舍建立之人

一代雖為非學可有用捨事

雖勤學道其身之行儀於不律者速

可及離山事

顯密之名室為學頭可致相續事

為一人二坊三坊抱置并無主之坊可

為禁止事

坊領其住持之外不可有競望事

坊舍并領知之賣買質券一切無用

事

衆徒妄綴連署以黨類於企非儀者

可令追放事

右條々各堅可被相守者也

〔三三〕

〔三四〕

密の名室においては。学匠をして相統せしむべし。一人にて二三坊を兼住するか。又は坊を無住にする事あるべからず。住持の外坊領を競望すべからず。坊舍并に坊領売買質券禁断すべし。衆徒連署して党をむすび。非議をくはだつるにおいては追放たるべしとなり。(令条記)

○『史料綜覧』卷十四 慶長十三年七月十七日

幕府、延暦寺ニ寺領五千石ヲ寄進シ、尋テ、法度七箇条ヲ定ム、
(延暦寺文書、諸法度、「参考」山崎系図、「付録」諸家文書集)

○御当家令条 六一 關東天台宗法度

慶長十八年八月廿六日

關東天台宗法度

一不請本寺之儀、濫住持停止事、

一不遂戒牒、非其器用輩、何附所化、尤可有斟酌、雖然自往古、於法

談所、可隨時宜事、

一諸末寺、不可有背本寺之命事、

一不經關東本寺衆議而、從山門直不可受証文事、

一於于一寺被追放輩、他寺又不能除用、若山門押而於有許容者、

關東又不可承引叡山之下知事、

一所化之面々令一列、或好公事、或企連署之条、其咎甚以不輕、

尤可有制禁事、

附、所化法談所経回、不可闕二季之時節事、

一一山之学頭、別当并衆徒有任雅意族者、於本寺速可遂裁許事、

慶長十三年戊申八月八日 御朱印

〔三四ウ〕

法度

一 不請本寺之儀濫住持停止事
一 不遂戒牒非其器用輩何聊可附
一 所化乎尤可有斟酌雖然從往古
一 於為法談所者可隨時宣事
一 諸末寺不可背本寺之命事
一 不經本寺之衆議而從山門直不可
一 受證文事

〔三五オ〕

一 於于一寺被迫放輩者他寺又不能
一 叙用若山門押而於有許容者關東
一 亦不可承引山門之下知事
一 所化之面々令一列或好公事或企
一 連署之条其咎甚以不輕尤可有制
一 禁事

付所化法談所之經廻不可闕二李時^{〔三〕}
節事

一 一山之學頭別當并衆徒任雅意檢
一 者於本寺連可^{〔三〕}遂裁許事

〔三五ウ〕

右條々任今年二月廿八日先判之旨
弥可相守此趣者也仍如件

慶長十八年八月廿六日 御朱印

右条々、任今年二月廿八日先判之旨、弥可相守此趣者也、仍如件、

慶長十八年八月廿六日 家康公
御判

喜多院

右ハ南閣坊僧正天海へ被下之、

○ 武家殿制録 七八 關東天台宗御条目

慶長十八年八月廿六日

○ 台徳院殿実紀卷廿三 慶長十八年八月廿六日条

仙波喜多院に關東天台宗諸寺の法制を下さる。その文にいふ。
本寺の旨を請ずして。末寺に住職すること停禁たるべし。戒牒
をとげず非器の輩所化に附すべからず。尤斟酌すべし。然とい
へ共昔よりの法談所は時宜に従ふべし。諸末寺等本寺の命に背
べからず。本寺の衆議を歷ずして。山門より直に証状を受べか
らず。一寺に於て追放するものを。他寺にて用ゆべからず。も
し山門おして許容ありとも關東にては叡山の下知を受べからず。
所化の徒一列して訴訟をこのみ。あるは連署して事を企るの類。
その咎尤かるからず。制禁すべし。所化法談所二期の經廻を欠
べからず。一山の学頭別當ならびに衆徒我意に任するやからは。
本寺に於て速に裁許をとぐべし。すべて今年二月廿八日先判の
旨弥守るべしとなり。(令条記)

○ 『史料綜覧』卷十四 慶長十八年八月廿六日

幕府、更ニ、關東天台宗ノ法度ヲ修定ス、(喜多院文書、御当家令条)

17

喜多院

關東天台宗諸法度

一 不伺本寺恣不可住持事

一 非器之輩不可付所化於前々法談所

者用否可隨時宜事

一 為末寺不可違背本寺之下知事

一 不請關東本寺之儀從山門直不可取

證文事

一 於關東追放之仁不可介抱若又於山

門押而有許容者於關東不可請山

門之下知事

一 所化衆構公事不可一列事

一 所化衆法談所之經歷不可闕二季事

一 一山之學頭別當并衆徒至有依怙者

於本寺可有其沙汰事

一 右堅可守此旨者也

慶長十八年二月廿八日 御判

喜多院

常陸國河内郡下妻庄黒子郷

千妙寺法度

〔三七〇〕

○ 武家嚴制錄 七六 關東天台宗御条目

慶長十八年二月廿八日

關東天台宗諸法度

一 不窮本寺、恣不可住持事、

一 非器量之輩不可付所化、但於前々法談所者、用否隨時宜事、

一 為末寺不可違背本寺之下知事、

一 不請關東本寺之儀、從山門直不可取証文事、

一 於關東追放之仁不可介抱、若又於山門押而有許容者、於關東

不可請山門之下知事、

一 所化衆法談所之經歷不可欠一季事、

一 一山之學頭別當并衆徒至有依怙者、於本寺可有其沙汰事、

一 右堅可守此旨者也、

慶長十八年二月廿八日 御判

喜多院

○ 台徳院殿実紀卷廿一 慶長十八年二月廿八日条

この日關東天台諸寺の御判物を。仙波喜多院に下さる。其文にいふ。本寺にうたへずして。恣に住持すべからず。非器の徒をして所化に付すべからず。但しむかしよりの法談所は。時宜にしたがひ用捨すべし。末寺の徒本寺の指揮違背すべからず。關東本寺の旨をうけず。山門の証状を受べからず。關東にて追却せらるる輩を扶助すべからず。もし山門よりおして許容あらば。山門の指揮を受べからず。所化の徒一列して訴訟すべからず。所化法談所の經歷二季を闕べからず。一山の學頭別當并衆徒依怙する事あらば。本寺よりその沙汰すべしとなり。(國師日記)

19

- 一 諸末寺不可違背當本寺之法度事
一 法流以下寺中之僧侶可隨學頭下知事

一 山林竹木寺内門前如先規令免許事
右堅可守此旨者也

慶長十八年二月廿八日 御朱印

- 一 武州比企郡慈光山中道院法度
法流以下并山中諸法度可隨學頭下知事

『三七〇』

- 一 山中之明坊跡并山林惣而可為學頭進退事

- 一 公用造營之時於不勤其役輩者坊領可召放事
右堅可守此旨者也

慶長十八年二月廿八日 御朱印

『三八〇』

20

- 一 常陸國椎尾山法度
法流以下并山中之諸法度可隨學頭下知事

- 一 寺領百石之内二十石者學頭并并寺内門前山林竹木等如先規令免

○ 『史料綜覧』卷十四 慶長十八年二月廿八日

幕府、関東天台宗法度及比常陸千妙寺・武蔵中道院等ノ法度ヲ定ム、(本光国師日記、慈恩寺文書、喜多院文書、御朱印帳)

18

○ 台徳院殿実紀卷廿一 慶長十八年二月廿八日条

また常陸国河内郡下妻庄黒根郷千妙寺へ条目の御朱印を下さる。諸末寺の徒本寺の法令を違犯すべからず。法流以下寺中の僧俗。学頭の指揮にしたがふべし。山林竹木寺内門前先々の如く免許せらるべしとなり。

又同寺へ所領の御朱印を下さる。常陸国河内郡の内黒根郷百石寄付せらる。全く寺納すべしとなり。(国師日記 [20へ続く])

○ 『史料綜覧』卷十四 慶長十八年二月廿八日[前掲17]

19

○ 台徳院殿実紀卷廿一 慶長十八年二月廿八日条

また武蔵国比企郡慈光山中道院に下さるる御朱印には。法流以下并山中之諸法令は。学頭指揮のままたるべし。山中空房并山林はすべて学頭の沙汰たるべし。官事造營のとき不勤の徒は。坊領収公せらるべしとなり。(国師日記 [21へ続く])

○ 『史料綜覧』卷十四 慶長十八年二月廿八日[前掲17]

20

○ 台徳院殿実紀卷廿一 慶長十八年二月廿八日条

21

許事
公用造営之時於不勤其役輩者坊領
可召放事
右堅可守此旨者也
慶長十八年二月廿八日 御朱印

〔三八九〕

武藏國大田庄慈恩寺法度

一流以下并寺中之諸法度可隋学
頭下知事

公用造営之時於不勤其役輩者坊
領可召放同於明坊跡等者可為学
頭指引并寺中之屋敷從他所不可
相抱有来俗屋敷者可為学頭進退事
山林竹本等如先規令免許事
右堅可守此旨者也

〔三九〇〕

慶長十八年二月廿八日 御朱印

22

關東真言宗古儀諸法度之事
一年兩度法談之日限堅不可有増
減事
二季稽古雖為一季不可懈怠事
本寺住山必可遂三ヶ年事

〔三九一〕

又同国椎尾山に下さるる御朱印にいふ。法流以下山中の諸法
度。学頭の命令にしたがふべし。寺領百石の内二十石は学頭領
とし。寺内門前山林竹木等は。先例の如く免許せらる。官事造
営の時不勤の徒は。坊領収公せらるべしとなり。(国師日記)

〔19(続)〕

21

○ 台徳院殿実紀卷廿一 慶長十八年二月廿八日条

また同国太田庄慈恩寺に下さるる御朱印には。法流以下并寺
中諸法令。学頭指揮のままたるべし。官事造営のとき不勤の徒
は。坊領を収公すべし。空房は学頭の沙汰たるべし。寺中宅地
他人の所務となすべからず。これまで有来りし宅地は。学頭沙
汰たるべし。山林竹木先例のごとく。免許せらるべしとなり。(国
師日記)

22

○ 御当家令条 八九 關東密宗古義諸法度

慶長十四年八月廿八日

關東真言宗古義諸法度

一 一年兩度法談之日限、堅不可有増減事、
一 二季稽古、雖為一季、不可懈怠事、
一 本寺住山、必可遂三ヶ年事、
一 雖為本寺住山、不勞所學者不可許能化事、
一 於談義所之諸法度者、可隨能化下知事、

- 一 雖為本寺住山不募所學者不可許
能化事
- 一 於談儀所之諸法度者可隨能化下知
事
- 一 本寺住山之間吾宗之本書普可受學
事
- 一 縱雖有教相之所学無事相傳授者不
可許能化事
- 一 可常為旨佛法興隆專如法之行儀事
於古跡之一寺一山者可令住学匠之能化
事
- 一 右九ヶ条堅可相守者也
慶長十四年八月廿八日 御黒印
- 一 關東諸寺家中
- 一 真言宗諸法度
- 一 從四度加行至授職灌頂師資授法
儀式并衣鉢色淺深可為先規寺
法事
- 一 事相教相習学觀心尤可為專要事
修法者護國利民之基也仍密宗之
建立以之為肝心弥可抽四海安寧之

〔四〇才〕

〔四〇乙〕

- 一本寺住山之間、吾宗本書委可受學事、
一縱雖有教相之所学、無事相之伝授者、不可許能化事、
一可常為旨佛法興隆、如法之行儀事、
一於古跡之一寺一山者、必可令住学匠之能化事、
右条々、堅可相守者也、
慶長十四年八月廿八日
- 武家嚴制録 七一 關東真言古義御条目
關東諸寺家中へ
慶長十四年八月廿八日
- 台徳院殿実紀卷十 慶長十四年八月廿八日条
關東真言古義の諸寺に法令を下さる。其文にいふ。一年兩
度法談の日嚴に増減あるべからず。二季の稽古一季たりとも懈
怠すべからず。本寺住山かならず三が年をとぐべし。本寺住山
すといへども。学業精勵せざるものには。能化をゆるすべから
ず。談義の所々に於ては。能化の下知に従ふべし。本寺住山の
間其宗の本書あまねく受學すべし。たとひ教相の所学あり共。
事相の伝授なきものには。能化をゆるすべからず。常に仏法興
隆のため。宗旨如法の行儀を専ら守るべし。古跡の一寺一山に
於ては。かならず学匠の能化住せしむべし。この条々かたく守
るべしとなり。(令条記、武家嚴制録)
- 『史料綜覧』卷十四 慶長十四年八月廿八日
家康、法度ヲ京都東寺・山城醍醐寺・紀伊高野山学侶方・關東
真言宗古義諸寺及比相模大山寺二下ス、尋デ、秀忠モ亦、東寺・醍
醐寺・高野山学侶方ニ之ヲ下ス、(御当家令条、古今制度集、諸法度、令

丹誠事

一 破戒無慙之比丘可令衆拔事

一 諸末寺可相守本寺之法度若有法
流中絶之儀者不求他流可糺自門
濫觴自由之企於有之者寺領可改
易事

一 新儀之僧積廿ヶ年學問之功遂住
山三ヶ年其後歸國法談可為一會
但數年住山之仁於有教道器量之
著者住能化之許可令常法談執行
事

一 於論席徒謗能化企公事妨學業事
甚以惡僧也速可令擯出於其張本
事

一 於紫衣者殊規模也無 勅許僧侶
叨不可着用之事

一 延喜帝御宇所賜高野山大師之御
衣号檜皮色或染香衣或調紫衣用
赤色然間於香衣者非密宗之掠梁
有智之高僧公達者曾不可着用事
在國之僧近年猥申下上人号着用
香衣甚以無其謂自今以後令停止
訖有智者之著者各別之事

一 右可相守此旨若違背之僧徒於

〔四一才〕

〔四二才〕

〔四三才〕

糸、高野山文書、義演准后日記、三寶院文書、高野春秋、〔參考〕紀伊統風土記、高野山文書、〔付録〕御庵室賴慶駿河下向日記、慶長年中記

23

○ 御当家令条 九一 真言宗諸法度 元和元年七月日

真言宗諸法度 醍醐寺へ被下之、

一 從四度加行、至授職灌頂師資授法之儀式并衣体色淺深、可為如
先規寺法事、

一事相教相習學觀心、尤可為專要事、

一 修法者護國利民之基也、仍密宗之建立以之為肝心、弥可抽四海
安寧之丹誠事、

一 破戒無慙之比丘、可令衆拔事、

一 諸末寺可相守本寺之法度、若有法流中絶之儀者、不求他流、可糺
自門濫觴、自由之企於有之者、可改易寺領事、

一 新儀之僧積廿ヶ年學問功、遂住山三ヶ年、其後歸國法談可為一
會、但數年住山之仁、於有教道器量之著者、任能化之許、可令
常法談執行事、

一 於論席徒謗能化、企公事、妨學業事、甚以惡僧也、遠可令擯出於
其張本事、

一 於紫衣者殊規模之事、無 勅許僧侶叨不可着用事、

一 延喜御宇、所贈賜野山大師之御衣、号檜皮色、或染香衣、或調紫
衣、用赤衣、然間於香衣非密教之棟梁有智之高僧公達者、曾而不
可着事、

一 在國之僧、近年猥申下上人号、着用香衣、甚以無其謂、自今以後、

有之者可處配流者也仍如件

元和元年卯七月 日

高野山寺中法度條々

衆徒行人諸公事任往古之掟可為各別事

衆徒方領内之人足竹木可為一職進退但山上山下之諸伽藍造宮之時者二千石之人足等分ニ出之可召使事

付於人足之着到者從双方出奉行人人方人足着到者從衆徒取之衆徒方人足着到者行人可取之青巖寺之儀者依為 公儀之寺修造之材木并薪等如有來惣山中雖為何之山林可代採事

青巖寺二千石之内千石者住持檢校諸賄之領千石者衆徒中碩學衆可有配分若八人之内欠如之時者學侶之内器量之學者任臆次彼跡可令昇進事付無量光院加增者可為當住一代者也

〔四二ウ〕

〔四三オ〕

〔四三ウ〕

令停止訖、但有智者之耆輩者各別事、

右、可相守此旨、若違背之僧徒於有之者、可処配流者也、仍如件、

元和元年乙卯七月日 御朱印

○ 武家殿制録 六三 真言宗御条目 元和元年七月日

○ 台徳院殿実紀卷三十九 元和元年七月廿四日条

醍醐寺へ下さるる真言法規は、四度加行より授職灌頂に至るまで、師資授法の儀并衣色浅深等、先規寺法の如くたるべし。

事相教相。習学観心尤專要たるべし。修法は尤護国利民の基なり。密宗の建立是を以て簡要とす。弥四海安全の丹誠を抽つべし。

破戒無慙の比丘は脱衣すべし。

諸末寺は本寺の法規を遵行すべし。もし法儀中絶の事あらんには、他流に求めず自門の濫觴を糾明すべし。万一縦恣の企をなす徒あらんには、寺領を没官せらるべし。

新儀の僧廿年蛭雪の功をつみ、三年住山をとげて後帰国せば、一会の法談をゆるさるべし。数年住山の僧教導の器誉あらんには、能化に任じ常法談執行せしむべし。

法論の席に於て能化を誹謗し。訴訟をくはだて。学業を妨るものあらむには、速に其魁首を擯斥せしむべし。

紫衣は尤法中の規模とす。勅許あらずばみだりに着用すべからず。延喜の御宇高野大師(弘法)に賜る御衣は桧皮色とす。或は香衣をそめ。あるひは紫衣をととのへ。或は赤色を用ゆ。されば香衣に於ては、密教の棟梁。有智の高僧貴族の外は着用すべからず。

諸伽藍破壊之時從衆徒行人方江
申送可令修造之於出入等勘者對
衆徒可遂之諸伽藍無簡別以千石
之修理免可致造營事

右之條々堅守此旨紹隆佛法永
代不忘失可抽天下泰平之惓祈
者也

慶長八年五月廿一日

御直判

金剛峯寺衆徒中

高野山寺中法度

兩門徒中之諸沙汰可為如前々事
兩門徒中諸式可順門主異見但門
主之分別重々於非分者可申上之
事

於古跡之院家相續ハ以兩門主相
談撰學者致師弟之契約續血脉可
讓與真俗諸道具事

碩學之仁背古法不可企新儀之事
學侶方知行不論最眞偏頗院家相
當可有配當付兩門徒中無疎意有
入魂万端可被調事
右條々可被守此旨也

〔四四才〕

〔四四乙〕

各国の僧近年猥りに上人号を申おろし。香衣を着するもの尤
其いはれなし。今より後嚴に停禁せらる。もし有智の著ある輩
は格別たるべし。此旨違犯の僧は遠流に処せらるべしとなり。

〔駿府記、令条記〕

○『史料綜覧』卷十四 元和元年七月廿四日

家康、諸宗本山・本寺ノ諸法度ヲ定メ、五山二碩學料ヲ与フ、(三
宝院文書、金地院文書、龍宝山大徳寺誌、妙心寺文書、永平寺文書、総持寺文書、
知恩院文書、増上寺文書、禪林寺文書、駿府記、義演准后日記、義演准后日記裏文
書、本光国師日記、鹿苑日録、大信寺文書、五山碩學并朝鮮修文職次目、〔参考〕三
宝院文書、能登国総持寺文書、駿府記、福成寺文書、高野山大徳院由緒略記、慶長
見聞集、権現様御朱印写)

○ 24

御当家令条 七〇 高野山金剛峯寺諸法度

慶長六年五月廿一日

高野山中法度条々

一衆徒行人諸公事、任往古掟、可為各別事、

一衆徒方領内之人足竹木可為一職進退、但山上山下之諸伽藍造
営之時者、貳万千石之人足等分出之、可召仕事、

附、於人足之着到者、從双方出奉行、行人方人足之着到者、

從衆徒方取之、衆徒方人足之着到者、從行人方可取之事、

一青巖寺之儀者、依為公儀之寺、修造之材木并薪等、此中如有來、
惣山之中、雖為何之山林、可伐採事、

一青巖寺領貳千石之内、千石者住持檢校諸賄之料、千石者衆徒中

慶長十五年四月廿日 御黒印

金剛峯寺衆徒中

〔四五才〕

高野山衆徒中法度御下知条々
檢校職自今以後碩学衆可有昇進
事

但音巖寺二千石之知行者於衆
中擇仁體被寺納檢校并八人之
碩学可有支配

於衆徒中公事出来之時如近年有
來為衆儀憲法令評議可有沙汰若背
衆評仁躰於有之者隨咎之輕重可被
処罪科於及異義者可被訴公儀之
奉行事

〔四五才〕

於衆中喧嘩口論出来之時ハ左右
方可有擯出但後日遂是非之糾明
非義落居之仁者永代可被出交衆
於寺并財產者立仁躰可被遣之於
同宿之輩者小私財以衆議可被付
伽藍之造営諸事理非決定之義不
可有親疎偏頗事
右條々

〔四六才〕

碩学衆八人可有配分、右八人之内闕如之時者、学侶之中器量之
学者任臆次、彼跡可令昇進事、

附、無量光院加增者、可為当住一代事、

一諸伽藍破壞之時者、從衆徒、行人方江申送、可令修造之、於出入
之算勘者、對衆徒可遂之、諸伽藍無簡別、以千石之修理免可致造
當事、

右条々、堅守此旨、紹隆佛法、永代不忘失、可抽天下安泰之懇祈
者也、

慶長六年五月廿一日 家康公御判

金剛峯寺衆徒中

〔參考〕御当家令条 七一 高野山金剛峯寺領御判物

慶長六年五月廿一日

七二 高野山金剛峯寺行人方御判物

慶長六年五月廿一日

○ 25 御当家令条 七七 高野山寺中法度 慶長十五年四月廿日

高野山寺中法度

一衆徒中之諸沙汰、可為如前々事、

一兩門徒中諸式、可順門首異見、但門首之分別重々於非分者、可申
上事、

一於古跡之院家相統者、以南門首相談、撰学者、致師弟契約、統血
脈可讓与真俗之諸道事、

一碩学之仁、背古法、不可企新儀事、

27

内相府先日御法度御判之外重
所得 御意如件
慶長十八年仲秋十六日

金剛峯寺衆徒中

長谷寺法度

〔四六乙〕

為学問住山之所化不滿廿年者不
可執法幢事
坊舍并寺領為私不可有賣買事
所化衆不用能化之命非法於有
之可追放寺中事
右堅可守此旨者也
慶長十七年十月四日 御朱印

常寺能化坊

〔四七オ〕

28

智積院法度

為学問住山之所化不滿廿年者不可
執法幢事
所化衆不用能化之命非法於有之者
可追放寺中事
所化衆中結徒黨企公事者統領人
可追放之若統領不知時者上座一人

一学侶方之知行不論最眞偏頗、院家相応可有配当、附、両門徒中無
疎意有入魂、万端可被調事、
右条々、可被守此旨者也、
慶長十五年四月廿日

金剛峯寺

衆徒中へ

○ 台徳院殿実紀卷十二 慶長十五年四月廿日条

高野山金剛峯寺に法制を下さる。その文にいふ。衆徒等諸事
先規のごとく沙汰すべし。両門徒等諸事門首の指揮に従ふべし。
門首の指揮理なき事あらば聞え上べし。古跡の院家相統せしむ
る者は。両門首會議し。学匠をえらび師弟の契約をなし。血脈
をつがしめし後に。緇素諸調度を譲与すべし。碩学の徒古風を
そむき新義を企べからず。学侶の所領最眞偏頗なく。院家相応
に配分すべし。両門徒等疎意せず。親睦して万事はからふべし。
この数条厳に守るべしとなり。(令条記 国師日記)

○ 『史料綜覧』卷十四 慶長十五年四月二十日

幕府、紀伊高野山学侶ノ条規ヲ定ム、(高野山文書)

26

〔参考〕御当家令条 七九 高野山衆徒法度 慶安二年九月廿一日

高野山衆徒法度

一檢校職之事、自今以後、碩学之人者、如古来可為三ヶ年之住持、
但学衆之人者、可為一ヶ年之住持者也、其外老若之修学、衣鉢之
威儀、可守先規事、

可擯出之事

當院領者豐國領之内二百石也全令

院納如有來可為能化之進退事

寺屋敷上下并所化屋敷兩所如

先規不可有相違事

右堅可守此旨也

慶長十八年四月十日

御朱印

[四七乙]

當院

能化坊

[四八乙]

關東新義真言宗法度

為學問住山之所化不滿廿年者不可

執法幢事

入學問室後闕座之輩有之者永可

拔衆事

座位可為學問階臈次第付不遂

位山不可着香衣事

諸末寺之僧衆不可背本寺之命

結俗縁權門企非法事付不可奪

取他寺之問徒事

不伺本寺不可居住末寺事

右堅可守此旨者也

[四八乙]

一仁和、高雄、東寺、醍醐并高野、此五ヶ寺互致交衆、可勤事教之修

學、此旨弘法之遺誠仁門徒之間修學最初成出可長者、不可乱臆

次云々、然近年仁和、高雄、東寺、醍醐為本寺之由、雖被募其旨、遺

誠分明之上者、法会出仕之時、門跡僧正之外、任戒臈可有列座

事、

一寺号院号先規輒不許事也、然共近年忒称寺院号、甚無謂、令停止

事、

一灌頂授職之作法、或云由緒末寺、或言貧僧結縁、輒執行、於客坊

奥院等非衆非學之宿所、灌頂曼供之執行無先規之由、堅令停止

事、

一天野明神者高野之鎮守也、祭礼神事惣神主、社家、供僧、守先規、

不可企新儀事、

右条々、任元和元年七月日、同三年九月十一日両先判之旨、弥可

相守者也、

慶安二年九月廿一日

〔參考〕『史料綜覧』卷十四 慶長十八年九月十七日

家康、大和吉野金峰山寺ノ本願快元(末食)ノ訴ニ依リ、寺中修理

料ヲ管スル者ノ曲事ヲ裁シ、快元ヲシテ、之ヲ管セシム、(本光国師

日記)

27

○ 御当家令条 九二 長谷寺諸法度 慶長十七年十月十四日

長谷寺諸法度

一為學問住山之所化、不滿廿年者、不可執法幢事、

慶長十八年五月廿一日 御朱印

新儀真言諸本寺

浄土宗諸法度

智恩院之事立置宮門跡門領各別
相定上者不可混雜寺家引導佛
事等者定脇住持如先規可被執行
於十念者為結縁門主自身可有授
與事

於京都門中撰器量之仁六人為役
者可致諸沙汰曾不可有蠱扇偏頗
事

碩学衆於田戒傳授者調道場之
儀式可令執行浅学之輩狠不可
授與事

對在家之人不可令相傳五重之
血脉事

浄土之修学不到十五年者不可
有血脉傳授殊更於璽書許可者
雖為器量之仁不滿二十年者堅
不可相傳事

〔四九才〕

〔四九乙〕

〔五〇才〕

一坊舎并寺領、私不可売買事、
一所化衆不用能化之命、非法有之者、可追放寺中事、
右堅可守此旨者也、

慶長十七年十月十四日 御朱印

當寺能化坊へ

○ 武家嚴制録 七四 長谷寺御条目 慶長十七年五月廿五日
○ 台徳院殿実紀卷二十 慶長十七年十月十四日条

京長谷寺へ条約を下さる。其文にいふ。修学の為住山の所化
等廿年に満ざらんには。法幢を建しむべからず。所化等もし能
化の命を用ひず。非法をくはだつる者あらむには。寺中追放す
べしとなり。(家忠日記追加、当代記)

28

○ 御当家令条 九三 智積院諸法度 慶長十八年四月十日

智積院諸法度

一為学問住山之所化、不滿廿年者、不可執法懂事、
一所化中不聽能化之命、非法之儀於有之者、可追放寺中事、
一所化中結徒党、企公事者、棟梁人可追放之、若棟梁於不知之
者、上座一人可擯出事、
右、堅可相守此旨者也、

慶長十八年四月十日 御朱印

元和三年九月五日 秀忠公御朱印同前、

○ 武家嚴制録 七七 智積院御条目 慶長十八年四月十日

- 一 糺明學問之年騰増上寺當住并其談所之能化以兩判添狀可啓本寺於令満足廿年稽古者可令頂戴正上人之論旨不到廿年者可為權上人事付十五年以來之出世之座次可有正權之分別事
- 一 非古來之學席者私不可立常法幢不弁事理縱橫之深義者相憑文旗貪着名利不可致法談縱令又蒙尊宿之許可雖令勸化空闡佛經祖釋偏事狂言綺語妄莊愚夫耳剩自讚毀他尤是為法表之因諍論之緣堅可制止事
- 一 往來之知識等其所之門中無許容聊尔不可致法談事
- 一 若輩之砌及十ヶ年致學問其後令退轉之僧望色衣袈裟者依其人体六十歳以後可許之但於上人之儀者可有斟酌事
- 一 為平僧分縱雖老年不可致引導事
- 一 於淨土宗諸寺家者縱雖為師匠之附屬恣不可住職事

〔五〇七〕

〔五〇八〕

○ 台徳院殿実紀卷廿二 慶長十八年四月十日条

智積院に御朱印を下さる。學問のため住山の所化廿年に満ざれば法幢をたつべからず。所化の徒能化の命を用ひずびが事あらば寺中を追却すべし。所化等徒党をくはだて。訴論を起すに於てはその酋を追却すべし。もし酋たるものさだかならずば。其党中首座の者を擯出すべし。院領は豊国領の中二百石全く收納し。故例の如く能化進退すべし。寺地上下并所化宅地。先規のまま相違あるべからずとなり。また惣持寺には江州坂田郡の内百二十石。先規のごとく全く收納し。寺地竹木等全く免許せしめらるとなり。また小谷寺には江州浅井郡小谷の内四十四石余。先規のまま收納すべしとなり。竹生島には近江国浅井郡早崎浦のうち三百石。先規のごとく全く收納すべしとなり。これみな智積院に下さるるところなり。(国師日記)

○ 『史料綜覧』卷十四 慶長十八年四月十日

是ヨリ先、山城智積院日誓、駿府二至リ、入院ヲ謝ス、家康、日誓等新義真言僧徒ノ論義ヲ聴ク、是日、智積院ノ法度ヲ定ム、(本光国師日記、時慶卿記、舜旧記、駿府記、智積院文書、諸法度、御当家令条、寺社殿印集、結網集、〔付録〕駿府記、智積院文書)

〔参考〕台徳院殿実紀卷四七 元和三年九月五日条

又智積院に条約を下さる。學問修行のため住山の所化。二十年にみたざる者法幢を立てからず。所化等能化の令を用ひず。非法の事を企る者あらば。寺中を追放すべし。所化朋党を結び。訴訟を企つる者あらば。其謀主寺中を追放すべし。若謀主分明ならざる時は。党中主座の者一人擯出すべしとなり。(令条記、東

- 就相替古跡之住持者可令血脉附法相續若於為前住没後之入院者至流義之源可致傳受事
- 紫衣之諸寺家之住持致隱居之時可脫紫衣事
- 大小之新寺為私不可致建立事
- 借在家構佛前不可求利養事
- 於知識分座次者以血脉 綸旨之次第上下之品可相定事
- 於法門商量之座敷者以學問之戒臆可定上下至其外衆會者以出世之前後可着座之事
- 於所化寺僧之會合者選擇以上者可州座平僧之上事
- 平僧分中聲明法事等之役儀有其嗜輩者問臆之中可居上座事
- 不辨階級之淺深盜高攀自身對上座致緩怠輩者永不可會合事
- 諸寺家之住持任自己之分別背出世之法義者為寺中之老僧兼日可加異見不然有可屬同罪事
- 白旗流義諸國之末寺隨其大小集調報謝錢三ヶ年一度宛以使僧可備影前事

〔五二ウ〕

〔五二オ〕

〔五二エ〕

武実録、貞享書上

29

○ 台徳院殿実紀卷廿一 慶長十八年五月廿一日条

又関東新義真言宗に成下さるる条目には。住山勤学の所化二十年に満ずして法幢を執べからず。入室の後闕座の徒あらんには。永く擯斥すべし。坐班は勤学階級の次第に任すべし。住山を遂ずして香衣を着すべからず。諸末寺の徒本寺の令を違犯すべからず。権門俗縁をかたらひ非法を企べからず。他寺の門徒を奪取べからず。本寺にうたへずして末寺に住居すべからずとなり。(国師日記)

○ 『史料綜覧』卷十四 慶長十八年五月五日

修驗ノ本山・当山両派、役銭ノコトニ依リ相論ス、家康、照高院興意法親王・三宝山義演ヲ召シテ、之ヲ裁決ス、尋デ、修驗道法度及ビ関東新義真言宗法度ヲ定ム、尋デ、両門主、江戸ニ行ク、秀忠又、修驗道法度ヲ出シ、三宝山ヲシテ、山城醍醐寺ノ寺領ヲ安堵セシム、(駿府記、駿府政事録、本光国師日記、明星院所蔵関東新義真言宗法度、三宝山法度、義演准后日記、時慶卿記、孫旧記、能之留帳〔参考〕新編武蔵風土記稿、修驗教義書所収当山門源記、〔付録〕磐城志)

30

○ 御当家令条 一〇六 浄土宗諸法度

浄土宗諸法度

一知恩院之事、立置 宮門跡、門領各別相定之間、不可混乱寺家、

- 一 出世之官物之事 綸旨之分銀子二百文目 參內之分五百文目若為兩樣同時者七百文目相定上者不可論米穀之高下事
- 一 末々諸寺家者從其末寺可致仕置若有理不盡之沙汰者可為本寺之私曲事
- 一 一向無智之道心者等對道俗授十念勸男女與血脉誠以法賊也自今以後堅可停止事
- 一 惡徒出來近年興邪教違經文釈義私勸安心闕六字名号唯称三字廻種之謀計令誑惑衆生是須魔之所行速可令追拂事
- 一 号靈佛靈地之修理不可諸國勸進事
- 一 如舊例夏安居從四月十五日期六月廿九日冬安居從十月十五日可至十二月十五日聊不可有延役事於一夏中容殿之法間十則下讀法間十一則無闕減可令決擇并湯日之外不可有談場懈怠冬安居可為同前事
- 一 夏間之事春從二月朔日期三月廿

〔五三才〕

〔五三才〕

〔五四才〕

- 引導仏事等者、定脇住持、如先規可致執行、於十念、為結縁、門主自身可有授与事、
- 一 於京都門中、撰器量之仁六人、為役者、可致諸沙汰、曾而不可有羸肩偏頗事、
- 一 碩学衆於円戒伝授者、調道場之儀式、可令執行、浅学之輩猥不可授与事、
- 一 对在家之人、不可令相伝五重血脉事、
- 一 浄土修学不至十五年者、不可有血脉伝授、殊更於羣書許可者、雖為器量之仁、不滿廿年者、堅不可有相伝事、
- 一 糺明学問之年臘、増上寺当住并其談義所之能化、以兩判添狀、可啓本寺、於令満足廿年之稽古者、可令頂戴正上人之 綸旨、不至廿年者、可為權上人事、
- 附、十五年以來之出世之座次、可有正權之差別事、
- 一 非古來之学席者、私不可立常法幢事、
- 一 不解事理縱横之深義、着相憑文之族、貪着名利、不可致法談、縱亦蒙尊宿之許可、雖令勸化、空閑仏経相釈、偏事狂言綺語、妄莊愚夫耳、剩自讚毀他、最是為法衰之因、靜論之縁、堅可制止事、
- 一 往來之知識等者其所之門中無許容、聊爾不可致法談事、
- 一 若輩之砌及十ヶ年、致学問、其後令退転之僧、望色袈裟者、依其人体、六十歳以後可許之、但於上人之儀者、可有斟酌事、
- 一 為平僧分、縱雖老年、不可致引導事、
- 一 於浄土宗諸寺家者、雖為師匠之附屬、恣不可住職事、
- 一 就相替古跡之住持者、可令血脉附法相統、若於為前住没後之入院者、至流儀之源、可受伝授事、

九日秋從八月一日可至九月廿七日如兩安居物讀法間不可有懈怠事

一 頌義十人以下之僧不可為寮坊主事

一 諸談所之所化自今以後縱雖令他山老若共不可付替因名事

一 於一寺追放之所化者諸談所之會合不可有之付寺僧同宿等可為同前事

一 諸談林所化之法度悉以可復從上事

右三十五箇條任去元和元年七月日之先判之旨弥可被相守其趣者也

元和二年十一月日 秀忠

増上寺

知恩院エモ被成下御文言言前

〔五四ウ〕

〔五五才〕

一 紫衣之諸寺家之住持、致隱居之時、可脫紫衣事、

一 大小之新寺、為私不可致建立事、

一 借在家構仏前、不可求利養事、

一 於知識分座次者、以血脈 綸旨之次第、上下之品可相定事、

一 於法問商量之座敷者、以學問之戒臆、可定上下、至其外之衆會者、以出世之前後、可着座事、

一 於所化寺僧之會合者、選扱以上者、可列座平僧之上事、

一 平僧分中、声明法事等之役儀、有其嗜輩者、同臆之内可居座上事、

一 不弁階級之淺深、恣高舉自身、对上座致緩怠輩者、永不可會合事、

一 諸寺家之住持、任自己之分別、背出世之法義者、為寺中之老僧、兼日可加異見、不然者、可属同罪事、

一 白旗流儀諸國之末寺、隨其大小之集、調報謝錢、三ヶ年一度宛、以使僧可備影前事、

一 出世之官物之事、綸旨之分銀子貳百文目、參内之分五百文目、若兩様共為同時者七百文目相定上者、不可論米穀之高下事、

一 未々之諸寺家者、從其本寺可致仕置、若有理不尽之沙汰者、可為本寺私曲事、

一 一向無智之道心者等、对在家人授十念、勸男女与血脈、誠以法賊也、自今以後、堅可停止事、

一 惡徒出来、近年興邪教、違經文釈義、私勸安心、闕六字名号、唯称三字、同種々謀計、令誑惑衆生、是須魔民之所行、連可令追弘事、

一 号靈仏靈地之修覆、不可諸國勸進事、

當寺諸末寺如先規有來令出仕御
忌寺役無懈怠可相勤旨被 仰出
候以此旨可被相觸者也

慶長十九年三月廿四日 本多上野介

金地院

〔五五ウ〕

新黒谷

金戒光明寺

〔以下、
行事体〕

一 「參州設楽郡鳳來寺之事

渥美郡牟呂郷村公文名之内式拾貫 如

前々之領掌畢然者毎年從百性前直

可有收務事

一 榎原山口之事年來恣伐取不勤其役云々

太以曲事也如先規杣役可被申付事

〔五六オ〕

一如旧例、夏安居從四月十五日期六月廿九日、冬安居從十月十五日可至極月十五日、聊不可有延促事、

一於一夏中客殿之法問十一則、下説法問十一則、無闕減可令決扱、并湯日之外不可有談場懈怠、冬安居可為同前事、

一夏間之事、春從二月朔日期三月廿九日、秋從八月朔日可至九月廿七日、如兩安居物説法問、不可有懈怠事、

一頌義十人衆以下之僧、不可為寮坊主事、

一諸談所之所化、自今以後、縱雖令他山、老若共不可付替同名事、一於一寺追放之所化者、諸談所之会合不可有之事、

附、寺僧同宿等可為同前事、

一諸檀林所化之法度、悉以可復從上事、

右三拾五箇之条々、永代可相守此旨、若於違背之仁者、隨科之輕重、或可令流罪、或可脱却三衣者也、

元和元乙卯七月日 御判

右ハ智恩院并増上寺、伝通院ニ被下之、

○ 台徳院殿実紀卷三十九 元和元年七月廿四日条

知恩院。増上寺。傳通院へ令せられし浄土宗法規は。知恩院に宮門跡を廩建せられ。門領各別に定めらるれば。寺家に混雜すべからず。引導。仏事等は脇住持先規の如く執行し。十念に於ては結縁のため。門主授与せらるべし。

京都門中に於て其器をえらみ。六人役者と定め。諸事沙汰せしめ。曾て最眞偏頗すべからず。碩学の輩田戒伝授に於ては。道場の儀式をととのへ執行せしむべし。

浅学の徒に猥りに授与すべからず。

諸溝田年貢石米令無沙汰者其在所之地頭代官奉行入江相屈可令催促猶於無沙汰者田地取放新百姓可被申付事
門谷寺領中之輩衆徒中ニ不相斷取判形諸事被申付子細令難渋者可被注進交名共事

「五六ウ」

門谷并寺領之輩從前々他之被官之事者不及沙汰自今以後不可屬他之被官事
門谷寺領中之輩他所ニ令住居由緒候由申田地屋敷等競望事堅令停止之并地子等急度可被請取事

「五七ウ」

黒谷門谷大當下之輩成他之被官其上跡職令斷絶之處彼主人ニ田畠屋敷可為私領之旨申懸之段甚以曲事也急度注進之上可加下知事

諸職人大工自先規不相定之所名大工職及問答修理以下相押云々如往古 衆徒中斗不定其主可被申付事

寺家并寺領從前々為不入之地各棟別反錢地檢其外臨時課役免許之事
寺百姓四分一城普請急用之時者為儀以印判可申付事

「五七ウ」

寺領并門谷竹木不可伐取但城普請急用之時者以印判可申付事

俗人に五重血脈を相伝すべからず。浄土の修學十五年にみたざるもの。血脈伝授あるべからず。殊更靈書許可するに於ては。たとひ其器たりとも。廿年に充ざる者は蔽に相伝べからず。勤學の年臘は増上寺の現住并談義所の能化。兩判の証状を以て本寺に啓達すべし。

廿年稽古の功を満るものは。正上人の綸旨を頂戴せしめ。廿年末滿の者は權上人たるべし。十五年以前の出世座次。正權の差次たるべし。

古來よりの學席にあらずして。私に法幢を立てべからず。事理縦横の深義を解せず。着相憑文の族。名利に貪着して法談すべからず。たとひ尊宿の許可を蒙り。勸化せしむといへども。空しく仏經を聞き偏事を祖釈し。狂言綺語を以て妄に愚民を迷はす。あまつさへ自讃毀他。是法衰の因。諍論の端をひらく。堅く禁絶せしむべし。

遠国より往還の智識は。其所の門中許容せざらんにはみだりに法談すべからず。

少年の時十年勤學して後退転せる僧。色袈裟をのぞむといへども。其人によりて六十歳以後に許すべし。上人号の事は猶斟酌あるべし。平僧はたとひ老年に及ぶといへども。引導はつかふまつるべからず。

浄土一宗の諸寺は。其師の附屬たりとも。私に住職すべからず。相替にて古跡をつぐものは。その血脈附法相統すべし。もし前住沒後入院するに於ては。其流の本源に就て伝授すべし。紫衣の諸寺隠退する時は紫衣を脱すべし。

一 於寺領之内仁開駒口令停止事

右條々如前々無相違領掌畢
師道勤行無怠慢可被拙国家安全
精誠之状如件

天正八年四月廿五日 家康御判

鳳来寺

〔五八オ〕

淨土西山派諸法度

一 所化衆入三年之間先習覺先德之古
抄於衆徒之前每日晴誦依利鈍遲速
可有之事

一 衆入三年之後許寫聖教号之立筆
事

一 頂戴聖教後就善導之御書五部九
卷選擇等受伴頭之指南三經一論
々談決擇可令修鍊事

一 及中年選其器量授法可續宗脉事
當麻曼陀羅注記十卷證空之作以
此注銘文繪相問答一年餘再聽再
問隨其根思量工夫熟時血脉相承

〔五八ウ〕

〔五九オ〕

大小の新寺私に建立すべからず。俗家を借て仏壇をかまへ。
利養を求むべからず。

知識の座次を分つに於ては。血脉編旨の次第上下の品を定む
べし。法問商量の座に於ては。勤学の戒臘を以て上下を定むべ
し。其外の衆会に於ては。出世の前後を以て着座すべし。所化。
寺僧の会遇に於ては。選択以上は平僧の上たるべし。平僧の中
声明法事等の役其能あるものは。同臘たりとも上座たるべし。
階級の浅深を弁へず。恣に高声自身を挙揚し。上座に対し緩
怠をふるまふものは。永くその席に会せしむべからず。
諸寺の住僧自身の私意にまかせ。出世の法義を背くものあら
ば。寺中の老僧平日教戒すべし。もししからざる者は同罪たる
べし。

白旗流義諸国の末寺。其大小にしたがひ報酬錢を集め。三年
に一度使僧を以て影前に備ふべし。

出世の官物。編旨銀二百文目。参内五百文目。合て七百文目
と治定せらるれば。米価の高低にかかはるべからず。

未々諸寺はその本寺より万事沙汰を加ふべし。もし非義の沙
汰あらんには。本寺曲事たるべし。

無智の道心者。俗人に十念を授け。男女をすすめ。血脉を授
ける類は法賊といふべし。今より後堅くこの徒を禁絶すべし。
妄人近年恣に邪教を興し。經文釈義を相違し。私に安心をすす
め。六字名号を闕て唯三字をとなへ。種々の姦計を企て衆生を
幻惑す。是惡魔の所行たれば。この徒速に追払ふべし。
靈仏靈地の修理と称し。各国勸進すべからず。

在之稱之兩部之傳授而後許寺中之小役可令居伴頭事

円成傳授血脉相承可有之事

修法修行器用卓拔之仁衆徒門中

相議許色之袈裟一七日之間令成

道遂門中披露則可為能化分事

辻談義者称街談巷語先輩雖厭之

近代為勸土檀動其企有之尤非正

法令停止事

香衣之 綸旨頂戴之事殊佛法也

法共成就俗諦真諦齊帛依年過耳

順令推拳事先例也雖然近代不限

當宗出世漫在之自今以後復旧例

隨其器量年数衆望之時遂

奏聞 綸旨可有頂戴事

右可相守此旨者也

元和元乙卯七月 日

〔六〇〕

34

大徳寺諸法度

僧臘轉位并佛事勤行等可為如先

規寺法事

參禪修行就善知識三十年費綿密

〔五九ウ〕

旧例の如く夏安居四月五日より六月廿九日を期し。冬安居十月十五日より十二月十五日を期し。聊延促あるべからず。

一夏中客殿法間十則下誦法間十一則。闕減なく決択せしむべし。浴日の外談場懈怠あるべからず。冬安居もこれに同じ。解

間は春二月朔日より。三月廿九日を期とし。秋は八月朔日より。九月廿七日を期とし。読書。法間懈怠すべからず。

碩義十人以下の僧寮坊主たるべからず。法談所の所化今より後。たとひ他山に赴とも。老弱ともに同名を付替へべからず。一

寺追放の所化は諸談所の会遇あるべからず。其他寺僧同宿も同

前たるべし。諸檀林所化の法規ごとく上文に従ふべし。

この三十五条永代此旨を相守るべし。もし違背せしむるに於

ては。科の軽重にまかせ。或は流罪或は三衣を脱却せしむべし

となり。(駿府記、令条記)〔33へ続く〕

○ 台徳院殿実紀卷四十四 元和二年十一月 〔該当記事なし〕

○ 『史料綜覧』卷十五 元和元年七月廿四日 〔前掲23〕

31

32

〔参考〕御当家令条 一二九 参州鳳来寺御朱印

万治三年七月十七日

一三〇 参州鳳来寺御条目

万治三年七月十七日

一三一 参州鳳来寺御下知状

万治三年七月十七日

参州鳳来寺御下知状

万治三年七月十七日

参州鳳来寺御下知状

万治三年七月十七日

妙心寺諸法度
僧臘轉位并佛事勤行等可為如先
規寺法事

〔六一乙〕

元和元年乙卯七月日 御朱印

右條々為寺法相續攸相定如件
諸院各塔主如先規可為輪番但雖
為其門派或若輩或不器之衆可除
輪番事

〔六一乙〕

工夫千七百則話頭了畢之上遍歷
老門普遂請益真諦俗諦成就出世
衆望之時以諸知識之連署於被言
上者開堂入院可許可近年猥申降
綸帖或僧臘不高或修行未熟之衆
依令出世匪啻汚官寺蒙衆人嘲者
甚違干佛制向後有其企者永可追
却其身事

〔六一乙〕

新院建立之時申降 綸帖塔頭披

露先規也然近年為私称寺号院号
事自由之至也向後令停止事

常住領諸塔頭領今度相改別紙錄
之永可有収納事

諸院各塔主如先規可為輪番但雖
為其門派或若輩或不器之衆可除
輪番事

右條々為寺法相續攸相定如件
諸院各塔主如先規可為輪番但雖
為其門派或若輩或不器之衆可除
輪番事

元和元年乙卯七月日 御朱印

妙心寺諸法度
僧臘轉位并佛事勤行等可為如先
規寺法事

妙心寺諸法度
僧臘轉位并佛事勤行等可為如先
規寺法事

万治三年七月十七日

○ 33
御当家令条 一〇七 淨土宗西山派諸法度

元和元年七月日

淨土宗西山派諸法度

一所化衆入三年之間、先習覺先德之古抄、於衆徒之前、每日暗誦、依利鈍遲速可有之事、

一衆入、三年之後、許寫聖教号之立筆事、

一頂戴聖教後、就善導之御疏五部九卷選撰等、受伴頭之指南、三經

一論之談決、可令修練事、

一及中年、選其器量、授法可統宗脈事、

一当麻曼陀羅、注記十卷、証空之作也、以此注銘文、絵相問答一年

余、再聽再問、隨其根思量工夫相熟時、血脈相承在之、称之兩部

伝授、而後許寺中之小役、可令居伴頭事、

一円戒伝授血脈相承可有之事、

一修法修行器用卓拔之仁、衆徒門中相議許色之袈裟、一七日之間

令成道、遂門中披露、則可為能化分事、

一辻談義者、称街談巷語、先輩雖厭之、近年為勸士、檀動其企有之、

尤非正法、令停止事、

一香衣之、綸旨頂戴之事、殊仏法世法共成就、俗諦真諦齊帰依、年

過耳順、令推舉事先例也、雖然近代不限当宗、出世漫有之、自今

以後、復旧例、隨其器量年数、衆望之時遂 奏聞、綸旨可有頂

戴事、

一 參禪修行就善知識三十年費綿密工夫千七百則話頭了畢之上遍歷諸老門普遂請益真諦俗諦成就出世衆望之時以諸知識之連署於被言上者開堂入院可許可近年猥申降綸帖或僧臘不高或修行未熟之衆依令出世匪啻汚官寺蒙衆人嘲者甚違于佛制向後有其企者永可追却其身事

〔六二五〕

一 新院建立之時申降 綸帖塔頭披露先規也然近年為私称寺号院号事自由之至也向後令停止事

一 常住領諸塔頭領今度指出永可有收納事

一 諸院各塔主如先規可為輪番但雖為其門派或若輩或不器之衆可除輪番事

〔六二六〕

右條々為寺法相續攸相定如件
元和元年乙卯七月日 御朱印

36

一以下
行書体

寛永五年戊辰三月十三日從土井大炊殿御使者西丸江可罷出由則出仕大德寺妙

右、可相守此旨者也、

元和元乙卯七月日

右ハ粟生光明寺依為無住、当麻禪林寺え被下之、

○ 武家嚴制録 五八 浄土西山派御条目 元和元年七月日

○ 台徳院殿実紀卷三十九 元和元年七月廿四日条

西山派の法規は。粟生光明寺に授くべしといへども。光明寺住持あらざるをもて当麻禪寺にさづく。その文にいふ。

所化列に入て三年の間は。先徳の古抄を習字し。衆徒の前に於て毎日講誦し。利鈍によりて遅速あるべし。三年の後聖教を写すことをゆるす。是を立筆と号す。聖教を頂戴して後。善導の疏。五部九卷選択等。伴頭の指南をうけ。三經一論。談決択等修練せしむべし。

中年に及ばば其器をえらみ。授法して宗脈をつぐべし。

当麻曼陀羅注記十卷は証空の作なり。此注銘文絵相問答を以て。一年余再聴再問。其根氣にしたがひ。思量工夫相熟するを待て。血脈相承あるべし。これを両部合伝と称す。この伝授の後。寺中の小役をめし伴頭におらしむべし。円戒伝授血脈相承有べし。

修法修行。器用卓抜の僧あらば衆徒相議して色袈裟をゆるし。

一七日の間成道せしめ。門中披露をとけば能化とすべし。

辻談義といふは街談巷説とて。先輩殊にこれを厭ふ所なり。近年ややもすれば土民を勧化すと称し。この企をなす者あり。尤正法にあらざれば停禁すべし。

香衣綸旨頂戴の事。仏法世法共に成就し。俗諦真諦ひとしく

〔以下、増補條〕

天下曹洞宗法度

一 非三十年修行成就之人而立法幢事

心寺出世猥成義御穿鑿今度

東照宮十三年忌ニ御當被成候間出世御押之内御赦免可有之歟但大德寺者

〔六三〇〕

不謂御返答申付重而御吟味可有之由也妙心寺者以御書付御赦免被 仰付

妙心寺出世之衆御免之寛

一 御朱印入院開堂之儀式相調可申旨ニ候間縱年齡者三十年之修行たり不申候共入院開堂之儀迄調定成ニ出世仕候衆者此度権現様十三年ニ付御免之事

〔六三一〕

一 御朱印三十年之修行畢而出世可仕之旨御座候之間此度五十年ニ而出世いたし候衆者可被成御免候廿歳より修行仕候得者五十迄者三十年之修行當候間五十二而出世仕候衆者 御朱印ニ茂大かた不申候歟入院開堂之義も不相調居成ニ出世いたし其上年も五十之内ニ而仕候得者兩條迄御朱印茂そむき候間不被成御免之事

〔六四〇〕

○ 御当家令条 九七 大德寺諸法度

元和元年七月日

大德寺諸法度

一 僧臘転位并仏事勤行等、可為如先規寺法事、

一 參禪修行、就善知識、三十年費綿密工夫、千七百則話頭了畢之上、

一 遍歷諸老門、普遂請益、真諦俗諦成就、出世衆望之時、以諸知識

之連署、於致言上者、開堂入院可許可、近年猥申降輪帖、或僧臘

不高、或修行未熟之衆、依令出世、甞匪汚官寺、蒙衆人嘲者、甚違

于仏制、向後有其企者、永可追却其身事、

一 新院建立之時、申降 輪帖、塔頭披露先規也、然近年為私称寺号

院号事、自由之至也、向後令停止事、

一 常住領諸塔頭領、今度相改、別紙録之、永可有収納事、

一 諸院各塔主、如先規可為輪番、但雖為其門派、或若輩或不器之衆、

可除輪番事、

右条々、為寺法相統、所相定如件、

元和元乙卯年七月日 家康公御朱印

○ 武家殿制録 六〇 大德寺御条目 元和元年七月日

○ 台德院殿実紀卷三十九 元和元年七月廿四日条

一 不遂二十年修行致江湖頭事

一 寺中追放之惠比丘於諸山許容事

一 致江湖頭不經五年轉衣事并修行

未熟之僧致轉衣事

一 為末山背本寺之掟事

右條々若於此旨背者可寺中追

放者也

慶長十七年五月廿八日 御朱印

〔六四ウ〕

曹洞宗

永平寺諸法度

一 遂二十年之修行致江湖頭經五年僧

有轉衣之望者以嗣法師之推挙状致

登山可申理從當寺就傳奏申降

綸旨以其上出世轉衣可有披露付

非三十年修行了畢者不可立法幢事

一世之戒臈者可為 綸旨日付次第

事

一 至紫衣者當寺惣持寺為當住之仁者

經奏問 勅許之時可有着用兩寺之

外一切不可着用於退院者可脫紫

衣事

〔六五オ〕

又大德寺の法規は。僧臘転位并仏事勤行等先規のごとくたるべし。參禪修行善知識に就て。卅年綿密の工夫を費し。千七百則話頭了畢の上に。遍く諸老の門を経歴し。普く請益をとげ。真諦俗諦成就。出世衆望の時。諸知識の連署を以て建白するに於ては。入院開堂を許さるべし。近年の如きは猥りに綸旨を申下し。あるは僧臘も高からず。或は修行も未熟の徒出世せしむるにより。ただ官寺を汚すのみにあらず。廣く世人の嘲をうくる事。甚法制に違へり。今より後。さるひがこと企る者は。永く其身を追却すべし。

新院新建の時は綸旨を申おろして後。塔頭披露をなすをもて先規とす。しかるに近年私に寺号院号を称する事。尤縦恣の至りとす。今より後嚴に禁断すべし。

常住領。諸塔頭領。今度進呈する所のごとく永く收納すべし。諸院各塔の主先規の如く輪番たるべし。たとひ門派たりとも。弱齡又は非器の僧は輪番せしむべからず。これ寺法相続の為。新に令し下さるる所なりとぞ。

妙心寺の法規も是に同じ。

○『史料綜覽』卷十五 元和元年七月廿四日 〔前掲23〕

35

○御当家令条 九八 妙心寺諸法度 元和元年七月日

御文言大德寺同前故、略之、

○武家嚴制録 六〇 大德寺御条目 元和元年七月日

私曰、妙心寺御条目准右。

一 開山諱越前一國之諸末寺不殘可出

仕但遠國者可為志趣次第事

日本曹洞下之末派如先規可守當寺之家訓事

右近年法度相乱往々紫衣黃衣

着用之僧滿巷衢違佛制受人嘲

法道陵夷無甚於此且為佛法紹隆

為宗門繁榮相定訖若於違背之僧

徒有之者可處配流仍如件

元和元年乙卯七月日 御朱印

〔六六オ〕

總持寺諸法度

一 遂二十年之修行致江湖頭經五年

僧有轉衣之望者以嗣法師之推舉

狀致登山可申理之事

一 從當寺就傳奏申降 綸旨以其上

出世轉衣可有披露付非三十年修行

了畢者不可立法幢之事

一 出世之戒牒者可為 綸旨日付次第

付鑒山峨山派之末流如先規可守

〔六六ウ〕

當寺之家訓事

一 至紫衣者永平寺當寺為當住仁者

經奏聞 勅許之時可有着用兩寺

之外一切不可着用於退院者可

○ 台徳院殿実紀卷三十九 元和元年七月廿四日条 〔34参照〕

○ 『史料綜覧』卷十五 元和元年七月廿四日 〔前掲23〕

○ 36 大猷院殿実紀卷十一 寛永五年三月

三月十日条 金地院崇伝を西城にめして。大徳寺玉室。沢庵。江

月三僧の訴状を議せらる。(国師日記)

三月十三日条 〔該当記事なし〕

○ 『史料綜覧』卷十六 寛永五年三月十日

是ヨリ先、幕府、大徳寺・妙心寺僧侶ノ出世ノ、諸法度ニ違反ス

ルヲ譴メテ、悉ク之ヲ停ム、大徳寺宗彭(沢庵等、之ニ服セス、是

日、秀忠、金地院崇伝(以心)ニ命ジテ、年寄ヲ会シ、其訴ヲ議セシ

ム、(祥雲寺所藏沢庵自筆抗弁書 本光国師日記「参考」本光国師日記、沢庵和尚

紀年録、東武実録、諸法度、妙心寺諸法度、龍宝山大徳寺誌)

○ 37 御当家令条 九九 曹洞宗法度 慶長十七年五月廿八日

曹洞宗法度

一 不在三十年修行成就之僧、不可立法幢事、

一 不遂廿年修行者、不可致江湖頭事、

一 寺中追放之惡比丘、於諸山不可有許容事、

一致江湖頭之後、不經五年、并修行未熟之僧、不可転衣事、

一 諸末寺、不可違背本寺之法度事、

右条々、若於違背者、速可追放寺中者也、

脱紫衣事

開山二代忌共加賀能登越中三ヶ國之諸末寺不殘可出仕但遠國者可為志趣次第事

右近年法度相乱往々紫衣黃衣着用之僧滿巷衢違佛制受人嘲法道陵夷無甚於此且為佛法紹隆且為宗門繁榮相定訖若於違背僧徒有之可處配流者也依如件

元和元年乙卯七月日 御朱印

興福寺法度

坊舍并寺領為私不可有賣買事号當一檀那從俗方寺之裁判不可有之事付兒并新發意者懃成後見可有之事衆徒如前々有來可順寺務之命事右堅可被守此旨者也

慶長十七年九月廿七日 上様御判

〔六七〇〕

〔六七ウ〕

慶長十七年五月廿八日

右御朱印、下総国関宿惣寧寺・武州越生龍穩寺・遠州大洞院、依為關東惣録司、被下之、常州富田大中寺へは後日被下之、武家嚴制録 七五 天下曹洞宗御条目

慶長十七年五月廿八日

○ 台徳院殿実紀卷十九 慶長十七年五月廿八日条

曹洞宗御朱印を。遠州大洞院可睡齋。武州越生龍穩寺。下総関宿惣寧寺。關東の惣録司たるによりて下さる。常州富田大中寺へは重ねて賜ふ。其文に曰。三十年修行成就の僧にあらざして。法幢を立てからず。二十年の修行を遂ざる僧を江湖の頭にすべからず。寺中追却の惡比丘を。諸山に於て許容すべからず。江湖の後五年をへず転衣すべからず。并修行未熟の僧転衣すべからず。末山の徒本寺の法令に背くべからず。此旨違背の者あらんには。寺中放逐すべしとなり。(国師日記)

○ 『史料綜覧』卷十四 慶長十七年五月廿八日

家康、曹洞宗法度ヲ、武蔵龍穩寺・下総総寧寺・遠江大洞院ノ三寺ニ分ツ、尋デ、秀忠モ亦、龍穩寺及ビ総寧寺ニ出シ、家康、又、下野大中寺ニ之ヲ下ス、(御当家令条、遠州可睡齋書上写、総寧寺文書、本光国師日記、駿府記、新編会津風土記、〔参考〕国府台軍記、下総旧事考、新編武蔵風土記稿、遠江風土記伝、下野国志、三箇寺寺格願書留之扣帳、明治四年大中寺書上、諸嶽山記録抄記、總持寺由緒拔萃抄記)

○ 38

御当家令条

一〇〇

永平寺諸法度

元和元年七月

41

當寺寺務御坊

〔六八才〕

成菩提院法度之事

天下安全御祈念長日護摩不可有

油斷事

專教觀二道可被執行佛法事

院領之儀其住持外不可有他競望事

院領之賣買質券等可被禁止事

仕先例之旨惡行所化速可被追放事

門前之者於成不儀者如先規從住持

可被申付事

〔六八ウ〕

右條々堅可相守者也仍如件

慶長十三年戊申十月四日 御黒印

42

戸隠山法度

顯光寺三院之衆徒不傳受灌頂者

不可叶住坊但從再興之砌有功勞住

山衆徒者一代可有捨事

從先師雖為相續坊室其身行儀有

破戒之沙汰者遂糺明於實犯露頭

者可追放寺中事

為平坊從他院坊職拘持儀一切可為

〔六九才〕

永平寺諸法度

一遂廿年之修行、致江湖頭、經五年僧、有転衣之望者、以嗣法師之

推挙狀、致登山、可申理、從當寺就伝奏、申降、綸旨、以其上出世

転衣可有披露、出世之戒臆者可 綸旨日付次第事、

一非三十年修行了畢者、不可立法幢事、

一至紫衣者、當寺總持寺為當住仁者經 奏聞、勅許之時可有着用、

阿寺之外一切不可着用、於退院者、可脱紫衣事、

一開山忌、越前一国之諸末寺不殘可出仕、但遠国者可為志趣次

第事、

一日本曹洞下之末流、如先規可守當寺之家訓事、

右、近年法度相乱、往々紫衣黄衣着用之僧滿巷衢、違于仏制、

受人嘲、法道陵夷無甚於此、且為仏法紹隆且為宗門繁榮相定畢、

若於違背僧徒有之者、可処配流者也、仍如件、

元和元乙卯七月日

○ 武家嚴制録 六一 永平寺御条目 元和元年七月日

○ 台徳院殿実紀卷三十九 元和元年七月

七月八日条 越前永平寺 二条に參謁す。(駿府記)

七月十三日条 越前国永平寺。能登国総持寺の僧等。曹洞派に

御印書賜はらん事を請たてまつる。(駿府記)

七月廿四日条 越前国永平寺の法規にいふ。

二十年の修行をとげ。江湖の頭となり。五年をふるの僧転衣

の望あらんには。嗣法師の推挙狀を以て登山し申出る時。当寺

より伝奏につき綸旨を申下し。其上を以て出世。転衣披露有べ

し。

禁止事

寺役勤行等并伽藍僧坊修造之砌
從大坊可申付事

衆徒猥續連署與徒黨企非儀者張
本之者速可令追放者也

右條々堅可相守此旨者也
慶長十七年五月朔日 御朱印

〔六九ウ〕

諸神社

定 男山八幡宮

一 石清水八幡宮放生川為靈地上江申
付ル地下人等如前々可制禁事

一 安居之神事為地下人相勤上對他
所并坊寺田畑等於令沽却者相改
之可毀破事

〔七〇オ〕

一 令居住于他所社領之内於致知行
輩者是又可令毀破事

一 地下人跡式事構新儀寺院遁社役
輩禁制事

一 殺生禁断之上自然於鷹仕輩者可
申断之若有濫之族者註交名急度
可言上事

出世の戒臘は綸旨日付次第たるべし。三十年の修行了畢にあらずして。法幢を立てべからず。

紫衣に至りては当寺并総持寺の現住奏聞をへ。勅許の時これを着すべし。両寺の外一切着すべからず。当寺退去に於ては紫衣を脱すべし。

開山忌には越前一国の末寺悉く出会すべし。遠国に於ては志にまかすべし。

日本曹洞の末流先規の如く。当寺の訓戒を守るべし。近年法度廢乱し。みだりに紫衣。黄衣の僧街衢に充滿す。これ仏制に違ひ世人の嘲をうく。仏道の陵夷これより甚敷はなし。今度仏法紹隆。宗門繁榮のためかく令せらる。この令違犯の僧等は。配流せらるべしとなり。〔令条記〕〔39へ続く〕

○『史料綜覧』卷十五 元和元年七月廿四日 〔前掲23〕

39

○御当家令条 一〇一 總持寺諸法度 元和元年七月日

總持寺諸法度

一 遂廿年之修行、致江湖頭、經五年僧、有転衣之望者、以嗣法師之推挙状、致登山、可申理、從当寺就伝奏申降、綸旨、以其上出世転衣可有披露、出世之戒臘者可綸旨日付次第事、

附、非三十年修行了畢者、不可立法幢事、

一 至紫衣者、永平寺当寺為当住仁者、經奏聞、勅許之時可有着用、両寺之外一切不可着用、於退院者、可脱紫衣事、
一 開山二代忌共、加賀、能登、越中三ヶ国之諸末寺不殘可出仕、

右八幡八郷檢地免許之事并神事

〔七〇七〕

祭札等山上山下社法次第其以
任去慶長十五年九月廿五日先
判之旨弥不可有相違者守此旨
為社家中嚴密申付之可勵國家
安治之懇祈精誠者也

慶長十八年七月廿三日 御黒印

田中

新善法寺

壇

善法寺

〔七〇八〕

春日御供御修理祭札諸下行并
學問領五師領分

高五千五百八十七石五斗餘大和
国所々

一

納方寺務并喜多院權別當以指圖
一年替 從寺中三人充中坊五師
時之觸口出合百姓前物成相究春
日御藏唐院新坊江納之相符可付
置事

御神供者一ヶ月五拾七石二斗

〔七〇九〕

但遠国者可為志趣次第事、

右近年法度相乱、往々紫衣着用之僧滿巷衢、違于仏制、受人嘲、
法道陵夷無甚於此、且為仏法紹隆且為宗門繁榮、相定訖、若於違
背僧徒有之者、可処配流者也、仍如件、

元和元乙卯七月日

○ 武家嚴制録 六二 總持寺御条目 元和元年七月日

○ 台徳院殿実紀卷三十九 元和元年七月

七月十二日条 能登国總持寺 二条にのぼり拝謁す。(駿府記)

七月十三日条 越前国永平寺。能登国總持寺の僧等。曹洞派に

御印書賜はらん事を請たてまつる。(駿府記)

七月廿四日条 また總持寺の法規にいふ。

二十年の修行をとげ。江湖頭五年をふるの僧転衣の望あらむ

には。嗣法師の推挙状をもて登山し。其旨申出べし。当寺より

伝奏につきて。綸旨を申下したる上にて。出世。転衣。披露あ

るべし。

出世の戒臘は綸旨の日付次第たるべし。

三十年の修行了畢にあらずしては。法幢を立てべからず。

紫衣にいたつては永平寺并当寺の現住奏聞をへて。勅許の

時着用し。当寺の外は一切着用すべからず。当寺退去せば紫衣

を脱すべし。

開山二世両忌ともに加賀。能登。越中三国の末寺のこらず出

会すべし。遠国の末寺は志趣にまかすべし。

近年法規混雑し。紫黄の僧巷に遍満す。尤仏制にたがひ衆人

の嘲をうく。法道の陵夷これより甚しきはなし。且は仏法紹隆。

〔五〕
七、補充以納俵来月分者前之月
廿八日何茂立合可相渡事

所之破損御修理事當寺務喜多院
權別當其外右之役人不殘出合令
相談可相究事

諸方江音信物右同前事

一 拂勘定毎年十月廿一日出合可相
極事

一 五師田共ニ高百五十石分隨其年之
物成可為五師領事付口米五師可
為代官給事

一 衆僧三人仁現米一人ニ付拾石宛可遣之
事

一 承仕四人仁現米一人ニ付三石宛可遣之
事

右條々堅可相守此旨者也

元和三年九月七日 安藤對馬守
土井大炊頭
板倉伊賀守
本多上野介

〔七二〕

〔七三〕

且は宗門繁榮のため。かくの如く令せらるれば。もし違犯の僧
は配流に処せらるべしとなり。(令条記)

○『史料綜覧』卷十五 元和元年七月廿四日 〔前掲23〕

40

○ 御当家令条 四三 興福寺法度 慶長十七年九月廿七日

興福寺法度

一 坊舎并寺領為私不可有売買事、

一 号旧檀那、從俗方、寺之裁判不可有事、

附、兎并新發意者、慥成後見可有事、

一 衆徒如前々有来、可順寺務之命事、

右、堅可被守此旨者也、

慶長十七年九月廿七日

当寺寺務一乘院殿

○ 武家嚴制録 七三 興福寺御条目 慶長十七年九月廿七日

○ 台徳院殿実紀卷二十 慶長十七年九月廿七日条

一 乘院門跡尊勢の請により。南都興福寺に条約をなし下さる。

其文にいふ。坊舎并寺領私に売買すべからず。一 檀那と号して

俗人より寺中の事沙汰すべからず。兎ならびに新發意には。嚴

に補導の人を備ふべし。衆徒等は古例のごとく。寺務の命令に

したがひ違犯あるべからずとなり。(国師日記)

○『史料綜覧』卷十四 慶長十七年九月廿七日

家康、奈良興福寺ノ法度ヲ定ム、(本光国師日記、諸法度、御当家令条、

家忠日記増補)

興福寺役者中

[七三〇]

春日社領并興福寺

一	千五百五拾四石二斗餘	神供田但社家方
一	千六百五十一石八斗餘	灯明田但称宜方
一	千四百九拾五石二斗	一 乘 院領
一	九百五拾一石七斗餘	大 乘 院領
一	貳百八拾石	喜多院家領
一	貳百九拾石	院家中領
一	七千七百貳拾一石餘	諸 院 諸 坊
一	三千四百七拾五石九斗餘	五師領
一	千石	神官領
一	千七拾一石	學問領五師領
一	千九百九拾五石三斗餘	修理方五師領
一	三拾三石貳斗餘	祈禱所六ヶ之屋并會
一	三百八拾石	式法事之入用
一	拾九石九斗餘	称 宜 屋 敷
		衆 徒 分
		辻將監并正宝院
		廊承仕屋敷
	都合貳万千百拾九石五斗餘	

[七四〇]

○ 41

御当家令条 一二五 成菩提院法度

慶長十三年十一月四日

成菩提院法度

一天下安全御祈念、長日護摩不可有油断事、
 一專教觀二道、可被執行仏法事、
 一院領之儀、其住持之外不可有競望事、
 一院領之売買質券等、可被禁止事、
 一為頭密之名室故、以學匠可被相統事、
 一任先例之旨、惡行之所化速可被追放事、
 一門前之者於成不義者、如先規從住持可申付事、
 一右条々、堅可相守者也、仍如件、

慶長十三年戊申十一月四日

○ 武家殿制録 六七 成菩提院御条目 慶長十三年十月四日

○ 台徳院殿実紀卷八 慶長十三年十一月四日条

成菩提院に法令をくださる。天下安泰の祈念、長日護摩油断有べからず。教觀二道を専らとなし。佛法執行すべし。院領はその住職の外競望有べからず。院領の売買、質券等禁断すべし。頭密の名室たるが故。学匠をもて相統せしむべし。旧制の旨にまかせ。惡行の徒は速に追放つべし。門前に住居する土人等不良の挙動せば。住僧殿に沙汰すべしとなり。(令条記)

○ 『史料綜覧』卷十四 慶長十三年十月四日

家康、近江成菩提院ノ法度ヲ定メ、院領ヲ寄進シ、諸役ヲ免除

右可全社納但五師預分支配等可相
守別紙目錄之旨者也

元和三年九月六日

安藤對馬守

土井大炊頭

板倉伊賀守

本多上野介

異國

46

一 慶長十六年呂宋國江被遣

御朱印之案文

自五和使者到來黑船欲來朝之由
不可有異儀也賣買法度以下如前
規可無相違者也若違亂之輩於有
之者可處其罪宜可承知此旨也

黑 船

慶長十八癸丑十一月廿二日之夜於江戸新城蒙

大相國公之鈞命伴天連追放之文製之

其夜從鷄鳴至于曙天文成矣翌廿三獻

御前厥文曰

乾為父坤為母人生於其中間三才於
是定矣夫日本者元是神國也陰陽不
測名之謂神聖之為聖靈之為靈誰不
尊崇況人之得生悉陰陽之所感也五體

[七五乙]

[七四乙]

又、又、相模大山寺二學領ヲ寄進又、(成菩提院文書、本光國師日記、相州
大山寺緣起〔參考〕近江國輿地志略)

42

○ 御当家令条 五○ 信州戸隠山法度 慶長十七年五月朔日

戸隠山法度

一 顯光寺三院之衆徒不伝受灌頂者、不可叶住坊、但從再興之砌、有
切勞住山衆徒者、一代可為用捨事、

一 從先師雖為相統坊室、其身行儀有破戒之沙汰者、遂糺明、於実犯
露頭者、可追放寺中事、

一 為平坊從他院坊職拘持儀、一切可為禁止事、

一 寺役勤行等并伽藍僧坊修造之砌、從大坊可申付事、

一 衆徒猥結連署、与徒党、企非義者、張本之者速可被追放事、

右条々、堅可相守者也、

慶長十七年五月朔日

○ 御当家令条 五一 信州戸隠山神領御朱印

慶長十八年七月十七日

戸隠山神領信濃国水内郡之内所々都合千石事、任去年五月朔日
先判之旨、至当職五百石、社僧分三百石、社家分貳百石令社納、
并社領村里門前境内山林竹木等為守護不入之地、永不可有相違
者也、弥可勤国家安治懇祈之精誠狀如件、

慶長十八年七月十七日

別当坊

社僧中

六塵起居動靜須與不離神々非求于他人々具足箇々圓成廻是神之體也又稱佛国不無據文云惟神明應迹国而大日之本國矣法華曰諸佛救世者住大神通為悅衆生故現無量神力此金口妙文神與佛其名異而其趣一者恰如合符節上古縉素各蒙神助航大洋而遠入震旦求佛家之法求仁道之教孜孜屹々而内外之典籍負將來後來之未學師々相承的々傳受佛法之昌盛起越於異朝豈是非佛法東漸乎爰吉利支丹之徒黨適來於日本非啻渡商船而遍資財叨欲弘邪法惑正宗以改城中之政号作已有是大禍之萌也不可有不製矣 日本者神国佛國而尊神敬佛專仁義之道匡善惡之法有過犯之輩隨其輕重行墨劓刑宮大辟之五刑礼云喪多而服五罪多而刑五有罪之疑者乃以神為證誓定罪罰之條目犯不犯之區別纖毫不差五逆十惡之罪人者是佛神三寶人天大衆之所棄捐也積惡之餘殃難逃或斬罪或炮烙獲罪如是

〔七五ウ〕

盛起越於異朝豈是非佛法東漸乎爰吉利支丹之徒黨適來於日本非啻渡商船而遍資財叨欲弘邪法惑正宗以改城中之政号作已有是大禍之萌也不可有不製矣 日本者神国佛國而尊神敬佛專仁義之道匡善惡之法有過犯之輩隨其輕重行墨劓刑宮大辟之五刑礼云喪多而服五罪多而刑五有罪之疑者乃以神為證誓定罪罰之條目犯不犯之區別纖毫不差五逆十惡之罪人者是佛神三寶人天大衆之所棄捐也積惡之餘殃難逃或斬罪或炮烙獲罪如是

〔七六ウ〕

犯之輩隨其輕重行墨劓刑宮大辟之五刑礼云喪多而服五罪多而刑五有罪之疑者乃以神為證誓定罪罰之條目犯不犯之區別纖毫不差五逆十惡之罪人者是佛神三寶人天大衆之所棄捐也積惡之餘殃難逃或斬罪或炮烙獲罪如是

〔七六ウ〕

犯之輩隨其輕重行墨劓刑宮大辟之五刑礼云喪多而服五罪多而刑五有罪之疑者乃以神為證誓定罪罰之條目犯不犯之區別纖毫不差五逆十惡之罪人者是佛神三寶人天大衆之所棄捐也積惡之餘殃難逃或斬罪或炮烙獲罪如是

社家方

○ 武家殿制録 七二 戸隠山御条目 慶長十七年五月朔日
○ 台徳院殿実紀卷十九 慶長十七年五月朔日条

この日信濃国戸隠山に社領の御朱印をたまふ。その文にいふ。信濃国水内郡栗田村。二条上楠川。合二百石は先に寄付せらる。上野村栃原内下楠川。宇和原。奈良尾。合て八百石は新に寄付せらる。この惣計千石の内。別当五百石。社僧三百石。社家二百石。全く收納すべし。其他社領門前境内山林竹木守護不入の地と定めらるる事。永代相違有べからず。弥天下泰平の祈願を抽べきものなりとぞ。又令せらるるは。戸隠山顕光寺三院の衆徒。いまだ灌頂伝授せざるもの住坊せしむべからず。ただし再興の時功勞の衆徒。生涯は住山をゆるさるべし。先師より相続の坊室たりといへども。行儀破戒の聞えあらんには査檢し。違犯露頭の者は放逐すべし。平坊として他院の坊職抱持事一切禁ずべし。寺役勤行并に伽藍僧坊修理は。大坊の沙汰たるべし。衆徒猥りに連署し。党を結び非義をくはだてば。首謀の者速に追放すべし。此条殿に遵奉すべしとなり。(此文國師日記には十月四日に出す(駿府政事録、國師日記、令条記))

○ 台徳院殿実紀卷廿三 慶長十八年七月十七日条
また信濃国戸隠山神領の御朱印を別当顕光寺に下さる。戸隠山神領信濃国水内郡の内千石。去年五月朔日先判のむねにまかせ。別当料五百石。社僧料三百石。社家料二百石收納せしむべし。社領村里門前境内山林竹木等守護不入の地として。ながく相違あるべからずとなり。(令条記)

勸善懲惡之道也欲制惡易積欲進善善難保豈不加炳誠乎現世猶如此後世冥道闇者之呵責三世諸佛難求歷代列祖不奈可畏可畏被伴

〔七七乙〕

天連徒堂皆反伴政令嫌疑神道誹謗正法殘義損善見有刑人載欣載奔自并自札以是為宗之本懷非邪法何哉實神敵佛敵也急不禁後世必有國家之患殊司号令不

制之却蒙天譴矣日本國之内寸土尺地無所措手足遠掃禳之強有違

命者可刑罰之今幸受天之詔命主于日域乘國柄者有年於茲外顯五常之至德內帰一大之藏教

〔七七乙〕

是故國豐民安經曰現世安穩後生善處孔夫子亦曰身體髮膚受于父母不敢毀傷孝之始也全其身乃是敬神也早斥彼邪法弥昌吾正法世既雖及濫季益神道佛法紹隆之善政也一天四海宜承知莫敢違失矣

慶長十八龍集癸丑臘月日

〔七八乙〕

○『史料綜覽』卷十四 慶長十七年五月一日

幕府、信濃戸隠社ニ、社領ヲ寄進シ、其条規ヲ定ム、又、山城高台寺・大通寺・二尊院・瑞雲院・清涼寺・近江飯道寺・百濟寺・金勝寺・江戸増上寺・駿河長源院ニ、寺領ヲ寄進シ、其諸役ヲ免ジ、又ハ安堵セシム、(本光國師日記、御当家令条、高台寺文書、大通寺文書、御朱印帳、清涼寺書上、〔參考〕本光國師日記、清涼史略)

43

○御当家令条 三八 石清水八幡宮掟

慶長十八年七月廿三日

掟

一 石清水八幡宮放生河為靈地上、申付地下人等如前々可制禁事、一 安居之神事為地下人相勤之、对他所輩并坊寺田畑等於令沽却者、改之、可棄破事、

一 地下人等跡職之事、構新儀寺院、遁社役輩、制禁事、一 殺生禁断之上、自然於有放鷹之輩者、可申断、若有濫族者、注交名、急度可言上事、

右、八幡八郷檢地免許之事并神事祭礼等、山上山下社法次第共、以、任去慶長十五年九月廿五日先判之旨、弥以永不可有相違者、守此旨、為社家中嚴重申付之、可励国家安治之懇祈精誠者也、仍如件、

慶長十八年七月廿三日

新善法寺

○武家嚴制録 一一一 石清水御条目

解題

篠山市教育委員会所蔵の青山文庫に収められている『祠部職掌類聚・祠部職掌雜纂』には『寺社御条目』あるいは『諸寺社御条目類』等と題する本が四冊ある。すなわち、

4 『寺社御条目』

*内閣文庫本第二冊と同内容

5・1 『諸寺社御条目類』(御条目類留書 四之巻)

*内閣文庫本第一冊と同内容

5・2 『諸寺社御条目類』(御条目類留書 六之巻)

6 『諸寺社御朱印御条目』 *内閣文庫本第九冊と同内容

である。

内閣文庫所蔵『祠部職掌類聚』として、写真版で復刻されている三冊に先立ち、このたびは未紹介の5・2『諸寺社御条目類』を翻刻した。本書は題簽・小口書ともに「諸寺社御条目類」とあるが、目録の表題は「御条目類留書 六之巻」とある。元来は少なくとも六冊あったようだが、5・1に「御条目類留書 四之巻」と見られるのみで他の四冊は失われている。

本書は、『祠部職掌類聚・祠部職掌雜纂』の多くの本と異なり、本文のほとんどは楷書体で、各面は一行一五字余で九行を基準に記されていたようである。行書体いわゆる御家流で記されている部分は四カ所に限られ、後補であろうか。行書体で記されているのは、冒頭の目録と、9御成御供中御馳走次第(寛永六年十月廿三日)の大半、32參州鳳来寺御判物(天正八年四月廿五日)、36大徳・妙心両寺出世猥御吟味覚(寛永五年三月十三日)である。楷

○ 台徳院殿実紀卷廿三 慶長十八年七月廿三日条
山城国石清水八幡宮別当新善法寺に御朱印を下さる。其文にいふ。石清水八幡宮放生川靈地たるうへは。地下人前々のごとく禁制たるべし。安居の神事は地下人つとむべし。もし他人にゆづり。また坊寺田畠等沽却せば。査検して棄破すべし。地下人等跡職の事。新儀をかまへたる寺院社役を通る輩禁制すべし。殺生禁断の地たれば。もし放鷹する輩あらば申断るべし。もし濫なる徒あらば交名を注しうたへ出べし。すべて八幡八郷檢地免許并神事祭祀。山上山下社法の次第。慶長十五年九月廿五日先判の令にまかせ。弥相違あるべからず。この旨を守り社家中嚴重に令し。国家大平の懇祈精誠を抽づべしとなり。(家忠日記、駿府記)

○ 『史料綜覧』卷十四 慶長十八年七月廿三日
是ヨリ先、山城石清水八幡宮豊藏坊某、駿府ニ至リ、家康ニ謁ス、是日、家康、石清水八幡宮ノ法度ヲ定ム、尋デ、社領ヲ割キ豊藏坊ニ寄進ス、(本光国師日記、石清水文書、御当家令条、家忠日記増補)〔参考〕御朱印帳)

44
○ 御当家令条 四一 春日社御修理祭祀料下知状

春日御供御修理祭祀諸下行
并学問料五師預分

元和三年九月七日

書が主体であることから、原本は僧家の文書であろうか。

目録は、少なくとも六冊にまとめた際に「御条目類留書」と名付けたようだが、他の部門との混同をふせぐため「諸寺社」を補って題簽・小口書としたようである。

本書の体裁は、他本と同様で、縦二七・四、横二〇・五センチメートルである。墨付一一九丁のうち目録四丁、本文は六丁以下である。虫損は甚だしく、とくに裏表紙の傷みが進んでいる。

本書の五丁裏左端に「金地院」とあることが、本書の出所を示すとみたい。

全体の構成は、①禁中并公家（1～4）、②武家（5～10）、③諸僧家（11～42）、④諸神社（43～45）、⑤異国（46・47）である。したがって「諸寺社」関係が圧倒的に多いが、それに限定されるものではない。慶長十三年（一六〇八）以降、徳川家康・秀忠に重用された金地院以心崇伝（一五六九～一六三三）が関わった条目類が多いようである。

個々の条目類について、関連資料として併載した『御当家令条』『武家厳制録』および『台徳院殿実紀』『大猷院殿実紀』を参照しながら検討したい。これらに説点がほどこされており、また『実紀』には読み下し文も時にみられるので、本文には今回はあえて説点を施していない。また『本光国師日記』の該当箇所をできる限り確かめておきたい。

まず念のために各條目類を成立年代順に並べてみよう。

32 天正八年^{（一五八〇）}三州鳳来寺御判物（四月廿五日）

*

一 高五千五百八拾七石五斗余 大和国所々

一 納方寺務并喜多院權別当以差図、一年替從寺中三人宛、中坊五師時之触口出合、百姓前物成相究、春日御藏奥院新院え相符可付置事、

一 御神供者一ヶ月五拾七石式斗七升宛以納俵、来月分者前月廿八日何茂出合、可相渡事、

一 所々破損御修理之事、当寺務喜多院權別当其外之役人不殘出合、相談可究事、

一 諸方江音信物右同断事、

一 払勘定毎年十月廿一日出合、可相究事、

一 五師、田共高百五拾石分、随其年物成、可為五師領事、

附、口米可為五師代官給事、

一 衆僧三人、現米老入付拾石宛可遣事、

一 承仕四人、現米老入付三石宛可遣事、

右条々、堅可被相守此旨者也、

元和三年九月七日

安藤封馬守

土井大炊頭

板倉伊賀守

本多上野介

○ 武家厳制録 一一七 春日社領御下知条々

元和三年九月七日

○ 台徳院殿実紀卷四十七 元和三年九月七日 春日社僧に老臣連署の条約を授く。其文にいふ。春日神供修理。祭礼諸下行并に学問料。五師所管の地。五千五百八十七石五斗余は。大和

12	2	37	29	28	21	20	19	18	17	27	40	42	46	25	1	22			11	41	15	4	24
慶長十八年勅許紫衣并法度(六月十六日)	慶長十八年公家御法度書(六月十六日)	慶長十八年曹洞宗御法度書(五月廿八日)	慶長十八年閩東新義真言御法度書(五月廿一日)	慶長十八年智積院御法度書(四月十日)	慶長十八年武州大田庄慈恩寺御法度書(二月廿八日)	慶長十八年常州椎尾山御法度書(二月廿八日)	慶長十八年武州中道院御法度書(二月廿八日)	慶長十八年常州黒子千妙寺御法度書(二月廿八日)	慶長十八年閩東天台宗御法度書(二月廿八日)	慶長十七年長谷寺御法度書(十月四日)	慶長十七年興福寺御法度書(九月廿七日)	慶長十七年戸隠山御法度書(五月朔日)	慶長十六年異国江被遣候御朱印(九月 日)	慶長十五年高野山寺中御法度條々(四月廿日)	慶長十五年言上(九月 日)	慶長十四年閩東真言古義御法度書(八月廿八日)	三寶院 御朱印四通(五月廿一日・六月六日)	聖護院 御朱印三通(五月廿一日)	慶長十四年諸僧家修驗之事(五月廿七日)	慶長十三年成菩提院御法度書(十月四日)	慶長十三年比叡山御法度書(八月八日)	慶長十三年飛鳥井家江御判物(七月廿二日)	慶長八年高野山寺中御法度條々(五月廿一日)
*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*

一千石	一三千四百七拾五石九斗余	一七千七百廿壹石	一貳百九拾石	一貳百八拾石	一九百五拾壹石七斗余	一千四百九拾五石貳斗	一千六百五拾壹石八斗余	一千五百五拾四石貳斗余
學問領五師預り	五師領神宮領	諸院諸坊領	院家中領	喜多院家領	大乗院領	一乗院領	灯明田、但祢宜方領	神供田、但社家領

45
 ○ 御当家令条 四〇 春日社領并興福寺領御朱印
 國中各所にて授けらる。納方は寺領「務」并に喜多院權別当指揮して。一年がはりに寺中より三人づつ出て。中坊五師時の触口に會議し。領民の物成を査檢し。唐藏奥院新坊へ納め封記すべし。神供は一月に五十七石二斗七升づつ納苞を以て。明の月の料は前月廿八日衆会して授くべし。各所修理は寺務并に喜多院權別当。其外役人悉く會議して治定すべし。各所音信贈遺もこれに同じ。毎歳十月廿一日會計をなすべし。五師田百五十石。其年の豊凶にしたがひ五師これを納め。口米を以て代官給米に充べし。衆僧三人。現米一人に十石づつ授け。承仕四人は一人に三石づつ授くべしとなり。(東武実録 令条記、貞享書上)

43	慶長十八年男山八幡宮御定書(七月廿三日)	
26	慶長十八年高野山衆徒中御法度御下知書(仲秋十六日)	
16	慶長十八年喜多院江御法度書(八月廿六日)	
47	(慶長十八年伴天連追放之文)(十二月廿三日)	*
31	慶長十九年金戒光明寺江御書付(三月廿四日)	
3	慶長廿年禁中并公家御法度書(七月 日)	×
5	同廿年武家御條目(七月二日草案上覽)	×
23	元和元年真言宗御法度書(七月廿四日)	×
38	元和元年永平寺御法度書(七月廿四日)	×
39	元和元年惣持寺御法度書(七月廿四日)	×
33	元和元年西山流御法度書(七月廿四日)	×
34	元和元年大徳寺御法度書(七月廿四日)	×
35	元和元年妙心寺御法度書(七月廿四日)	×
6	元和二年御遺言御遺書(四月六日)	*
30	元和二年知恩院増上寺御法度書(十一月 日)	
45	元和三年春日社領并興福寺目録(九月六日)	
44	元和三年春日諸領御定書(九月七日)	*
7	元和五年御位之次第(六月十九日)	*
8	元和十年乘輿御免之事(三月朔日)	*
13	寛永四年諸宗出世之儀	*
14	板倉周防守江御黒印(七月廿七日)	*
36	寛永四年知恩院上人出世官物之事(八月六日)	*
9	寛永五年大徳妙心両寺出世猥御吟味寛(三月十三日)	*
	寛永六年御成御供中馳走次第(十月廿三日受領)	*

一千七拾壹石 修理方五師預り
 一千百九拾五石三斗余 折拂百六ヶ之屋
 一三拾三石式斗余 并会式法事入用
 一三百八拾石 称宜屋敷
 一拾九石九斗余 衆徒方
 都合式万千百拾九石五斗余 让將監并正宝院
 都合式万千百拾九石五斗余 廊承仕屋敷
 右、全社納、但五師領分支配等、可相守別紙目録之旨者也、
 元和三年九月六日 秀忠公 御朱印

○ 武家嚴制録 一一八 春日社領知行配当目録
 元和三年九月六日

○ 台徳院殿実紀卷四十七 元和三年九月六日条
 春日社并興福寺領の御朱印を下さる。其文にいふ。
 千五百五十四石二斗は神供田并に社家領。千六百五十一石八斗
 余は灯火料并称宜領。千四百九十五石二斗は一乘院領。九百五
 十一石七斗余は大乗院領。二百八十石は喜多院領。二百九十石
 は院家中領。七千七百廿一石余は諸院諸坊領。三千四百七十五
 石九斗余は五師領。神宮領。千石は學問料として五師の預りた
 るべし。千七十一石は修理料として五師預るべし。千百九十五
 石三斗余は祈禱所の六家宅并に会式法会の費用。三十三石二斗
 余は称宜居宅料。三百八十石は衆徒方料。十九石九斗余は辻將
 監。并に正宝院及び廊承仕の居宅料。惣計二万千百十九石五斗
 余。全く杜納せしむ。五師預り所管すべき事。別録のごとくた
 るべしとなり。(東武実録、令条記、続年録、国師日記)

10 寛永十二年評定所御定書(十二月二日)

*を付したのは、以心崇伝が関係した諸記録をとどめる金地院所蔵『本光国師日記』『異国日記』に対応記事を今回検出できたものである。なお×は『本光国師日記』の当該箇所が失われているものである。とりわけ重要な元和元年七月分が現存していない。直前の閏六月以前、直後の八月以降が存在するだけに惜しまれる。ちなみに『異国日記』は慶長十三年以降の、崇伝等が携わった外交関係記録である。国政・寺社支配関係記録を中心とする『本光国師日記』は、慶長十五年三月以降の記録である。例えば、10寛永十二年評定所御定書は、明らかに崇伝の没後であり、崇伝個人の活動とは無関係であり、上記の日記類とは別個に採録されている。他にもその類があろう。

しかし本書は、金地院所蔵記録とりわけ『本光国師日記』等に負うところが大きいのではなからうか。冒頭の本文直前に記された「金地院」(五ウ)は、本書が金地院所蔵記録または金地院提出記録であったことを意味するのではなからうか。

目録は、最初から付されていたのではなく、後補であることは、目録の表題および第一行「一 慶長十五 禁中并公家言上金地院あるいは第十一行「一 慶長十四諸僧家修験之事」が内容を適切に表現しているのか若干疑問があり、分類見出しの「禁中并公家」諸僧家や本書作成者「金地院」などの表記が表題に紛れ込んだのではと思われること、本文の楷書体に対する行書体であることからも言えよう。さらに目録には47を欠いていることもあげておこう。

46

○ 台徳院殿実紀卷十六 慶長十六年九月 此月条

呂宋并五和へ御返簡をつかはさる。いよいよ通商疎意有るべからずとの御旨なり。(国師日記)

○ 台徳院殿実紀卷十七 慶長十六年十月二日条

長崎奉行長谷川左兵衛藤広より、呂宋に書簡并二の佩刀を贈る。長崎にて通商の御ゆるしあるむねをつたふ。(駿府政事録、駿府記、羅山文集)

○ 『史料綜覧』卷十四 慶長十六年九月十五日

家康、呂宋人ヲ引見ス、尋デ、書ヲ呂宋ニ遺リ、又、肥前長崎奉行長谷川藤広ヲシテ、書ヲ呂宋及ヒ占城ニ遺ラシム、(駿府記、異国日記、通航一覽所収異国往来、羅山先生文集)

47

○ 台徳院殿実紀卷廿四 慶長十八年十二月

廿一日条 金地院崇伝江戸に参る。(国師日記)

廿三日条 金地院崇伝をして、天主教禁制の令文をつくらしめ。御朱印をなされ。京職のもとへ伝へしめらる。(異国日記)

〔参考〕『史料綜覧』卷十四 慶長十八年十二月二日

是ヨリ先、金地院崇伝(以心)上京ス、是日、駿府ニ帰ル、尋デ、江戸ニ行キ、家康・秀忠ニ謁ス、(本光国師日記、時慶卿記、舜日記、鹿苑日記、〔付録〕本光国師日記)

一、禁中并公家

1は、『本光国師日記』第二の慶長十五年十月四日付書簡と、十月六日付書簡の間に、

「言上

條々

一御元服之儀。先度如被仰下候。急可被成御沙汰候。御殿取置申候者。御延引如何存候間。早々奉尤存候事

一總而可被成御讓位候間。其以前御政無御懈怠。諸事

親王被為御覽習候様。可被遊候。万御心得乍恐肝要奉存候事

一最前以一書如致奏聞候。此地遠境之條。万事撰家衆被存寄儀。以

女院御所被申上候様可被仰事

右宜令奏申給候。

慶長十五年九月日

廣橋大納言殿

勸修寺中納言殿

先度以一書奏聞申候処。被成御合点旨被仰下候間。猶以

各被存寄候儀。以

女院御所御異見專用存候。若於不被仰上者。以来申通間敷候也。

慶長十五年九月日。

一條殿

二條殿

近衛殿

鷹司殿

九條殿

(○は本書との相違箇所である。以下同)

とあり、本書と本文であることから、『日記』よりの引用と判定する。『実紀』および『史料綜覧』にも引かれていない。

『公卿補任』慶長十五年によれば、廣橋大納言は、武家伝奏の正二位権大納言廣橋兼勝(五三歳、勸修寺中納言は、やはり武家伝奏の正三位権中納言勸修寺光豊(三六歳である。五撰家は、正二位関白・右大臣の九条忠栄(二五歳)が氏長者でもあるが、他家はすべて散位で、前関白・左大臣の一条内基(六三歳、前関白・左大臣で准后の二条昭実(五五歳、同じく前関白・左大臣で准后の近衛信尹(四六歳)、前関白・左大臣の鷹司信房(四六歳)の順にある。当職・氏長者であるが最年少の当主である九条家を最後尾において、当主の年齢順に宛名が並ぶ。

2について本書と『御当家令条』の異同を比較してみると、表題の「公家法度」は「諸公家法度」、第一条の「無油断」は「無油断様」、第二条の「於行儀法度相背者」は「背行儀法度輩者」、「罪軽重」は「罪之軽重」、第三条の「式日」は「式目」、第四条の「昼夜共」は「夜昼共」、「而市町小路」は「町小路」、第五条の「為私」は「私」、「不行儀」は「不行儀之」、「抱置」は「拘置」、「可為同前事」は「同先条事」、末尾の「右条々」は「右之条々」、「伝奏相加」は「伝奏」、日付の「慶長十八

年癸丑は「慶長十八年」、日付下の「御判」は「家康公御判」、本書は宛名を欠くが『御当家令条』には「板倉伊賀守とのへ」とある。

2は、『本光国師日記』第九の慶長十八年六月廿日条に、

一 公家衆法度

一 公家衆家々之學問。昼夜無油断様。可被仰付事

一 不耆老若背行儀法度・輩者・可処流罪。但依罪輕重可

定年序事

一 昼夜之御番老若共に。無懈怠相勤。其外正威儀相調。

祇候之時刻。如式日參勤仕様に。可被仰付事

一 晝夜共に無指用所。町小路徘徊堅停止之事

一 公宴之外。私に而不似合勝負。并於不行儀之青侍以

下抱置輩者。流罪・同先条事

右條々相定所也。從五撰家并傳奏・其届在之時。可

行武家之沙汰者也

慶長十八年・六月十六日 御朱印

(・は本書に見える文字を欠いている箇所である)

とあり、若干の異同が見られる。

3は、大阪落城直後の七月に發布された諸法令の要をなすが、同月の日記を欠いているため、本文の照合は不能である。しかし現存の他書にみえる文との異同は、作成当初の草案(金地院旧蔵)の姿をとどめているのか、とも考えられる。

3について本書と『御当家令条』の異同を比較してみると、第一条の「而能政致太平者未之者也」は「而能政致太平」、「自光孝天皇

絶」は「自光孝天皇未絶」、「專要候事」は「專要候之事」、第二条の「神野親王」は「仲野親王」、「被贈大臣時者」は「被贈大臣時者」、「為親王之上」は「雖為親王之上」、「其次請親王」は「其次諸親王」、「前官大臣」は「前官大臣」、「再住之時者」は「再任之時者」、第四条の「雖為接家」は「雖為撰家」、「王公接聞」は「三公撰聞」、第五条の「接門」は「撰聞」、第六条の「女縁其家督相續」は「女縁者家督相續」、第八条の「漢朝年号之内」は「漢朝之年号之中」、第九条の「親王橡小直衣」は「親王袍橡小直衣」、「禁色雜袍貫」は「禁色雜袍貫首」、「晴時」は「晴之時」、「拝領家々」は「拝領」、「大臣息又孫」は「大臣息亦孫」、「三十六才迄着之、此外不着之」は「三十六才迄着之」、第十二條の「各別」は「名例律」、第十三條の「接家」は「撰家」、「連枝之外門跡者」は「連枝之外之門跡者」、第十四條の「國王大臣師範者」は「國王大臣之師範者」、第十五條の「僧正」は「僧都」、「任叙」は「叙任」、「法服」は「法眼」、「位叙」は「任叙」、「權以」は「猶以」、「日付」は「慶長廿乙卯年」は「慶長廿年乙卯」、日付下の「二条殿判、秀忠公御判、家康公御判」は「昭実 二条関白也、秀忠、家康」とする。

第二条に見える、舍人親王は天武親王の第三皇子、養老二年に二品から一品に昇叙、四年に藤原不比等の死後、知太政官事に就任、没後に太政大臣を贈られた。神野親王は嵯峨天皇の諱で、三品中務卿から平城天皇の皇太弟となった。仲野親王は桓武天皇の第十二皇子、二品、彈正尹・式部卿・兼常陸太守・兼上総太守・大宰帥などを歴任。没後、宇多天皇の外祖父として一品太政大臣を追贈された。穗積親王は天武親王の第五皇子、慶雲二年に刑部親王の死後に知太政官事に就任、靈龜元年一品に叙せられたが、

同年死去。したがって神野親王はこの場合の例には当たらない。仲野親王も、没後の贈位である。

4は、『本光国師日記』では検出できていない。

『御当家令条』に引く慶長十三戊申年八月六日の勘道判物との関係は、未だ定かでない。後考に俟つ。なお「公卿補任」慶長十三年によれば、同年の飛鳥井雅庸四〇歳は、正三位参議である。

二、武家

5は、大阪落城直後の七月に発布された諸法令の要をなす。現存する『本光国師日記』には、同月分を欠くので、照合はできないが、頭書の「一 慶長廿年六月廿四日、召国師、武家之御法度條々、御内談被仰下、同年七月二日、以草案、備 上覽」という内容から、本書は七月二日に家康に上覽した草案の逸文をとどめているのではない。現存の他書にみえる元和武家諸法度との異同は、転写の誤り以外にも、作成当初の草案(金地院旧蔵)の姿をとどめている、とも考えられる。各所にみえる文字の顯著な異同は示しておいたが、一七丁にみえる

二 雑人恣不可乘輿事

古来依其人、無御免乗家有之、御免以後乗家有之、然近來及家郎諸卒乘輿、誠濫吹之至也、於向後者、国大名同息一門之歴々并一城被 仰付衆、付五万石以上、或五十以上之人、醫陰兩道、或病人等者、不及御免可乘、其外之輩者、御免以後可乘、至国々諸大名之家中、於其國者、其主人撰

仁體遂吟味可免之、叨例。乗者可越度也但公家門跡諸出世之衆者非制限」

の箇所が、『御当家令条』の「家老……、於向後者、大名同息……歴々等……、或病人等……、不及御免……、其外之輩……、御免以後……、叨令乗者可為越度也……」と明らかに異なっている事を指摘しておく。

なお『本光国師日記』第二十二の元和二年十月十二日条に、「一同日。為御使者曾我又左衛門來臨。武家御法度書を仮名にのべ候へとの由に付而、即席に相認。曾又へ渡す。」

とあり、つづいて翌十三日条に、「一同十三日之夜、曾我又左衛門殿為御使來臨。武家御法度書。如最前清書可仕旨被申渡也。」とあり、さらに翌十四日条に、「一同日。武家諸法度清書認候。大たか三枚に書之。年号は得上意書付可申ため。札を付置。則御城へ持参。直に得上意。」

元和二年丙辰十月日と御城にて書付候而。清書御前へ上ル」とある。大たかは大高檀紙、最高級の用紙として用いる。

5について、本書と『御当家令条』の異同を比較すると、第一条の「武家之要枢也」は「武要枢也」、「何励修鍊乎」は「何不励修鍊乎」、第三条の「背法度輩」は「背法度之輩」、「礼節之本也」は「礼節之本也」、第四条の「殺害人由」は「殺害人」、「鋒劔」は「鋒刃也」、「豈足允容乎」は「豈是允容乎」、第五条の「他国之者事」は「他国者事」、第六条の「後隲」は「後隲」、第七条の「早可致」は「早速可致」、「乍違于隣里」は「或乍違于隣里」、第八条の「未婚合者」は「夫婦合者」、

「志將通は者將通」、「挑天曰」は「挑天曰」、「是姦謀本也」は「是姦謀本也」、第九条の「日本紀制曰」は「統日本紀制曰」、「可隨其分限」は「可隨其分限矣」、第十条の「紫拾裏」は「紫拾紫裏」、第十一条の「国大名同息」は「国大名以下」、「一門之歷々并一城被 仰付衆付五万石以上或五十以上之人」は「一門之歷々者、不及御免可乘、其外昵近之衆并」、「医陰両道」は「医陰之両道、或六十以上之人」、「或病人等者不及御免可乘、其外之輩者」は「或病人等」、「至国々諸大名之家中、於其國者、其主人撰仁體遂吟味可免之、叨例乗者」は「家郎從卒令乗者、其主人」、「可越度也」は「可為越度也」、第十二条の「諸国諸侍」は「諸国侍」、第十三条の「国庄」は「国主」、「則其国弥殷」は「則其国弥盛」とある。本書は日付を欠くが、『御当家令条』には「元和下線年乙卯七月日」とある。

6の第一項は、『本光国師日記』第二十の元和二年四月四日条の金地院(崇伝)から板倉伊賀守(勝重)あての書簡の中に、「一、一兩日以前、本上州、南光坊、拙老御前へ被為召之、被仰置候趣へ、御体をハ久野へ納、御葬礼をハ増上寺にて申付、御位牌をハ三州之大樹寺ニ立、一周忌も過候て以後、日光山ニ小キ堂をたて、勸請し候へ、八州之鎮守に可被為成との 御意候」とみえる。しかし、第二項・第三項及び「遺書」に関する記事は見当たらない。

元和二年三月廿七日に従一位前右大臣徳川家康は太政大臣に任命されたことにより、四月十七日に至る生存期間中は「相国」と

称するに至る。

家康が信頼した本多正純あての具体的な「遺書」に注目したい。

7は、『本光国師日記』第二十六の元和五年六月十九日条に、「二同十九日。為 公方様御使永喜來。諸家之御礼之次第御尋也。則先例を書付上候。案在左。

御位之事

先三大臣。其次親王家。其次前官大臣。其次諸親王先年御法度此通相定候。先年御出仕之時も。第一當官之左右大臣。其次八條殿。伏見殿。其次前官大臣。如此御座候と覺申候。伏見殿御家代々。

天子御猶子之義候間。諸親王可為各別候哉。其段者御公家衆可為御存知候。先年 相國様之御時。如右相定異儀無御座候。以上。

如此書付口上申渡永喜返ス。処勞をも能々養生可仕旨被 仰出也。」

○は本書との相違箇所である。以下同)と同文であることから、本文は『日記』よりの引用と判明する。

8は、『本光国師日記』第三十三の元和十年三月朔日条に、

告許
乗興

是は乗物御免之御印判也。元十三年朔日書付。御城江

上。但朔日於 御城。大炊殿御申渡故如此。」

とあり、本書の原文と見て良い。「元十三月朔日」を「元和十年三月朔日」に、「御城江上」を「御城江持参」と改め、文章全体を整えている。

9は、『本光国師日記』第四十一の寛永六年十月廿三日条に、

「一同廿三日。西丸御目付衆々御供衆御馳走之覺書來。案在左。

常 御成之時供奉之衆馳走之覺

一物頭衆。一御小性衆。一御使番衆。一御書院番衆。一

御番外衆。一御納戸衆。

右二汁七菜。但二三迄。

一馬乗御目付衆。

右本二ぬり折敷ニ而も木具ニ而も。二汁五菜。

一御弓御鉄炮馬乗同心。一御かちの衆。一御臺所衆。

一坊主衆。

右本ぬり折敷ニ而も木具ニ而も。二八へきに二汁五菜。

一かちの御弓御鉄炮衆

右折か。ちうはちにこわめしきかな一種。并一番の所

は柳一荷。但御番所人の多少によりて可相計也。

一御膳奉行同心。一御納戸同心。一御中間御小人。右一

汁三菜。

一御臺所衆内の者事人数を定神谷又五郎方々書立を可

相越。但一汁一菜。

一樂屋乏馳走。

太夫分は本ぬり折敷ニ而も。・木具ニ而も二汁五菜。其外者本ぬり折敷に而も。木具ニ而も。二八へきに二汁五菜。

一猿樂の内者こわ飯酒。

一辻固之衆へは馳走無用之事。

一御供之衆内之者座敷へ参つけ候分。はさみ箱につき候者老人。刀持老人。已上式人。内へ可入。役人は各別也。付馳走無用之事。

以上

此書立は諸大名衆へ 御成之時振廻之書立に而候。自是かるく御座候は。くるしからず候。為御心得申上候。以上。

十月十六日

加々爪民部少

永井 監 物

渡辺 圖書助

石川三右衛門

朝倉仁左衛門

大河内平十郎

国師 様参

とあり、本書の原本と認められる。ただし、他の法令とは異質である。

『寛永諸家系図伝』によれば、加々爪民部少輔は忠澄、慶長四年江戸城の秀忠のもとで元服し諱を与えられ、大坂陣では使番、元和年に従五位下民部少輔に叙任し、寛永十七年に長崎に使とし

て派遣され、ポルトガル船の乗組員數十人を処刑し船を焼き沈め、翌十八年に五六歳で没する第七、一九七頁。

永井監物は白元、天正十三年に十四歳で井伊直政につかえ、小田原の陣の後に加藤光泰につかえ、朝鮮の役に参戦したが、文禄二年光泰の死後に浪人となる。三年より家康につかえ、慶長元年相模国の内に三百三十余石をうける。関ヶ原の陣に従軍。七年より秀忠につかえ。十二年御使番となる。十四年下総国の内に三百石を加増。十五年同国で三百石を加増。十六年御目付となる。元和二年下総国で二百石を加増。八年同国で五百石を加増。九年同国で千石を加増。寛永三年十月三日、従五位下監物に叙任。五年、下総国で千石を加増。都合三千五百四十余石を領有する(第十二、一七六―九頁)。

渡辺圖書助は宗綱、天正七年浜松で生まれ、十三歳から家康につかえ、文禄元年に秀忠につかえ、慶長十八年に御使番、元和三年に御目付、寛永三年に従五位下、九年に御弓頭、十一年に御鉄炮頭となる(第十四、二四―五頁)。

石川三右衛門は「石河三右衛門尉利政で、慶長十七年に秀忠につかえ、大坂の陣に従軍(第三、一六八頁)。

朝倉仁左衛門は仁左衛門尉在重、大坂落城後に秀忠につかえ、御書院番に入り、御膳番・御目付を勤め、家光につかえて御使番に、寛永十六年に江戸町奉行を勤め、従五位下石見守に叙任する(第十四、一三六頁)。

大河内平十郎は正勝、家康・秀忠につかえ、秀忠のもとで御目付を勤め、家光のもとで御使番となり、長崎奉行にもなる。寛永

十七年六月廿四日死去、六二歳第三、三二―三頁。

以上六名が西丸すなわち大御所秀忠の下に御目付衆であつたことが、この記録から知られる。

10は、以心崇伝の没後であり、崇伝関係記録とは別につたえられたのであろう。典拠は不明である。『御当家令条』の表現がやや仮名まじり文に近くなりかけているのに対して、本書はまだ漢文体の体裁を取っており、原形に近いのではなからうか。なお『実紀』は完全に取意文として書き改めている。『武家厳制録』は、『御当家令条』の①第一〇条「候ハ、」を「儀ハ」、②第三条「其所之遠近を考」を「勘定所之遠近」、③差出書を「讀岐守」「大炊頭」に作り、④第七条「久」の下に「敷」があり、⑤日付の「亥」はない。そのうち『武家厳制録』と本書の共通するのは①④であり、『御当家令条』と本書の共通するのは②③⑤である。

本書と『御当家令条』の異同を具体的に確かめておく。第一条の「四日」は「二日」、第三条の「不可参」は「不可参向」、「停止之事」は「停止事」、第四条の「停止之事」は「停止事」、第五条の「公事罷出者」は「公事罷出もの」、「縦雖為御直参之輩」は「縦御直参之輩」と畏怖とも、「不可带事」は「带すへからざる事」、第六条の「知音之好雖有之」は「知音の好たりといふとも」、「於寄合」は「於寄合場」、「不可取持事」は「取持へからざる事」、第七条の「従遠国参来人之公事」は「遠国より参候公事は」、「久敷」は「久」、「可承」は「可承之」、「当地之公事」は「当地之公事は」、「其日帳先次第」は「其日之帳之先次第に」、「但」は「附」、「不承而不叶者」は「不承して不叶

儀、第八条の「掛申儀者」は「かくる儀ハ」、「惣座中亦」は「惣座中よりも」、「存寄之旨」は「存寄之通」、第九条の「公事留書」は「公事之しめ留書」、「且又伊豆守」は「伊豆守」、「公事留書」は「公事之とめ書」、「為写可申事」は「写させ可被申事」、第十条の「其日」は「其日の」、「落着無之儀者」は「落着無之候ハ」、「年寄中」は「年寄中え」、「致談合」は「談合仕」、「其上可言上事」は「可致言上事」、第十一条の「於役者之所承之内」は「役者之所にて承候内」、「於可出之公事者」は「可出之公事におゐてハ」、「証人」は「証文」、「相揃」は「相揃出之」、第十二条の「為過怠竈舎者」は「一 為過怠竈舎の者」、「日数相定」は「日数を定」、「於其日数相濟者」は「其日限相濟候ハ」、「出竈可有之事」は「竈より可出事」、「永々敷」は「長々敷」、「可相濟事」は「可濟事」、第十三条の「召状受之遅参者」は「召状をうけ遅参之者ハ」、「其所遠近而」は「其所之遠近を考」、「積日数依輕重」は「日数を積、輕重により」、「相守此旨也」は「相守者也」とある。

「讃岐」は酒井讃岐守忠勝である。『寛永諸家系図伝』では、慶長十四年に従五位下、十九年に下総国の内で三千石。元和六年に秀忠の命で家光につかえ、寛永元年に上総・下総・武蔵国のうちで加増され、都合三万石。三年に武蔵国忍で加増、五万石。四年、父忠利が卒去し、川越城および遺跡をつぎ都合八万石。九年、武蔵国内で加増、都合十万石。従四位下侍従に叙任（第一、二五〇七頁）。

「大炊」は土井大炊頭利勝である。同書によれば、幼少より家康につかえ、秀忠の誕生の時に、七歳で秀忠につかえ、慶長七年に下総国小見川で一萬石を拝領。十年、秀忠の將軍宣下に際して、従

五位下に叙せられる。十五年以下総国佐倉に転封し、加増で三万二千四百余。大阪の陣後、加増で六万五千二百石を領有。寛永三年八月、従四位下に昇る。十年下総国古河城にうつり、加増で都合十六万石（第三、二〇七頁）。当時ともに幕府年寄である。

三、諸僧家

本来はこの三と四のみが表題「寺院御条目類」に対応する。11は、山伏法度として聖護院と三寶院の争論を処理する。

慶長十四年五月廿七日付法度は、『御当家令条』『武家殿制録』に五月朔日付で見え、ほぼ同文である。本書に「此間摩滅仕候」とある箇所には「制詞之」とある。『御当家令条』の日付の下に何も無いが、『武家殿制録』では「秀忠」とある。本書では「慶長十四年五月廿七日 権現様御直判／台徳院様御直判」と相違する。

他法度は『本光国師日記』第九の慶長十八年五月廿一日条に、二同廿一日。山伏法度之 御判共相調候。

一 本山之山伏對真言宗。不謂役儀令停止畢。但真言宗立寄。非佛法祈令執行輩有之者。役儀可相掛。自今以後堅守此旨。可有下知者也。

慶長拾八年五月廿一日 御判。

聖護院・

「二」 本山之山伏對真言宗不謂役儀令停止畢。但真言宗立寄。
・ 非佛法祈令執行輩有之者。可拔其衆。自今以後堅守此旨。可有下知者也。

慶長拾八年五月廿一日 御判

三寶院・

一 修驗道之事。從先規如有來諸國之山伏。任筋目可致入峯。當山本山各別之儀候条。諸役等互不可有混亂。自今以後堅守此旨。無・論樣可有下知者也。

慶長拾八年五月廿一日 御判

聖護院・

一 修驗道之事。從先規如有來。諸國之山伏。任筋目可致入峯。當山本山各別之儀候条。諸役等互不可有混亂。自今以後堅守此旨。無・論樣可有下知者也。

慶長十八年五月廿一日 御判

三寶院・

右兩御門跡へ渡之。」

とあり、つづいて六月十七日条に、

「一 本山之山伏對於真言宗。申懸不謂役儀事。堅可為停止。并於宗門之内。立寄令祈念。更非正法者也。自今以後。有令修行輩者。速可被拔其衆者也。仍如件

慶長十八年六月六日 秀忠御判

三寶院殿

一 修驗道之事。任先規筋目。諸國之山伏可為入峯。當山本

山差別有之上。諸役等互不可有混亂。以此旨無異論樣。可有下知者也。仍如件。

慶長十八年六月六日 秀忠御判

三寶院殿

一 醍醐寺山上山下領。都合參千九百九拾八石余事。并門前境内山林竹木等。可為守護使不入。次寺家法度坊舍再興以下。如先規從當門可被加下知也。諸式共以。任去慶長十五年四月廿日先判之旨。不可有相違之狀如件。

慶長十八年六月六日 秀忠御判

三寶院殿

とある。さらに六月十八日条に、

「一 今日被成御立。先以珍重に存候。御仕合殘所無御座御満足奉察候。然者今度被成御拝領候。御判。諸國之諸山伏に見せ申。落着之処知せ。安堵させ度由。先達衆申候。能々被聞召届。菟角御法度相立候様に。御分別專要に候。為其申入候。惣別奏者に而申上事者。届兼可申候。先達には直に被成御対面。万被聞召届。可然儀に候。此由可有御披露候。恐々謹言。

六月十八日

金地院

三寶院御門跡様

北村主水殿

とあり、法度および所領判物の交付事情を示す。

12は『本光国師日記』第九の慶長十八年六月廿日条に、2に
 続けて、

二 勅許紫衣之法度

● 大徳寺 ● 妙心寺 ● 知恩寺
 ● 知恩院 ● 淨花院 ● 泉涌寺
 ● 粟生光明寺

右住持職之事。不被成。勅許以前。可被告知。為佛法
 相續。撰其器量。可相計。以其上入院之事。可有申沙
 汰者也。

慶長十八年六月十六日 御朱印

廣橋大納言殿

とあり、寺院名は同じだが、配列順の異同や修飾語の省略が見ら
 れる。

12について、本書と『御当家令条』の異同を見ると、本書の大徳
 寺・妙心寺の肩書「済家」、知恩院・知恩寺・淨花院の肩書「浄土」、
 知恩寺下の「百万遍」、粟生光明寺の肩書「浄土西山派」、泉涌寺の
 肩書「律宗東山」は見られない。また『御当家令条』には「黒谷金戒
 寺」が加わっている。粟生光明寺の位置は『御当家令条』では泉涌
 寺の後にある、光明寺の次に新たな黒谷金戒寺が置かれている。
 末尾の「為仏法相統」は『御当家令条』に欠け、「可相許」は「可相
 計」、日付下の「御朱印」は「家康公御判」とある。両者の異同は顕
 著といえよう。

13は『本光国師日記』第三十七の寛永四年七月十九日条に、
 「一七月十九日。於 西丸。浄土宗法門。増上寺靈岩。法門二
 座有之。其後 御前にて。上方御出世御法度共被仰出。今
 度板周防殿へ。右之通被仰付。覺書有之。其案左に有之。
 御右筆部やにて御年寄衆に。国師相加。終日之談合也。

一諸家出世之儀。故相国様御法度書に相背。漫に有之由
 被聞召候之間。三条中院を以。窺 叡慮。御法度書以
 後出世之者。先相押。其上重而器量を被成御吟味。可
 被仰付事。付諸家出世之前後。御法度書之日付ヲ可相考事。

一寺々之傳奏も。故相国様御法度書に相違之者。出世
 之儀望申候共。向後猥に執奏無之様に。三条中院と相
 談仕可申渡事。

一五山紫衣黄衣西堂之 公帖頂戴不申衆も。御法度書。
 以前者御赦免事。

一知恩院執奏之上人号之事。背御法度書。漫に上人被。成
 候者は押置。右如被 仰出候。御吟味之上。重而可被
 仰付事。

一百万遍淨花院黒谷より執奏之者も。増上寺其談儀所
 之能化。兩判之添状を知恩院へ持参申。右之小本寺へ
 も。知恩院より申遣。可致出世事。

右此 仰出之覺書。御年寄衆と談合。其上御詮之趣共。
 色々相改候故。御右筆建部伝内より写を取寄。翌日廿

日に如右寫置候。五山之衆御法度書以前。無御判西堂成之衆。今又長老に望候へとも。右之 御判無之故。取次不申由。連々大炊殿へ語申故。如右御赦免之儀被仰出候。其衆之官物は。先無是非之沙汰候。是ハ重而仰出可有由也。右御赦免之上ハ、無御判西堂をも、長老成之取次可申上哉と。大炊殿へ申候へば。尤に候。是ハ無御判衆と御理申上候者。其時御吟味候へんとの義也。右之御赦免皆々悉儀也。猶具に僧録帳に有之。」とあり、御年寄衆(のちの老中)との協議で内容を確定したこと、右筆の建部伝内を通して副本を取り寄せ、写しを取ったことが延べられている。末尾の「五山之衆」以下は西堂の出世に関する記事で、関連文書がこの後に続く。これに対し、本書の末尾にみえる、「寛永四年七月廿七日 板倉周防守 御黒印續目ノ裏ニモ御印有之。右板倉周防守歸洛之時被 仰付覺書也」は『日記』に見られない独自の記載である。

14 は、『本光国師日記』第三十七の寛永四年八月六日条に、「一同六日。為士大炊殿御内證。松平右衛門大夫殿、永喜同道にて。知恩院ニテ出世之官物御談合也。書付左ニ有之。

於智恩院上人成出世官物之事

一八木拾貳石 此内六石四斗 禁中へ納
五石六斗知恩院へ納

是は御朱印に銀子貳百目と有之。御朱印出候年之八木之相場。百目ニ付六石充仕候。其積に候へは拾貳石乎。

一拾五石 此内六石四斗 禁中へ納
八石六斗知恩院へ納
是は宗把内々存寄通、

一拾三石 此内六石四斗 禁中へ納
六石六斗知恩院へ納

是は拾貳石と拾五石と之中を取候へハ。如此可有之乎」と本書と本文があり、つづく八月十一日条に、

「八月十一日、知恩院宗把来ル、上人成拾三石ニ、今朝大炊殿ニテ被仰渡也」とある。本書収載文はいずれも『日記』に基づくことが明らかである。

15 について本書と『御当家令条』の異同を見ると、第一条但書の「再興」は「從再興」、第三条の「学頭」は「学匠」、「可致相統事」は「可相統事」、第四条の「可為禁止事」は「可禁止事」、第六条の「綴連書」は「結連署」、「非儀」は「非義」、「可令追放事」は「可追放事」、末尾の「各堅」は「堅」とある。

16 は、二月廿七日付の後掲17を六カ月のちに改定したものである。本書と『御当家令条』の異同を見ると、第二条の「何聊可附所化乎」は「何附所化」、「從往古」は「自往古」、「於為法談所者」は「於法談所」、第三条の「不可背」は「不可有背」、第四条の「不經本寺之衆議」は「不經關東本寺衆議」、第五条の「叙用」は「除用」、「關東亦」は「關東又」、第六条但書の「法談所之經廻」は「法談所經廻」、「二季時節」は「二季之時節」、第七の「檢者」は「族者」、「連」は「速」、

末尾の「御朱印」は「家康公御判」とある。また、宛名はともに「喜多院」とあるが、後者『御当家令条』は、右ハ南閣坊僧正天海へ被下之」ともある。次の史料の末尾にも関連する。

17について本書と『御当家令条』の異同を見ると、第一条の「不伺本寺」は「不窮本寺」、第二条の「非器之輩」は「非器量之輩」、「於前々」は「但於前々」とある。第三条の「一 所化衆構公事不可一列事」を『御当家令条』は欠く。第七条の「経歴」は「経暦」、「二季」は「二季」とある。

17から21にかけては『本光国師日記』第九の慶長十八年三月十日条に、

二 關東天台宗諸法度 [17]

- 一 不伺本寺恣不可住持事
- 一 非器之輩不可付所化。但於前々法談所者。用否可隨時宜事
- 一 為末寺不可違背本寺之下知事
- 一 不請關東本寺之儀。從山門直不可取證文事
- 一 於關東追放之仁。不可介抱。若又於山門押而有許容者。於關東不可請山門之下知事
- 一 所化衆構公事不可一列事
- 一 所化衆法談所之經歷。不可闕二季事
- 一 一山之学頭別當并衆徒。至有依怙者。於本寺可有其沙汰事

右堅可守此旨者也。

慶長十八年二月廿八日 御判

喜多院

一

常陸國河内郡下妻庄黒子郷千妙寺法度 [18]

- 一 諸末寺不可違背當本寺之法度事
- 一 法流以下寺中之僧俗可随学頭下知事
- 一 山林竹木寺内門前如先規令免許事
- 一 右堅可守此旨者也 [欠落]

慶長十八年二月廿八日 御朱印

〔慶長九年六月二日 千妙寺所領朱印狀〕 [略]

〔慶長九年六月一日 千妙寺所領目錄〕 [略]

一

武州比企郡慈光山中道院法度 [19]

- 一 法流以下。并山中諸法度。可随学頭下知事
- 一 山中之明坊跡。并山林惣而可為学頭進退事
- 一 公用造營之時。於不勤其役輩者。坊領可召放事
- 一 右堅可守此旨者也

慶長十八年二月廿八日 御朱印

一

常陸國椎尾山法度 [20]

- 一 法流以下并山中之諸法度。可随学頭下知事

一 寺領百石之内式拾石者。学頭分。并寺内門前山林竹木等如先規令免許事。

一 公用造営之時、於不勤其役輩者、坊領可召放事。右堅可守此旨者也。

慶長十八年二月廿八日 御朱印

一 武藏國大田庄慈恩寺法度 [21]

一 法流以下・寺中之諸法度。可随学頭下知事

一 公用造営之時。於不勤其役輩者。坊領可召放。同於明

坊跡等者。可為学頭指引。并寺中之屋敷。從他所不可

相抱。有来俗屋敷者。可為学頭進退事

一 山林竹木等如先規令免許事

右堅可守此旨者也

慶長十八年二月廿八日 御朱印

右御直判一通。御朱印五通。合六通。慶長十八年三月十日に相調。各へ渡之。南光坊へ渡ス也」

とあり、二月廿八日付の書類が三月十日に南光坊(天海)に下付されたことが判明する。本書がこの記事に基づくことは明らかである。

22について本書と『御当家令条』の異同を見ると、表題の「古儀」は「古義」、第二条の「懈怠」は「懈怠」、第四条の「不募所学者」は「不勞所学者」、第六条の「普可受学事」は「委可受学事」、第七条の「無

事相伝授者」は「無事相之伝授者」、第八条の「專如法」は「如法」、末尾の「右九ヶ条」は「右条々」、日付下の「御黒印」はなく、宛名の「關東諸寺家中」は「關東諸寺家中へ」とある。

23について本書と『御当家令条』の異同を見ると、第一条の「授法儀式」は「授法之儀式」、「衣鉢」は「衣体」、「可為先規寺法事」は「可為如先規寺法事」、第五条の「可改易事」は「可改易寺領事」、第六条の「学問之功」は「学問功」、第七条の「速」は「速」、第九条の「延喜帝御宇」は「延喜御宇」、「高野山大師」は「野山大師」、「赤色」は「赤衣」、「棟梁」は「棟梁」、「不可着用事」は「不可着事」、第十条の「有智者之譽者各別之事」は「但有智者之譽輩者各別事」、日付の「卯」は「乙卯」とあり、日付下に後者『御当家令条』には「御朱印」とある。

24について本書と『御当家令条』の異同を見ると、第一条の「往古之掟」は「往古掟」、「召使」は「召仕」、第二条の「二千石」は「貳万千石」、「行人可取之」は「從行人方可取之事」、第三条の「如有来」は「此中如有来」、「惣山中」は「惣山之中」、「代採」は「伐採」、第四条の「青巖寺二千石」は「青巖寺領貳千石」、「諸賄之領」は「諸賄之料」、「可有配分若」は「八人可有配分、右」、「欠除之特」は「闕除之時」、「二代者也」は「二代事」、第五条の「破壊之時」は「破壊之時者」、「於出入等勘者」は「於出入算勘者」、末尾の「右之条々」は「右条々」、「泰平」は「安泰」、「個析者也」は「懸析者也」、日付下の「御直判」は「家康公御判」とある。

24は、『本光国師日記』第八の慶長十七年八月十六日条に、

高野山寺中法度條々

一衆徒行人諸公事。任往古之掟可為各別事

一衆徒方領内之人足竹木可為一職進退。但山上山下之諸伽藍造營之時者。式千石之人足等分に出之可召使事。

付於人足之差別者。從双方於奉行。行人方人足之差別者。從衆徒取之。衆徒方人足差別者。行人可取之。

一青巖寺之儀者。依為公儀之寺。修造之材木并薪等如有來。惣山之中雖為何之山林可伐取事

一青巖寺式千石之内千石者。住持檢校諸賄之領。千石者衆徒中碩学衆可有配分。若八人之内欠如之時者。学侶之内器量之学者任膺次。彼口可被昇進事。付無量光院加増者。可為當住一代者也。

一諸伽藍破壊之時。從衆徒行人方。十道可令修造之。於出入算勘者。對衆徒可遂之。諸伽藍之無簡別。以千石之修理免可致造營事。

右之条々堅守此旨。紹隆佛法永代不忘失。可抽天下泰平之懇祈者也。

慶長六年五月廿一日

御直判

金剛峯寺衆徒中

とある。第二条の「着到」は「差別」、第五条の「江申送」は「十道」、日付の「慶長八年」は「慶長六年」となっている。

25について本書と『御当家令条』の異同を見ると、第一条の「兩門徒中」は「衆徒中」、第二条の「但門主」は「但門首」、「可申上之事」は「可申上事」、第三条の「相統ハ」は「相統者」、「兩門主」は「兩門首」、「師弟之契約」は「師弟契約」、「真俗諸道具事」は「真俗之諸道事」、第四条の「新儀之事」は「新儀事」、第五条の「学侶方知行」は「学侶方之知行」、「相当」は「相応」とある。日付下の「御黒印」を『御当家令条』は欠く。宛名の「衆徒中」は「衆徒中へ」とある。

25は『本光国師日記』第五の慶長十六年十月十一日条に同文が見える。本書第一条の冒頭「兩門徒中」は「衆徒中」、第二条の「可申上之事」は「可申上事」、第三条の「院家相統ハ」は「院家相統者」、「師弟之契約」は「師弟契約」、第四条の「新儀之事」は「新儀事」、第五条の「相当」は「相応に」、「陳意」は「阻意」、「可被調事」は「可被整事」になっている。また『本光国師日記』第八の慶長十七年八月十六日条に、24に続けて、

高野山寺中法度

一兩門徒中之諸沙汰可為・前々事

一兩門徒中諸式。可順門主異見。但門主之分別重々於非分者可申上・事

一於古跡之院家相統者。以兩門主相談。撰学者致師弟之契約。統血脉。可讓與真俗諸道具事

一碩学之仁背古法不可企新儀・事

一学侶方知行不論最履偏頗。院家相當可有配当。

付兩門徒中無疎意有入魂万端可被調事

右條々可被守此旨也

慶長十五年四月廿日

御黒印

金剛峯寺衆頭中

とあり、末尾の「衆徒中」は「衆頭中」と誤っている。

26は、『本光国師日記』第八の同日条に、24に続けて、

高野山衆徒中法度 御下知条々

一 檢校職自今以後碩学衆可有昇進事

但。青巖寺式千石之知行者。於衆中扨仁体。被寺納

檢校并八人之碩学可有支配。

一 於衆徒中公事出来之時者。如近年有来。為衆儀憲法令
評議可有其沙汰。若背衆評仁体於在之者。隨咎之輕重。
可被処罪科。猶於及異儀者。可被訴公儀之奉行事

一 於衆中喧嘩口論出来之時は。左右方可有擯出。但後日
遂是非之糾明。非義落居之仁者。永代可被出交衆。於
寺并財産者。立仁体可被遣之。於同宿之輩者。小私財

以衆議可被付伽藍之造営。諸事理非決定之義。不可有
親疎偏頗事

右條々

内相府先日御法度御判之外。重所得 御意如件。

慶長六年仲秋十六日 円光寺元仲在判

鹿苑院承兌在判

金剛峯寺

衆徒中

とあり、日付の「慶長十八年」は「慶長六年」となっている。また
差出者の名があり「円光寺元佑」と「鹿苑院承兌」である。

27について本書と『御当家令条』の異同を見ると、表題の「法度」
は「諸法度」、第二条の「為私」は「私」、第三条の「非法於有之」は「非
法有之者」、日付は「十月四日」は「十月十四日」とある。

27は『本光国師日記』第八の慶長十七年十月十九日条に、

長谷寺法度

一 為学問住山之所化。不滿廿年者不可執法幢事

一 坊舍并寺領、為私不可有賣買事

一 所化衆不用能化之命、非法於有之者、可追放寺中事

右堅可守此旨者也

慶長十七年十月四日 御朱印

當寺能化坊

右十月十九日、上野殿々持せ給候、玄音坊へ渡之

とあり、十月四日付法度を十九日に下付したことが判明する。

同書第九の慶長十八年四月廿四日条に、

一 一書令啓上候。和州長谷寺小池坊。公方様へ御礼参上被

申候。可然様に御取成被仰上可被遣候者。悉可被存候。

於当地 大御所様へ御礼被申上。従是参上候儀に候。猶

期後音不能詳候。恐惶謹言。

金地院

卯月廿四日

本多佐渡守様人々御中

右之折紙長谷寺小池坊へ渡之。」

とあり、同寺の御礼参上に関する連絡である。

本多佐渡守正信は、江戸の秀忠につかえた重臣。息正純が駿府の家康につかえ、父子ともに家康・秀忠の信任厚かった。家康の死後ほどなく元和二年六月七日、七九歳で卒去『寛永諸家系図伝』第八、二六四頁。

28 について本書と『御当家令条』の異同を見ると、表題の「法度」は「諸法度」、第一条の「所化衆」は「所化中」、「不用」は「不聴」、「非法」は「非法之儀」、第三条の「所化衆中」は「所化中」、「統領」は「棟梁」、「不知時者」は「於不知之者」、「可擯出之事」は「可擯出事」とある。本書の第四条・第五条を『御当家令条』は欠く。後代に削除されたのであろう。宛名「当院能化坊」も『御当家令条』は欠いているが、後ろに「元和三年九月五日 秀忠公御朱印同前」と付記している。

28 『本光国師日記』第九の慶長十八年四月廿一日条に、

一 智積院法度

一 為学問之住山之所化不滿廿年者。不可執法幢事
一 所化衆不用能化之命。非法於有之者。可追放寺中事。
一 所化衆中結徒黨企公事者。統領人可追放之。若統領不

知時者。上座一人可擯出之事

一 當院領者。豊国領之内式百石也。全令院納。如有来。可為能化之進止事

一 寺屋敷上下并所化屋敷兩所。如先規不可有相違事。
右堅可守此旨也。

慶長十八年四月十日 御朱印

當院

能化坊

〔同日總持寺・小谷寺・竹生島各宛朱印狀 三通〕 〔略〕

右之御朱印四通、智積院依被申上相調遣之。慶長十八年卯月廿一日に渡之也。」

とあり、四月廿一日に智積院へ下付された四月十日付朱印狀四通の内の一通である。

つづいて四月廿三日条には、

一 一書令啓候。智積院為統目御礼下府候処に。上様一段と御懇に被成 御錠。今度於 御前。論議度々被 仰付。御感不斜候。御服米以下被遣。別而御懇之 上意に候。諸法度并諸末寺迄。御朱印被遣。仕合無殘所上洛被申候。秀頼様へも御取成被仰上可被遣候。然者智積院修理時分に成候由被申候条。左様之儀も被成御馳走被遣尤に存候。猶智積院可被得御意候。恐惶謹言。

金地院

卯月廿三日

片市正様人々御中

右之折紙智積院へ渡之。」

とあり、智積院の朱印状下付の札参りへの返札挨拶である。

「片市正」は豊臣秀頼につかえていた片桐且元である。

29は『本光国師日記』第九の慶長十八年五月廿一日条に、

「一 関東新義真言宗法度

一 為学問住山之所化。不滿廿年者。不可執法幢事

一 入学門室後、闕座之輩有之者。永可拔衆事

一 座位可為学問階臈次第、付。不遂住山不可着香衣事

一 諸末寺之僧衆。不可背本寺之命。語俗縁權門。企非法

事。付。不可奪取他寺之門徒事

一 不伺本寺。不可居住末寺事

右堅可守此旨者也。

慶長拾八年五月廿一日 御黒印

関東新義真言

諸本寺

右明星院に渡之。」

とあり、同日に明星院に下付されている。別に同日に山伏法度

「11」が、聖護院と三宝院の両門跡に交付されている。

30について、本書と『御当家令条』の異同を見ると、第一条の「相

定上者」は「相定之間」、「不可混雜」は「不可混乱」、「可被執行」は「可致執行」、「於十念者」は「於十念」、「曾不可有」は「曾而不可有」、第四条の「五重之血脉」は「五重血脉」、第五条の「浄土之修学」は「浄土修学」、「不到十五年」は「不至十五年」、「不可相傳事」は「不可有相傳事」、第六条の「其談所」は「其談義所」、「不到廿年」は「不至廿年」、「分別」は「差別」、第八条の「不弁」は「不解」、「深義者相憑文旗」は「深義着相憑之族」、「縦令又」は「縦亦」、「尤是為法*之因」は「最是為法衰之因」、第十条の「望色衣袈裟者」は「望色袈裟者」、第十二条の「縱雖老年」は「雖老年」、第十三条の「可致傳受事」は「可受傳受事」、第十八条の「於法門」は「於法問」、「至其外衆會者」は「至其外之衆會者」、「可着座之事」は「可着座事」、第十九条の「可州座」は「可列座」、第二十条の「問臈」は「同臈」、「可居上座事」は「可居座上事」、第二十一条の「盜高挙」は「恣高挙」、第二十二条の「不然」は「不然者」、第二十三条の「白旗流義」は「白旗流儀」、「大小集調」は「大小之集調」、第二十四条の「若為兩様同時者」は「若兩様共為同時者」、第二十五条の「末々諸寺家者」は「末々之諸寺家者」、「從其末寺」は「從其本寺」、「本寺之私曲」は「本寺私曲」、第二十六条の「対道俗」は「对在家人」、第二十七条の「廻種之謀計」は「同種々謀計」、「須魔之」は「須魔民之」、「速可令」は「連可令」、第二十八条の「修理」は「修覆」、第二十九条の「十二月」は「極月」、「延役事」は「延促事」、第三十条の「容殿」は「客殿」、第三十一条の「八月一日」は「八月朔日」、第三十三条の「因名」は「同名」、第三十四条の「不可有之」は「不可有之事」、第三十五条の「諸談林」は「諸檀林」、末尾の「三十五箇条」は「三十五箇之条々」とある。以下は、本書が

元和二年の法度であるため「任去元和元年七月日之先判之旨、弥可被相守其趣者也、元和二年十一月日 秀忠、増上寺、知恩院エモ被成下御文言同前」とあるのに対し、『御当家令条』は元和元年の法度として「永代可相守此旨、若於違背之仁者、随科之輕重、或可令流罪、或可脱却三衣者也、元和元乙卯七月日 御判、右ハ知恩院并増上寺、伝通院エ被下之」とある。両者の相違点の一部は修訂の結果であろう。『実紀』は『御当家令条』に拠っている。

31については、該当文を『本光国師日記』に見出せていない。

本多上野介正純は、『寛永諸家系図伝』によれば、家康・秀忠の信賴厚かつた正信の嫡男。家康の側近で仕え、下野国小山及び近江国の内で三万三千石を与えられる。慶長十九年の大坂冬の陣和陸後、大坂城の堀を埋め、壁を崩す。本城を残すのみとする。翌年の速やかな落城に至る。家康の没後、江戸で秀忠に仕える。元和五年、下野国宇都宮城・佐野、近江国の内で十五万五千石を与えられる。二十三年間、国政にあずかる。八年出羽国由利に配流される。なおも五万五千石をあたえられるが、固辞して千石のみをうけ、寛永十四年三月十日に由利で卒去（第八、二六五―七頁）。ただし『寛政重修諸家譜』卷六九三には「寛永元年四月佐竹右京大夫義宣にめしあづけられ、同国横手に居しなを千石を賜ふ。十四年三月十日かの地にをいて死す。年七十三」とある（第十一、二九頁）。金戒光明寺は、京都の黒谷にある浄土宗四箇本山の一つで、室町時代には公武の崇敬を得た。天正十三（一五八五）年に秀吉より寺領百三十石を与えられ、慶長十五（一六一〇）年に紫衣の寺に

なった（『国史大辞典』六、七二頁）。

32は『本光国師日記』第九の慶長十八年三月十五日条に、

二 参州設樂郡鳳来寺之事

一 渥美郡牟呂郷於公文名之内式拾貫。如前々之領掌畢。然者毎年從百姓前直可有収務事
一 横原山口之事。年来恣伐取。不勸其役云々。太以曲事也。如先規袖役可被申付事

一 諸講田年貢石米令無沙汰者。其在所之地頭代官奉行人江相届。可令催促。猶於無沙汰者。田地取放。新百姓可被申付事

一 門谷寺領中之輩。衆徒中仁不相断。取判形諸事被申付子細令難決者。可被注進交名・事

一 門谷并寺領之輩。從前々他之被官之事者。不及沙汰。自今以後不可属他之被官事

一 門谷寺領中之輩。他所に令居住由緒之由申。田地屋敷等競望事。堅令停止之。并地子等急度可被請取事

一 黒谷門谷大当下之輩。成他之被官。其者跡職令断絶之處。彼主人・田畠屋敷可為私領之旨申懸候段。甚以曲事也。急度注進之上可加下知事

一 諸職人大工自先規不相定之處。名大工職及問答修理以下相押云々。如往古為衆徒中計。不定其主可被申付事
一 寺家并寺領從前々為不入之地条。棟別反錢地檢其外臨時課役免許之事

一寺百性。四分一城普請急用之時者。為情以印判可申付事
一寺領并門谷竹木不可伐取。但城普請急用之時者。以印
判可申付事

一於寺領之内仁開駒仕合停止事

右條々。如何前無相違領掌畢者。修造勤行無怠慢。
可被抽国家安全精誠之狀如件。

天正八年

四月廿五日

家康御判

鳳來寺」

とあり、つづく三月十七日条に、

「一 書令啓上候。從參州鳳來寺惣中。將軍様へ為年頭之

御札。年行事參上被申候。可然様に御取成被仰上可被遣

候。今度於当府天台宗論議被 仰付。此僧も出座被申候。

上坂兵藏子息に而。大御所様被為懸 御詞候。従是直

に被致參上候。鳳來寺へ先年 大御所様御朱印被遣候。

此度 將軍様御黒印頂戴申度由候。様子被聞召届。被成

御馳走被遣候者。彼寺惣中悉可被存候。猶此僧可被得御

意候。恐惶謹言。

三月十七日

金地院

本多佐渡守様人々御中

鳳來寺不動坊に渡之。鳳來寺之年行事也。」

とあり、かつての家康朱印状を提示して新たに將軍秀忠の黒印
状を求めている事情が判明する。

33 から35までは、『本光国師日記』に元和元年七月分を欠くの
で、関連記事は見られない。

33 について、本書と『御当家令条』の異同をみると、表題は本書
の「浄土西山派」は『御当家令条』では「浄土宗西山派」、第一条の
「晴誦」は「暗誦」、第三条の「御書」は「御疏」、第五条の「両部之伝
授」は「両部伝授」、第八条の「為勸士」は「為勸士」、第九条の「仏法
也法共」は「仏法世法共」とあり、末尾に「御当家令条」は「右ハ粟生
光明寺依為無住、当麻禅林寺え被下之」とある。

34 について、本書と『御当家令条』の異同をみると、第一条の「匪
酋」は「酋匪」、末尾の「攸相定」は「所相定」、日付の「乙卯」は「乙卯
年」、下の「御朱印」は「家康公御朱印」とある。

35 については、34との異同を見ておく。表題は当然異なるとし
て、第一条の35「諸老門」は34「老門」、第五条の35「指出」は「相改
別紙録之」と二カ所の違いがある。

34・35は、36の前提でもある。

36は『本光国師日記』第三十八の寛永五年三月十三日条に、
「二月十三日。土井大炊殿ヨリ御使者。西之丸へ可罷出由
也。則出仕申候。大徳寺妙心寺出世之猥成義御穿鑿。大炊

殿。主計殿。信濃殿。各一所に御談合也。今度 東照權現
十三年・に御當被成候間。出世御押之内。少々御赦免可有
之歟。但シ大徳寺ハ。不謂御返答書ヲシテ。上様ト公事
ヲ仕候様成に候条。重可有御吟味之由也。妙心寺ハ無
異儀迷惑仕由ニ付テ。右之仕合ニテ。今度板内膳正殿指上
左。候。次テニ覚書被遣候案在左。并妙心ヨリノ請狀之案モ在

妙心寺出世之衆御免之覺

一 御朱印に入院開堂之儀式を相調可申旨に候之間。縦年
齡者三十年の修行之たり不申候共。入院開堂の儀を調。
定成に出世仕候衆ハ。此度 權現様御十三年につき御
免之事。

一 御朱印に三十年の修行畢て。出世可仕之旨に御座候之
間。此度五十歳にて出世いたし候衆者。可被成御免候。
廿歳より修行仕候へは。五十までは三十年の修行にあ
たり候之間。五十にて出世仕候衆者。御朱印にも大か
たちかひ不申候歟事。

一 入院開堂之義も不相調。居成ニ出世いたし。其上年も
五十之内にて仕候へは。兩條まで。御朱印もそむき候
間。不被成 御免之事。

一 從妙心寺出狀之案

當寺出世之儀。猥に有之付。被成 御押置候之處。今年
東照大權現十三回御祭礼之故。立入院之衆。并五十以上

繪旨頂戴之輩。被成 御赦免候。悉奉存候。自今以後。
堅可守 御朱印之旨候。万一違背之族有之者。如 御朱
印可被処罪科候。仍為後日如件。

寛永五

月 日

妙心寺

維那 奉行 住持

板倉周防守殿

とあり、つづけて大徳寺への文書も記されている。兩寺と幕府と
の著名な紫衣事件の一場面である。

37 について、本書と『御当家令条』の異同をみると、相違点が顕
著である。表題の「天下曹洞宗法度」は「曹洞宗法度」、第一条の
「非三十年」は「不在三十年」、「人而」は「僧不可」、第二条の「修行
致」は「修行者不可致」、第三条の「諸山許容事」は「諸山不可有許容
事」、第四条の「頭不」は「頭之後不」、「五年転衣事并」は「五年并」、
「致転衣」は「不可転衣」、第五条の「為末山」は「諸末寺不可違」、
「掟は法度之」、末尾の「此旨は違」、「可寺中追放」は「速可追放
寺中」とある。本書の「御朱印」は『御当家令条』では省き、代わり
に詳しい追記として「右御朱印、下総国関宿惣寧寺、武州越生龍穩
寺、遠州大洞院、依関東惣録事、被下之、常州富田大中寺へは後日
被下之。」とある。

そこで『本光国師日記』第七の慶長十七年七月十一日条に、
「天下曹洞宗法度

一不在三十年修行成就之人。立法幢事
一不在二十年修行。致江湖頭事

一寺中追放之惡比丘僧於諸山許容事

一致江湖頭不經五年轉衣之事。非修行未熟之□致□衣

一為末山背本寺之掟事

右條々。若於背此旨者。可追放寺中者也。

慶長十七年五月廿八日 御判

龍穩寺武州ヲコセ

總寧寺下總関 宿

大洞院遠州可 睡

右從曹洞宗出案書也。」

とある。本書との異同に注目したい。検討を経た結果であらう。

また同書第九の慶長十八年五月三日条に

「曹洞宗法度

一非三十年修行成就之人而立法幢事

一不遂二十年修行。致江湖頭事

一寺中追放之惡比丘於諸山許容事

一致江湖頭不經五年或轉衣或修行未熟之僧・轉衣事

一為末山背本寺・掟事

右條々於此違反之輩者。速可追放寺中者也。

慶長十七年

十月朔日

將軍様

御朱印

總寧寺
龍穩寺

右之御法度書。山脇五月三日に写ヲ被持来。留書置也。」
とあり、また同書第十七の慶長二十年六月廿八日条に、

「曹洞宗法度

一非三十年修行成就之人者。不可有法幢事

一不遂二十年修行者。不可致江湖頭事

一寺中追放之惡比丘。於諸山不可有許容事

一致江湖之後不經五年。・并修行未熟之僧不可轉衣事

一・末寺不可違背本寺之法度事

右堅可相守此旨者也。

大御所様

慶長二十年六月廿八日

御黒印

大寺

右これは。松薫大中寺へ入院候而。御札に上洛候。先

年總寧寺龍穩寺に御朱印を被遣候。將軍様之御朱印之

案。慶長十七年に被遣候を山脇被持来。案紙九冊目に

写置。其文言少々不可然候に付而。右のことく案紙書

直。上野殿へ相渡。去年大中寺へは御朱印不被取候に

付而。今度被遣候也。

右之案六月晦日に認遣ス。但廿八日吉日によつて。

廿八日之書付渡ス也。

此清書は富田勝兵へ被認候。後六月晦日に御印被為押。
二条御殿にて。浅井七平持て被出。則大中寺松薫へ渡候也。」

とある。ほぼ同内容だが、後者は文が少し修正されている。なお末尾の文中にある「案紙」とは『本光国師日記』の原題である。

38・39も『本光国師日記』には元和元年七月分を欠く。

38について、本書と『御当家令条』の異同をみると、第一条付の「非三十年」以下と第二条の「出世」以下は『御当家令条』では入れ替わり、第一条の末尾に「出世」以下（「付」はない）が、第二条に「非三十年」以下が置かれ、第四条の「諱」は「忌」、第五条の「派」は「流」、末尾の「違仏制」は「違干仏制」、「為宗門」は「且為宗門」、「相定訖」は「相定畢」、「配流」は「配流者也」、日付は「元年乙卯七月日」は「元乙卯七月」とあり、日付下の「御朱印」は「御当家令条」では省く。

39について、本書と『御当家令条』の異同をみると、第一条末尾の「之事」および第二条冒頭の「一」を、『御当家令条』は欠き、両者合わせて一条の形となる。第二条末尾の「法幢之事」は「法幢事」とある。第三条は、『御当家令条』では欠ける。第四条の「奏聞」は「奏聞」、末尾の「紫衣黄衣」は「紫衣」、「違仏制」は「干仏制」、「有之」は「有之者」、「依如件」は「仍如件」、日付は「元年乙卯」は「元乙卯」とあり、日付下の「御朱印」は「御当家令条」では省く。

『本光国師日記』第二十二の元和二年十月十一日条に、
「一同十一日。土井大炊殿。板倉伊賀殿。伊丹喜之助殿。閑斎。神縫殿。後藤宗恩来臨。朝食振舞風呂に候。伊賀殿。大炊殿双談共申也。寺社之御法度書共

一五山十刹諸山一通 一大徳寺 妙心寺付通

一永平寺 一 通 一高野山 竹法書之 惣持寺付

一真言宗 一 通 一浄土西山派 一通 竹法書之

一浄土宗 一 通 竹法書之

以上七通

一先鹿苑保長老。当鹿苑啤長老兩判にて。慶長十四年。古潤南禅寺之帖ヨリ 慶長十七年仁溪真如寺之帖まで。公帖無拝領以前。出世させ候。先例如此候間。御取成申候様にとの書物一通。右何も伊賀殿。大炊殿。金地院同時に可得。上意内談にて。右之書物共。以上八通閑斎に渡す也。保長老。啤長老之兩判之書物は。本文を渡す也。法度七通は案紙也。

保啤兩判之留書は。案紙の十九冊めに有之。

（付箋）案紙の十九冊と有之所ヲ正徳二壬辰ノ年公儀へ写差上には廿老冊と書写上候也」

とある。そのうちで本書に見える、24 高野山寺中法度条々以下、30 浄土宗諸法度、33 浄土西山派諸法度、34 大徳寺諸法度、35 妙心寺諸法度、38 永平寺諸法度、39 惣持寺諸法度などが、それぞれ対応するのではないか。

40 について、本書と『御当家令条』の異同をみると、第二条の「号当一檀那」は「号旧檀那」、「不可有之事」は「不可有事」、「可有之事」は「可有事」とあり、日付下の「上様御判」は『御当家令条』には欠ける。宛名は「当寺寺務御坊」は「当寺寺務一乘院殿」とある。

40 は、『本光国師日記』第八の慶長十七年九月廿七日条に、

「興福寺法度

一 坊舎并寺領為私不可有売買事

一 号舊檀那従俗方寺之裁判不可有之事。付。兎并新發意者。慥成後見可有之事。

一 衆徒如前々有来可順寺務之命事。

右堅可被守此旨者也。

慶長十七年九月廿七日 上様御判

當寺寺務御坊

右従一乘院殿。依有訴訟申調。一乘院殿へ直に渡之。」とあり、九月廿九日条に、

「一 興福寺諸法度之儀、御内存之通得 上意候処に。則被成御判候。被為守御ヶ条之旨。寺法堅可被仰付候。万一不用御法度之旨。於猥之輩有之者。任御注進次第。可得

上意候。此由可有御披露候。恐々謹言。

九月廿七日

一 乘院殿御門跡

中沼左京殿

と、交付の次第が判明する。

41 について、本書と『御当家令条』の異同をみると、表題末尾の「之事」は『御当家令条』では欠き、第三条の「住持外」は「住持之外」、「他競望」は「競望」、第四条と第五条の間に『御当家令条』では「一 為顕密之名室故、以学匠可被相統事」の一条が入る。第五条の「任先例之旨」は「任先例之旨」、「悪行所化」は「悪行之所化」、第六条の「不儀」は「不義」、日付の「十月」は「十一月」、日付下の「御黒印」は『御当家令条』では省く。

41 は、『本光国師日記』第九の慶長十八年三月廿一日条に、

「一 成菩提院領之事

一 近江国坂田郡柏原之内百五十石全可寺納。并山林境内門前諸役令免許訖。者守此旨。代々堅修理勤行等。不可有怠慢者也。仍如件。

慶長十三年戊申十月四日 御黒印

一 成菩提院法度之事。

一 天下安全御祈念長日護摩不可有油断事
一 専教觀二道可・執行佛法事

一院領之儀。其住持外不可有他競望事
 一院領之売買質券等可被禁止事
 一仕先例之旨。悪行所化速可被追放事
 一門前之者於成不儀者。如先規從住持可被申付事
 右條々。堅可相守者也。仍如件。
 慶長十三年戊申十月四日 御黒印

右二通之御黒印。江州成菩提院持參候而。拝見候間。
 写置候。

一同〔廿二〕日。近江国坂田郡成菩提院御札相濟。知行百五十石。当代之御黒印有之。天台宗也。大久保石見殿代官所也。……大久保石見殿内平岡因幡。和田河内。鈴木左馬折紙有之。」

同年三月晦日条には、

「一 一書令啓上候。江州成菩提院。將軍様へ為御札參上被申候。可然様に御取成被 仰上被遣候者。悉可被存候。於当地。大御所様へ御札被申上。從是被罷下候。次に先年彼寺へ 大御所様御黒印被遣候。其趣に而 將軍様御黒印頂戴仕度由被申候。様子被聞召。被成御馳走可被遣候。尚成菩提院可被得御意候。恐惶謹言。

金地院

三月晦日

本多佐渡守様人々御中

右之折紙成菩提院へ遣ス。」

同年四月朔日条には、

「一同朔日。成菩提院江戸々著府。本佐州卯月十六日之返書来。成菩提院統目ノ 御朱印頂戴也。
 一 近江国坂田郡柏原郷之内百六拾石余事。并坊舍門前山林境内諸役免除等。次院内法度以下共以任去慶長「十」参年拾月四日先判両通之旨。永代不可有相違者也。仍如件。
 慶長十八年四月六日 御直判

成菩提院

本佐州返札

一 柏原之成菩提院之儀に付而。預尊書に候趣披露仕候処に。御前御仕合能。次目之御判被遣候間。様体御心安可被思召候。委曲此御僧可被 仰達候様。不具候。恐惶謹言。

本多佐渡守

卯月十六日

正 信判

金地院尊報

右之折紙成菩提院へ遣之。」

とあり、朱印状交付の経過が記されている。
 前例として持参した慶長十三年の二通は家康の黒印状であり、今回あらためて当代すなわち秀忠の黒印状二通を得た。

42について、本書と『御当家令条』の異同をみると、第一条の「功勞」は「切勞」、「有用捨」は「為用捨」、第五条の「続連署」は「結連署」、「非儀」は「非義」、「可令追放者也」は「可被追放事」、末尾の

「可相守此旨者也」は「可相守者也」とあり、日付下の「御朱印」を『御当家令条』は欠く。

42は、『本光国師日記』第八の慶長十七年十月十七日条に、
「一同日。信濃川中島戸隠山使僧来。顕光寺十月吉日状来。白布老足来。四成坊十月九日状来。」

戸隠山神領

信濃国水内郡栗田村二条上楠川。合式百石者。先寄進也。
上野村栃原村内下楠川宇和原奈良尾。合八百石者。新寄進。
都合千石。内別当五百石。社僧三百石。社家式百石。全可
寺納。并社領門前境内山林竹木為守護不入。令寄付上者。
永代不可有相違者也。弥可抽天下安全之祈禱狀如件。
慶長拾七年五月初日 御朱印

戸隠山法度 [42]

一 顕光寺三院之衆徒不伝受灌頂者。不可叶住坊。但從再興
之砌。有功勞住山衆徒者。一代可為用捨事
一 從先師雖為相續。坊室。其身行儀有破戒之沙汰者。遂糺
明於実犯露顯者。可追放寺中事。
一 為平坊。從他院坊職拘持儀。一切可為禁止事
一 寺役勤行等。并伽藍僧坊修造之砌。從大坊可申付事
一 衆徒猥統連署與徒党。企非儀者。張本之者速可令追放事
右條々。堅可相守此旨者也。

慶長拾七年五月初日 御朱印

とあり、五月初日付朱印狀二通の内容が判明する。

つづいて十月廿一日条に、

「一 芳札令披見候。為御音信白布老端芳惠過分存候。先度者
俄に令上洛。御帰国之刻御暇を不申候。御朱印御頂戴候
て珍重存候。尚御使僧へ申入候間。不能詳候。恐々謹言。
十月廿一日

戸隠山

顕光寺貴報

として崇伝からの返書の控がある。

四、諸神社

43・44・45はいずれも該当文を『本光国師日記』で検出できて
いない。

43について、本書と『御当家令条』の異同をみると、表題は本書
の「定 男山八幡宮」は「掟」、第一条の「放生川」は「放生河」、地上
江は地上、「申付ル」は「申付」、第二条の「相勤上」は「相勤之」、
「相改之」は「改之」とある。第三条「一 令居住于他所、社領之内
於知行輩者、是又可令毀破事を『御当家令条』は欠く。第四条の
「地下人」は「地下人等」、「跡式事」は「跡職之事」、「禁制事」は「制禁
事」、第五条の「鷹仕」は「有放鷹之」、「可申断之」は「可申断」、「濫之
族」は「濫族」、「註交名」は「注交名」、末尾の「弥不可」は「弥以永不
可」、「者也」の下に『御当家令条』は「仍如件」とあり、「御黒印」は欠
く。宛名に著しい相違があり、本書の「田中・新善法寺、壇・善法

寺」は「御当家令条」では「新善法寺」のみである。『実紀』も後者の「新善法寺」のみを記す。本書が原文の形をとどめており、『御当家令条』の文には、後代の手がいれられているものと見たい。

なお、『本光国師日記』第八の慶長十七年九月廿九日条に、

一 九月廿九日。八幡山之式部下^{自分五十足持参候}。八幡惣中九月廿一日条

之状来。青銅百疋下。石橋坊八月四日之状来。安樂寿院より。繼目之 御朱印被申越候。青銅百疋来。八幡式部言ツカル。南禅寺真乗院七月廿九日之状来。善法寺御朱印之事申来。西城市兵へ後室文八月五日来。善法寺 朱印儀申来。」

とあり、八幡山の式部・善法寺が朱印状下付を要望していることが見える。

44 について、本書と『御当家令条』の異同をみると、表題の「五師領分」は「五師預分」、第二条の「三人充」は「三人宛」、唐院新坊江納之は「奥院新院え」、第三条の「七升充」は「七升宛」、前之月」は「前月」、第四条の「所之」は「所々」、御修理事」は「御修理之事」、其外右之」は「其外之」、可相究事」は「可究事」、第五条の「同前事」は「同断事」、第六条の「可相極事」は「可相究事」、第七条の「其年之物成」は「其年物成」、第八条の「三人仁」は「三人」、一人三」は「一人」、第九条の「四人仁」は「四人」、一人三」は「一人」とあり、宛名の「興福寺役者中」を「御当家令条」は欠く。

45 について、本書と『御当家令条』の異同をみると、第七項の「七

千七百弍拾一石余」は「七千七百廿壹石」、「諸院諸坊」は「諸院諸坊領」、第八項の「神官領」は「神宮領」、第十一項の「祈禱所六ヶ之屋」は「祈禱百六ヶ之屋」、「法事之入用」は「法事入用」、末尾の「右可全社納」は「右全社納」、「五師預分」は「五師領分」とあり、日付下の「安藤対馬守 土井大炊頭 板倉伊賀守 本多上野介」は「秀忠公御朱印」とある。

安藤対馬守は重信。『寛永諸家系図伝』によれば、慶長九年に従五位下対馬守に叙任し、翌年上野国吉井で五千石、十六年奉行職に列し、天下の政務をあづかりきく(五五歳)。十七年、下総国小見川・下野国結城で一万石を加増され、合せて一万五千石。元和元年八月、大坂の陣の功績で、常陸国鹿島・下野国結城・近江国山上で二万石を加増され、合せて三万五千石となる。のち五年十月に上野国高崎で加増あり、都合五万六千石余。七年六月廿九日に死去(六五歳)。

土井大炊頭は利勝。(前掲)

板倉伊賀守は勝重。同書によれば、弟定重が遠州高天神で戦死した後、家康の命で還俗し、駿府の町奉行となる。家康が関八州を領有すると江戸の町奉行となり、関ヶ原合戦以後の天下統一統で家康の命により京都の所司代となる。慶長八年、従五位下対馬守に叙任する。のち元和九年、従四位下侍従に叙任。寛永元年四月二十九日に京都で卒する(八十歳)。

本多上野介は正純。(前掲)

五、異國

46は、『本光国師日記』第五の慶長十六年九月廿一日条および『異国日記』に、

一 日本国 源家康 啓、

呂宋国主 足下、

其国吾邦相通者已久矣、往来之商船売買已下相互不可有疎志也、所来土宜令領納、厚意不淺也、不宜、

慶長十六年龍集辛亥季秋日

「御朱印」〔異国日記にあり〕

.....

御朱印案文〔異国日記 欠〕

自五和使者到来、黒船欲来朝之由、不可有異儀也、売買法度以下如前規可無相違者也、若違乱之輩於有之者、可處其罪、宜可承知此旨也、

「慶長十六、辛亥、季秋日」〔異国日記にあり〕

「御朱印」〔異国日記にあり〕

黒 船

〔以下、異国日記のみ〕

右両通之御朱印、円光寺被相認、伝ハ所勞故、於臥内、

慶長十六、九月廿一日ニ、案書披見也」

とあり、このルソンへの朱印状の作成経過がより明らかになる。この朱印状二通は円光寺元佑が起草し、崇伝は病臥していたので九月廿一日に案書を披見している。

村上直次郎校註『異国日記抄』明治四四年、増訂版昭和四年には、「是年九月十五日、家康がルソンの使者を引見し、十月三日、

之に答書を交付し、腰刀脇刀各一柄を贈りしこと、駿府記に見えたり。此時使者の献ぜし品に対する領収書は、異国往来に載せたり」

とある。さらに「五和」について

「ポルトガル領インドの首府ゴア Goaなり、是より先き、慶長十四年夏、来朝せし葡船の長ベッソアが、マカオの司令官たりし時、有馬侯の家臣同地に於て遭難せし事あり、生存者は司令官の処分を憤り、帰朝の上之を有馬侯に訴へたり、有馬侯は又之を幕府に訴へたれば、幕府は有馬侯に命じ、ベッソアを訊問して相当の処分をなさしめんとせしが、ベッソア招きに応じて上陸せざりしにより、有馬侯は長崎奉行と謀り、同人を捕縛せんとせり、ベッソアは此報を得、遽に出版せんとせしが、逆風の為め港を去ること能はず、日本船に包囲せられ、三日間戦ひし後、葡船誤りて火を發せしかば、終に火薬室を爆発せしめて自沈し、船長始め船員多く死せり(大日本史料第十二篇之六、第七九八頁以下参看)

ポルトガルの日本貿易は、右の事件の為め一時杜絶せしが、当時マカオの存在は、一に日本貿易に頼る有様なりしが故に、同市は貿易の復活を希望し、艦隊司令官ドン・ヌーノ・ソトマヨール Don Nuno Sotomayor をゴア総督の使者として日本に遣せり、ソトマヨールは長崎に入港せば、先年の如き災厄あらんことを恐れ、薩摩に來り、島津侯の尽力を求め、その家臣に導かれて駿府に至り、七月朔日、家康に謁し、次で江戸に至りて秀忠に謁せり、この使節は、曩にマカオ

に於て、日本人に対して為したる処分を弁解し、葡船焚沈の不当を論じて賠償を求めしが、幕府は責を全然船長・ペッソアに帰し、終にその要求を容れざりき、只再び貿易を開くことは之を許可し、後此朱印を与へたり、此時大使の献上せし品は、羅紗十端精撰生絲百斤、黄金の盃一個、金時計一個、其他珍奇なる裝飾品なりし由、當時のオランダの記録に見えたり、(大日本史料第十二篇之八、第五二五頁以下參看) 本多正純、後藤光次等が右使節に与へし書翰、羅山先生文集第十二巻に見えたり、(以下、略)

とある。事件後、通商再開のために發給された朱印状である。

47 は、『異国日記』に

「慶長十八癸丑十二月廿二日之夜、於江戸新城、大御所様被仰出、伴天連追放之文製之、其夜從鷄鳴至于曙天、文成矣、翌廿三、獻御前、願文云、

乾為父、坤為母、人生於其中間、三才於是定矣、夫日本者、元是神國也、陰陽不測、名之謂神、聖之為聖、靈之為靈、誰不尊崇、況人之得生、悉陰陽之所感也、五體六塵、起居動靜、須臾不離神、々非求于他、人々具足、箇々圓成、迺是神之體也、又稱仏國不無據、文云惟神明応迹國、而大日之本國矣、法華曰、諸佛救世者、住於大神通、為悅衆生、故現無量神力、此金口妙文、神與佛其名異、而其趣一者、恰如合符節、上古緇素各蒙神助、航大洋而遠入震旦、求仏家之法、求仁道之教、孜孜屹々、而

内外之典籍負將來、後來之未學、師々相承、的々傳受、佛法之昌盛、起越於異朝、豈是非佛法東漸乎、愛吉利支丹之徒党、適來於日本、非啻渡商船而通資財、叩欲弘邪法、惑正宗、以改城中之政号、作己有、是大禍之萌也、不可有不制矣、日本者神國仏國、而尊神敬仏專仁義之道、匡善惡之法、有過犯之輩、隨其輕重、行墨鼻、非宮大辟之五刑、礼云、喪多而服五、罪多而刑五、有罪之疑者、乃以神為証、誓定罪罰之条目、犯不犯之區別、纖毫不差、五逆十惡之罪人者、是仏神三宝、人天大衆之所棄捐也、積惡之餘殃難逃、或斬罪、或炮烙、獲罪如是、勸善懲惡之道也、欲制惡惡易積、欲進善善難保、豈不加炳誠乎、現世猶如此、後世冥道、闇者之呵責、三世諸佛難救、歷代列祖不奈、可畏可畏、被伴天連徒党、皆反伴政令、嫌疑神道、誹謗正法、殘義損善、見有刑人、載欣載奔、自拜自礼、以是為宗之本懷、非邪法何哉、冥神敵佛敵也、急不禁後世必有國家之患、殊司号令不制之、却蒙天譴矣、日本國之内寸土尺地、無所措手足、遠掃禳之、強有違命者、可刑罰之、今幸受天之詔命、主于日域、秉國柄者、有年於茲、外顯五常之至德、內帰一大之藏教、是故國豊民安、經曰、現世安穩、後生善處、孔夫子亦曰、身體髮膚受于父母、不敢毀傷孝之始也、全其身乃是敬神也、早斥彼邪法、弥昌吾正法、世既雖及澆季、益神道仏法紹隆之善政也、一天四海宜承知、莫敢違失矣

慶長十八、龍集癸丑、臘月 日、

御朱印

右清書者大鷹也、將軍秀忠様之御印也、日本國中諸人可存此旨之御錠也、板倉周防守持是上洛也、追放之總奉行大久保相模守也、相州次之正月三日、立小田原上洛、其後御改易也、相州蟄居江州小邑、

とある。『異国日記抄』の註には、冒頭の「伴天連」について

「バゼ」著日本基督教史には、皇帝ノ命令ハ千六百十四年、一月二十七日、京都ニ於テ公布セラレタリ、とあり、同日は慶長十八年十二月十八日に当れり、何か誤あるべし、

當時京都には、耶穌会のパードレ八名、イルマン七名ありしが、千六百十四年二月十一日(慶長十九年一月三日)、七日以内に出發して長崎に至るべしとの命を受け、同月二十一日出發し、伏見のサン・フランシスコ派の宣教師、及び大坂の耶穌会、并にサン・フランシスコ派のの宣教師、其他同宿及び重なる基督教徒等と共に、十一隻の船に乗りて大坂を發し、三月十一日長崎に着せり、豊後肥前その他にありし宣教師も、次で長崎に集り、同年十一月上旬、一同日本を去れり、その内マニラに向ひて出發せしは、耶穌会員二十三名、ドミニコ派員二名、フランシスコ派員四名、アグスチノ派員四名にして、マカオに向ひしは、耶穌会員六十二名なりき、右の外に、密に日本に滞在せしもの、耶穌会員二十七名、ドミニコ派員七名、フランシスコ派員七名、アグスチノ派員六名なりき、マニラに追放せられし日本人の内には、内藤飛騨守如安、高山右近大夫友祥等もありき」

とある。伴天連追放令の直接の効果はこの通りである。

末尾にみえる「板倉周防守」についての註は

「板倉重宗は、天正十二年に生れ、慶長十四年、従五位下周防守に叙任せられたり、元和六年、父勝重に代りて京都の所司代となり、承応三年に至るまで、三十五年間其職に在りて、能く其任を尽せり、明暦二年十二月一日病没せり」とあり、

「大久保相模守」についての註は「大久保忠鄰なり、忠鄰は、天文二十二年に生れ、幼より家康に仕へて屢々功あり、文禄二年小田原に移り、七万石を食み、慶長五年相模守に任ぜられたり、忠鄰は、家康・秀忠に仕へ威望高かりしが、本多正信之を忌み、慶長十八年基督教徒処分の為め京都に至りし不在中に乘じ、其邸を搜索し、謀叛の証拠を得たりと称して、其封を奪ひ、之を江州に配せり、忠鄰は、慶長十九年正月十七日京都に入り、宣教師を放逐し、会堂を毀ちて、教徒の処分に従事せしが、二月二日、所司代より右の命を聞き家臣を江戸に帰らしめ、自ら配所に就けり、後其冤を弁せしが、遂に聴かれず、寛永五年二月配所に歿せり」

とある。伴天連追放令の執行総指揮者であつた大久保相模守忠鄰が、この機会を利用して失脚させられたのは著名な事実である。

『寛政諸家系図伝』によれば、大久保忠隣は、永禄六年に十一歳で家康につかえ、多くの戦いで武功をあげるが、「天正のはじめより奉行職に列し、御分国ならびに他国往來の奉書そのほかの諸事はを役す」文禄二年に家康の命で秀忠につかえ執事となり、父

の死後、つづいて小田原城を守り七万石を領有する。秀忠の家督就任に功績あつたが、慶長十九年正月「ゆへありて御勘氣をかうふり、江州に左遷す」寛永五年に七十六歳で死去。(第九、二七、三〇頁)

47は、海老沢有道により、金地院所蔵『異国日記』初巻を底本とし、「排吉利支丹文」として『岩波思想大系』25 キリシタン書 排耶書『岩波書店 一九七〇年』の中に、排耶書の一として収載された。海老沢の解説によれば、本書は幕末に水戸藩が編集した排耶叢書『息距篇』に収められ、『属文階梯 排吉利支丹文』と題されているが、元来、キリシタン禁庄方針のもとで、幕府が一六二二(慶長一七年八月)に天領・旗本への禁令を發した翌年十二月二十二日(一六四四年一月三日)に崇伝に命じて起草させ、夜明けまでかかつて書き上げた「伴天連追放之文」を將軍秀忠に献じ、朱印が捺された上で、「日本国中の諸人、この旨を存すべきの御詔」として、京都所司代板倉重宗に下され、追放總奉行大久保忠隣とともに上洛させ、元和・寛永に及ぶ徹底的キリシタン弾圧を開始する宣言文ともなったものである(六三六頁)。その文は以下の通りである。

「乾為父、坤為母、人生於其中間、三才於是定矣。夫日本者、元是神国也。陰陽不測、名之謂神。聖之為聖、靈之為靈、誰不尊崇。況人之得生、悉陰陽之所感也。五体六塵、起居動靜、須臾不離神。々非求于他、人々具足、箇々円成、廼是神之体也。又稱仏国。不無拠。文云、惟神明応迹国而大日之本国矣。法華曰、諸仏救世者、住於大神通、為悅衆生故、現無量神力。此金口妙文、神与仏其名異而、其趣一者、恰如合符節。上古緇素各蒙神助、航大洋而遠入震旦、求

仏家之法、求仁道之教、孜孜矻矻、而内外之典籍負將來。後來之末學、師々相承、々々伝受、仏法之昌盛、起越於異朝。豈是非仏法東漸乎。爰吉利支丹之徒党、適來於日本。非甞渡商船而通資財、叨欲弘邪法、惑正宗、以改城中之政号作己有。是大禍之萌也。不可有不制矣。

日本者神国仏国而尊神敬仏、専仁義之道、匡善惡之法。有過犯之輩、隨其輕重行墨劓刑、宮大辟之五刑。礼云、喪多而服五、罪多而刑五、有罪之疑者、乃以神為証誓。定罪罰之条目、犯不犯之區別、纖毫不差。五逆十惡之罪人者、是仏神三宝、人天大衆之所棄捐也。積惡之余殃難逃。或斬罪、或炮烙、獲罪如是。勸善懲惡之道也。欲制惡、々々易積、欲進善、々々難保。豈不加炳誠乎。現世猶如此。後世冥道闇老之呵責、三世諸佛難救、歷代列祖不奈。可畏々々。

彼伴天連徒党、皆反忤政令、嫌疑神道、誹謗正法、殘義損善。見有刑人載欣載奔、自拝自礼。以是為宗之本懷、非邪法何哉。実神敵仏敵也。急不禁後世必有国家之患。殊司号令。不制之、却蒙天譴矣。日本国之内寸土尺地、無所措手足、遠掃禳之。強有違命者可刑罰之。今幸受天之詔命、主于日域、秉国柄者有年於茲。外顯五常之至德、内帰一大之藏教、是故国豊民安。經曰、現世安穩後生善也。孔夫子亦曰、身體髮膚受于父母、不敢毀傷孝之始也。全其身乃是敬神也。早斥彼邪法、弥昌吾正法、世既雖及澆季、益神道仏法紹隆之善政也。一天四海宜承知。莫敢違失矣。

慶長十八龍集癸丑臘月 日(四九一頁)

本書は、金地院提出記録で、単に寺院に関する諸法度をあつめたものというより、江戸幕府確立期の法制整備を如実に物語る法令集という性格を持つ。吉宗による法制関係記録の編集・整備、法典の編纂までは、幕府における法令の保存整理がどのようなものであったのか。度重なる火災による記録類の焼失も大前提としなければならぬが、幕府はしばしば先例記録を当事者・関係者に提出させている。それによつて、ときに手元の記録の不備を補い、ときに手元の控えとの照合を試みたのであろう。本書の内容で、最も新しいのが寛永十二年の評定所御定書であることに留意しておきたい。この前後に、老中・「六人衆」(のちの若年寄)以下の、その後の幕府職制が本格的に整備されていく。本書にまとめられた諸法度の制定過程のような、將軍・大御所と側近による自然形成的・臨機応變的・暫定的な立法・行政体制が大きく変化していく。まさに萌芽・準備期の幕府体制が安定期の幕府職制に変容していく段階までの、金地院の僧侶が直接にかかわつたおもな法制を収めるといえる。関ヶ原の戦いで、豊臣秀吉なき後の、政權爭奪に勝ち、征夷大將軍に就いた徳川家康は、ほどなく秀忠に將軍を譲り、世襲化を明瞭にするとともに、その支配に全面的には服さない秀頼を中心とする豊臣家の存在に制約されていた時期を、かりに幕府支配体制の初期、萌芽・準備期とみなせば、元和元年に各支配階層にあてて一斉に發布された諸法度は、新たな全国支配体制の確立を告げるものであつたし、それにづく元和・寛永期を通して、具体的な支配機構の整備が推進された時期は、すなわち確立期と見てもよからう。

金地院の歴代がかかわつた幕政の一端、例えば寺社統制は、京都所司代板倉氏と崇伝の体制から、寺社奉行と京都所司代に移っていく。

横田冬彦『日本の歴史16 天下泰平』(講談社 二〇〇二年)は、「第一章 乱世の終焉」で、本書の主要な記事とりわけ武家諸法度、禁中並公家諸法度、また家康を「神に祝う」儀式、諸宗寺院法度、諸宗出世法度などについて歴史的意義を詳述している。現時の研究段階を示す好著である。

追記

迂闊にも福井保『祠部職掌類聚』(解題)『内閣文庫所蔵史籍叢刊13 祠部職掌類聚』(汲古書院昭和五七年)に、静嘉堂文庫所蔵の旧松井文庫本に大河内家旧蔵の『諸寺社御条目類』(内題御条目類留)七卷七冊の存在を指摘し、内閣文庫本の第一冊が『御条目類留』第四卷、第二冊が第二卷と同一との記載があり、その後、静嘉堂文庫で実見していたのに、全く失念し、先に発表した目録の補訂も行わないまま、本稿の校了をむかえてしまった。あらためて精査した上で、補訂したい。

ちなみに留書四の本文冒頭には高野山の塔頭名が記され、本文としては真言宗関係および高野山関係の諸法度が収められている。やはり高野山提出の記録に拠るようである。

(橋本 久)